

脇山VII

—県営圃場整備事業に伴う野中遺跡第1次調査報告—

2013

福岡市教育委員会

WAKI

YAMA

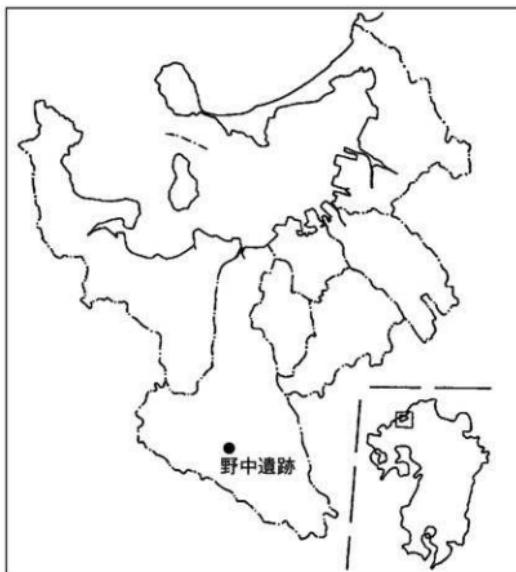
脇

山

VII

—県営圃場整備事業に伴う野中遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1196集



遺跡略号

NNA1

遺跡調査番号 9161

2013

福岡市教育委員会



野中遺跡 →

(1) 臨山地区（南東から）



(2) 1-II 地点全景（西から）

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和61年度から平成4年度にかけて実施された早良区脇山地区圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成3年度に実施した野中遺跡の調査成果を報告するものです。調査では旧石器時代から中世にいたる数多くの資料を得ることができ、脇山地区の歴史を解明する上で、大きな手がかりとなると考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地元改良区をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区脇山地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、野中遺跡1次調査（調査番号9161）の報告書である。調査前に実施した詳細分布調査（調査番号9101）の成果も一部報告する。なお整理報告は経済観光文化局で行った。
1. 本書に用いた遺構実測図は池田祐司・榎本義嗣（以上調査担当者）が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は池田、榎本が撮影した。なお航空写真は有限会社空中写真企画（檀睦夫）による。
1. 出土遺物の実測図は池田のほか、石器を山口譲治、山口朱美が作成した。製図は、米倉秀紀、山口朱美、池田が行った。出土遺物の撮影は池田が行った。
1. このほか報告書作成には美濃部多見、村松睦美が関わった。
1. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から $6^{\circ}21'$ 西偏する。
1. 遺構の種類に応じて遺構番号の頭に記号を付した。
- SB（掘立柱建物柱）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）
1. 遺物番号はすべて通し番号とし、登録番号の下1~4桁と一致する。
- 土器実測図では、おむね1/6弱以上のものについては反転復元を行った。
1. 石材の蛍光X線分析は福岡市埋蔵文化財センターで田上勇一郎が実施した。
1. 執筆は附編を田上勇一郎が、他を池田が行った。
1. 編集は池田が行った。
1. 本書に係る図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管予定である。

脇山地区調査一覧

調査番号	遺跡名 (調査)	次数	遺跡略号 (調査)	報告書	所在地	地図番号	対象面積 (ha)	調査面積 (m ²)	調査開始	調査終了
8643	脇山A遺跡	1	WKA	236	脇山字石塚・大栗	早良10脇山	45	56000	S61.10.21	S62.1.14
8722	脇山A遺跡	2	WKA	236	大字脇山会田・川原田	早良10脇山	50	50000	S62.8.4	S62.12.28
8816	脇山A遺跡	3	WKA	236	脇山字会田・石塚	早良10-17脇山・内野	11.4	66360	S63.9.26	S63.12.15
8932	谷口遺跡	1	TNG	269-311	大字脇山宇谷口・内山	早良18西	5.1	22931.0	H1.7.1	H2.2.8
8933	脇山A遺跡	4	WKA	269-311	大字脇山字会田	早良10脇山	7.4	133590	H1.10.30	H2.2.3
9015	脇山A遺跡	5	WKA	312	大字脇山大栗・小ノ原	早良17内野	14.4	187180	H2.5.23	H2.12.28
9101	脇山分布調査	WKA	344	大字脇山野中・広田	早良10脇山・早良18西	187	187180	H3.4.1	H3.10.14	
9160	脇山A遺跡	6	WKA	344	大字脇山広田	早良10脇山	37430	H3.4.18	H3.10.14	
9161	野中遺跡	1	NNA	1189	大字脇山野中	早良10脇山	85	68490	H3.4.18	H3.10.14
9162	大門遺跡	1	DMN	344	大字脇山字大門	早良10脇山	3120	H3.4.18	H3.10.14	
9215	脇山A遺跡	7	WKA	386	大字脇山	早良10脇山	89000	H4.4.13	H5.10.16	
9271	栗尾B遺跡群	1	KRB	386	大字脇山栗尾	早良10脇山	38450	H4.5.20	H4.10.16	
9272	脇山分布調査	WK	386	大字脇山栗尾	早良10脇山	120	42620	H4.4.13	H4.5.14	
9372	脇山分布調査	WK	年報8-386	大字脇山栗尾	早11門戸口		14300	H5.4.16	H5.4.30	
9373	脇山分布調査	WK	年報8-386	大字脇山栗尾	早11門戸口		12610	H5.10.27	H5.11.8	
0470	脇山A遺跡	8	WAK	半報19	大字脇山1729、1730	早良10脇山	100m ²	780	H16.12.8	H16.12.18

目 次

I	はじめに.....	1
1. 調査の経緯と経過	1	
2. 調査組織	1	
3. 立地と環境	2	
4. 試掘調査	4	
II	野中遺跡第1次調査の記録	7
1. 調査の概要	7	
2. 1-I 地点の調査	7	
3. 1-II 地点の調査	10	
1) 上層の遺構と遺物	11	
2) 下層の遺構と遺物	18	
4. 1-III 地点の調査	66	
5. 1-IV 地点の調査	69	
6. 1-V 地点の調査	71	
7. 2地点の調査	72	
8. 3地点の調査	90	
9. 小結	101	
附編	野中遺跡出土の灰色～乳白色黒曜石について	104

挿図目次

Fig.1	野中遺跡位置図 (1/50000)	2
Fig.2	脇山地区圃場整備事業地および遺跡群 (1/15000)	4
Fig.3	野中遺跡調査区位置図 (1/2500)	5
Fig.4	試掘調査上層断面 (1/80)	6
Fig.5	試掘調査出土遺物実測図 (1/3)	6
Fig.6	1-I、1-II 地点上層遺構配置図 (1/400)	8
Fig.7	1-I 地点焼土坑実測図 (1/40)	9
Fig.8	1-I 地点出土遺物実測図 (1/3、1/2、1/1)	10
Fig.9	1-II 地点土坑実測図 (1/40)	11
Fig.10	1-II 地点土坑出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig.11	1-II 地点焼土坑実測図1 (1/40)	14
Fig.12	1-II 地点焼土坑実測図2 (1/40)	15
Fig.13	1-II 地点焼土坑出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig.14	1-II 地点溝出土遺物実測図 (1/3)	16

Fig.15	1-II 地点上層出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig.16	1-II 地点下層遺構配置図 (1/400)	19
Fig.17	1-II 地点下層遺物分布図 (1/400)	19
Fig.18	1-II 地点土層実測図 (1/80)	20
Fig.19	1-II 地点下層遺構実測図1 (1/30)	21
Fig.20	SK038、SK039出土土器実測図 (1/3)	22
Fig.21	SK040出土土器実測図 (1/3)	24
Fig.22	SK041出土土器実測図 (1/3)	25
Fig.23	SK042出土土器実測図 (1/3)	26
Fig.24	1-II 地点下層遺構実測図2 (1/60)	27
Fig.25	SK060、061、063、064、065出土土器実測図 (1/3)	28
Fig.26	SK066出土土器実測図 (1/3)	29
Fig.27	SK069実測図 (1/30)	30
Fig.28	SK069出土土器実測図 (1/3)	31
Fig.29	SK073、072実測図 (1/60)	32
Fig.30	SK070、073、074出土土器実測図 (1/3)	33
Fig.31	KL23-24グリッド出土土器実測図1 (1/3)	34
Fig.32	KL23-24グリッド出土土器実測図2 (1/3)	35
Fig.33	KL23-24グリッド出土土器実測図3 (1/3)	36
Fig.34	1-II 地点下層遺構出土石器実測図1 (1/1)	37
Fig.35	1-II 地点下層遺構出土石器実測図2 (1/1、1/2)	38
Fig.36	1-II 地点下層遺構出土石器実測図3 (1/1、1/2)	39
Fig.37	1-II 地点包含層出土土器実測図1 (1/3)	41
Fig.38	1-II 地点包含層出土土器実測図2 (1/3)	43
Fig.39	1-II 地点包含層出土土器実測図3 (1/3)	44
Fig.40	1-II 地点包含層出土土器実測図4 (1/3)	45
Fig.41	1-II 地点包含層出土土器実測図5 (1/3)	46
Fig.42	1-II 地点包含層出土土器実測図6 (1/3)	47
Fig.43	1-II 地点包含層出土土器実測図7 (1/3)	49
Fig.44	1-II 地点包含層出土土器実測図8 (1/3)	50
Fig.45	1-II 地点包含層出土土器実測図9 (1/3)	51
Fig.46	1-II 地点包含層出土土器実測図10 (1/3)	52
Fig.47	1-II 地点包含層出土土器実測図11 (1/3)	53
Fig.48	1-II 地点包含層出土土器実測図12 (1/3)	54
Fig.49	1-II 地点包含層出土土器実測図13 (1/3)	55
Fig.50	1-II 地点包含層出土土器実測図14 (1/3)	57
Fig.51	1-II 地点包含層出土土器実測図15 (1/3)	58
Fig.52	1-II 地点包含層出土土器実測図16 (1/3、1/2)	59
Fig.53	1-II 地点包含層出土石器実測図1 (1/1)	60
Fig.54	1-II 地点包含層出土石器実測図2 (1/1)	61

Fig.55	1-II 地点包含層出土石器実測図3 (1/1)	62
Fig.56	1-II 地点包含層出土石器実測図4 (1/2, 1/1)	63
Fig.57	1-II 地点包含層出土石器実測図5 (1/2, 1/3, 1/1)	64
Fig.58	1-II 地点包含層出土石器実測図6 (1/3)	65
Fig.59	1-III、1-IV、1-V 地点遺構配置図 (1/400)	67
Fig.60	1-III 地点遺構実測図 (1/40)	68
Fig.61	1-III 出土遺物実測図 (1/3, 1/1)	69
Fig.62	1-IV、1-V 地点遺構実測図 (1/40)	70
Fig.63	1-V 地点出土遺物実測図 (1/3)	71
Fig.64	2地点遺構配置図 (1/400)	72
Fig.65	SK301、SK302実測図 (1/40)	73
Fig.66	2地点焼土坑・土坑実測図 (1/40)	74
Fig.67	2地点土坑出土遺物実測図 (1/3)	75
Fig.68	2地点溝断面図 (1/40)	76
Fig.69	SD308、SD350出土遺物実測図 (1/3)	77
Fig.70	SB325実測図 (1/80)	78
Fig.71	SB325出土遺物実測図 (1/3)	78
Fig.72	2地点ピット集中部実測図 (1/100)	79
Fig.73	2地点ピット出土遺物実測図1 (1/3)	80
Fig.74	2地点ピット出土遺物実測図2 (1/3)	81
Fig.75	2地点出土その他の遺物実測図1 (1/3)	83
Fig.76	2地点出土その他の遺物実測図2 (1/3)	84
Fig.77	2地点出土縄文土器実測図1 (1/3)	85
Fig.78	2地点出土縄文土器実測図2 (1/3)	86
Fig.79	2地点出土縄文土器実測図3 (1/3)	87
Fig.80	2地点出土石器実測図1 (1/1)	88
Fig.81	2地点出土石器実測図2 (1/3, 1/2)	89
Fig.82	3地点遺構配置図 (1/300)	90
Fig.83	3地点遺構実測図 (1/40)	91
Fig.84	3地点出土遺物実測図 (1/3)	91
Fig.85	3地点縄文時代遺物集中部実測図 (1/40)	92
Fig.86	3地点出土縄文土器実測図1 (1/3)	93
Fig.87	3地点出土縄文土器実測図2 (1/3)	94
Fig.88	3地点出土縄文土器実測図3 (1/3)	95
Fig.89	3地点出土縄文土器実測図4 (1/3)	96
Fig.90	3地点出土縄文土器実測図5 (1/3)	97
Fig.91	3地点出土縄文土器実測図6 (1/3)	98
Fig.92	3地点出土縄文土器・石器実測図 (1/3, 1/2)	99
Fig.93	3地点出土石器実測図 (1/1)	100
Fig.94	1-II 地点包含層遺物分布	102

図版目次

卷頭図版	
1 脇山地区（南東から）	Ph.20 SK065（北東から）
2 1-II 地点全景（西から）	Ph.21 SK066（南東から）
Ph.1 1-II 地点上層遺構（南から）	Ph.22 1-II 地点南半下層遺構（北東から）
Ph.2 2地点全景（北西から）	Ph.23 SK069（東から）
Ph.3 1-I・II 地点（北から）	Ph.24 SK072（東から）
Ph.4 1-I・II 地点（南から）	Ph.25 包含層掘削（西から）
Ph.5 1-I 地点（西から）	Ph.26 繩文時代包含層調査（南西から）
Ph.6 SK001（西から）	Ph.27 1-III 地点（北東から）
Ph.7 1-II 地点全景（南西から）	Ph.28 SK110（南西から）
Ph.8 1-II 地点（南から）	Ph.29 1-IV 地点（南東から）
Ph.9 SK046（北東から）	Ph.30 SK201（南から）
Ph.10 SK026（南から）	Ph.31 1-V 地点（南東から）
Ph.11 SK032（北西から）	Ph.32 SK253（北西から）
Ph.12 SK033（南東から）	Ph.33 2地点（北西から）
Ph.13 SK039（南東から）	Ph.34 2地点ピット集中部（北から）
Ph.14 SK039（東から）	Ph.35 2地点（東から）
Ph.15 SK039土層（東から）	Ph.36 2地点（南東から）
Ph.16 SK040（東から）	Ph.37 SK301（南東から）
Ph.17 SK040土層（北から）	Ph.38 SK302（南から）
Ph.18 SK041（北から）	Ph.39 SB325（南から）
Ph.19 SK064（北西から）	Ph.40 3地点（東から）
	Ph.41 3地点遺物集中部（東から）
	Ph.42 SK501遺物出土状況（南から）

I はじめに

1. 調査の経緯と経過

福岡市早良区大字脇山一体の圃場整備事業が計画され、1984年に当時の教育委員会文化課に事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会があった。同年、文化課は事業地の一部で試掘調査を行い遺構の存在を確認した。翌1985（昭和60）年に事業計画は具体化し、82.9haを対象として1986（昭和61）年から8ヶ年にわたるものとなった。

埋蔵文化財課は各年度の調査前に事業地の試掘調査を行い、遺構の分布を確認して調査対象地をしぱり、恒久的構築物である道路・水路、切り土施工を行う田面および耕作土直下に遺構が存在する田面に対して本調査を実施した。事業地内には脇山A、野中、谷口、大門、栗尾B遺跡の5遺跡が広がり、実際には9年度におよんだ事業期間中、7年度で発掘調査を実施し脇山IからVIの報告書にその成果がまとめられている。

1991（平成3）年度には野中、広田地区で事業が行われ、広田地区で調査した脇山A遺跡6次、大門遺跡1次調査の成果は既に報告している（「脇山V（市報344集）」）。今回報告を行うのは野中地区で実施した野中遺跡1次調査の記録である。

野中地区については1990年4月1日から4月上旬に国庫補助（詳細分布調査）による試掘調査を行い、遺構・遺物の分布範囲を把握し調査対象地を絞った。これを受け農業土木課では田面高の調整を行い調査面積の減少を図った。その結果、調査対象地のうち恒久的構築物範囲と削平施工がおよぶ田面對象に4月18日に本調査を開始し10月14日に終了した。調査面積は6849m²である。

調査期間中には脇山土地改良区をはじめとする地元の皆様の多大なご理解とご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

2. 調査組織（当時）

県営脇山圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備部害蟲課

福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市脇山土地改良区

調査主体

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 折尾学

第1係長 飛高憲雄

庶務 中山昭則

調査担当 池田祐司 櫻本義嗣

表1. 脇山圃場整備事業地内発掘調査年別一覧

年度	事業面積	調査対象面積	調査期間	調査遺跡群	報告書（集）
1986	4.5ha	5600m ²	1986.10.14～1987.1.14	脇山A1次	236
1987	5.0ha	7150m ²	1987.8.4～12.28	脇山A2次	236
1988	11.4ha	6636m ²	1988.9.26～12.15	脇山A3次	236
1989	14.4ha	14400m ²	1989.7.1～1990.2.28	脇山A4次、谷口	269-311
1990	14.4ha	18718m ²	1990.5.23～12.28	脇山A5次	312
1991	14.4ha	10904m ²	1991.4.1～10.14	脇山A6次、大門、野中	344-1196
1992	12.0ha	8958m ²	1992.4.13～10.16	脇山A7次、栗尾B	386

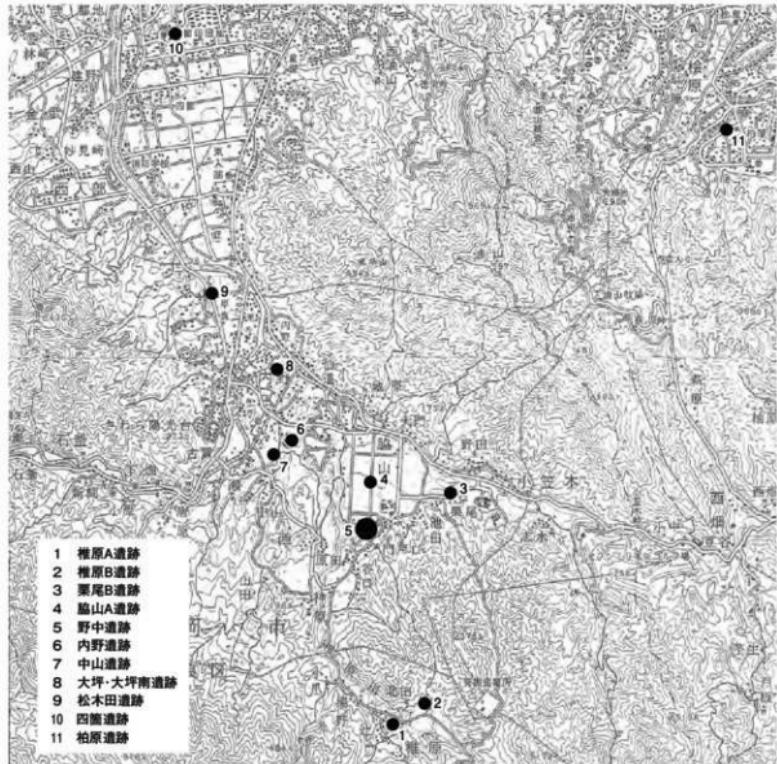


Fig.1 野中遺跡位置図 (1/50000)

3. 立地と環境

福岡市には、西から今宿、早良、福岡、柏屋の中小平野が展開し、各平野は丘陵、山塊によって画されている。このうち早良平野は福岡市の西南部にあたり、背振山系に源を発する室見川が北流する。脇山地区は早良平野が南部で一端狭まり、さらに南側奥部の背振山麓に展開する扇状地に広がる田園地帯である。野中遺跡はその南側に位置する。標高は100m前後で、北側には扇状地形の先に小笠木川が流れ、正面の視界には油山と荒平山が連なる。脇山から椎原川沿いに南に伸びる谷は板屋崎から佐賀方面へと続き、また小笠木川沿いの谷は小笠木崎を越えて筑紫郡へと至る。

脇山地区周辺では、これまで圃場整備事業にともなう発掘調査を実施し成果を重ねてきた。脇山地区的事業は9年度(Fig.2)において、そのうち7年度にわたって脇山A、野中、谷口、栗尾B遺跡(Fig.2)での発掘調査を行った。また周辺では小笠木地区で脇山B、志水A、椎原地区で椎原A遺跡の調査を行っている。遺跡の時期は断続的ではあるが旧石器時代から中世におよび、野中遺跡も同様の傾向を示す。以下、野中遺跡の報告の背景として時期毎にその様相を概観しておく。事業年度、遺跡分布は例言と表1、Fig.1、2に示したが調査区などの詳細は各報告書を参照されたい。

旧石器時代の遺物は脇山A遺跡2次で船底型の細石核、3次で三稜尖頭器、野中遺跡で細石核、志水A遺跡ではナイフ形石器が出土している。いずれも単品であり偶然に採集し得たものである事を考えると、長期にわたり繰り返しこの地で活動がなされたことが推測される。

縄文時代は各地点で遺物が出土し、この地区的遺跡を特徴付ける。早期では押型文土器が脇山A遺跡5次D地点、6次第5地点、7次C2地点、栗尾B遺跡、野中遺跡、谷口遺跡、椎原遺跡などで出土している。特に栗尾B遺跡では1個体がつぶれた状態で出土した。椎原遺跡の手向山式も注目される。前期では野中遺跡で轟A式からB式の古手の土器、曾畠式が見られ、近接する脇山A遺跡5次J地点でも出土している。椎原A遺跡では轟B式の新しいものから曾畠式がまとまって出土している。また栗尾B遺跡では浅い土坑から曾畠式土器が出土している。中期は脇山A遺跡5次C、F、J地点で船元式土器片が出土し、阿高式片が野中遺跡で出土したくらいで少ない。後期は明確なものは見られない。晩期では古闕式から黒川式の遺物が出土する地点が多く、特に古闕式は脇山地区全域に広がる。その中でも集中する地点として脇山A遺跡5次A、C、F地点、野中遺跡I-II、2、3地点があげられる。脇山A遺跡5次A地点では古闕式期の遺物集中地点、黒川式の集石構造など、C、F地点では埋設土器などの遺構を検出している。野中遺跡I-II地点でも土坑と多くの遺物が出土した。石器は明確な時期が決めがたいが、剥片石器では黒曜石、安山岩製の石礫、石匙などが各地で出土し、平野部に比べて安山岩の比率が高い。また石斧は晩期の遺物が多い割に打製石斧はほとんどみられない。刻目突帯文土器は脇山A5次、野中遺跡で微量に見られる程度である。

弥生時代は遺物を散見するがごくわずかである。遺構は谷口遺跡で後期の甕を埋置した土坑1基を検出したのみである。遺物は脇山A遺跡2次調査で前期後半の壺片、亀の甲型の甕片が出土し、5次D地点で前期の高坏片、6次調査1地点では須玖I式の甕片が出土している。野中遺跡では板付II式、須玖I式の甕片が出土している。破片はいずれも小片である。

古墳時代も少ない。遺構は脇山A遺跡5次A地点で布留式系の甕、6世紀代の甕が土坑から、C地点で6世紀末の堅穴式住居の痕跡を確認したくらいである。遺物は脇山A遺跡5次H地点、6次1地点、野中遺跡I-II、IV地点などで須恵器、土器が少量見られる。

古代も少なく脇山A遺跡1次で8世紀代の須恵器などがあげられるくらいである。

12世紀代になると急に遺構・遺物が増加し、脇山地区全域におよんだ開発の様子をうかがうことができる。時期が明確ではないが炭焼きの土坑と考えられる焼土坑は谷部等を除く全域で確認できる遺構で、中世の開発に伴うものと考えられる。輸入陶磁器をはじめとする遺物が出土する地点は多いが、遺構・遺物が集まる地点は限られる。脇山A遺跡4次12地点から6次2地点にかけては12世紀から13世紀の遺構がまとまり、龍泉窯系青磁碗1類2個と鉄製小刀を副葬した土坑墓が注目され、河川堆積からは龍泉窯系鍋連弁文碗、白磁碗IV、同窯系青磁皿などがまとまって出土している。扇状地中央部の6次調査C地点では掘立柱建物を2軒ずつ2群検出し、1棟からは龍泉窯系青磁碗1類、掲釉陶器が出土している。F地点でも限られた調査範囲で1棟を検出している。6次調査の小笠木川寄りの第4地点ではピットが集中し15世紀を中心とする遺物が出土し建物群の存在が予想される。また7次調査C地点では14世紀から16世紀の掘立柱建物が限られた範囲の中で12棟検出されている。野中遺跡では第2地点で15、16世紀と考えられるピット群が出土している。また、小笠木地区の志水B遺跡では16世紀代と考えられる大柱列が出土し、熊本県三加和町田中城の例との類似から兵舎等の性格が想定されている。12世紀代の集落は散在し小規模であるが、輸入陶磁器が比較的多く出土している。15、16世紀では、ピットが集中し立て替えが繰り返された様子がうかがえる。遺物も多く、肥前系の土鍋が目立ち、陶磁器類は少ない。

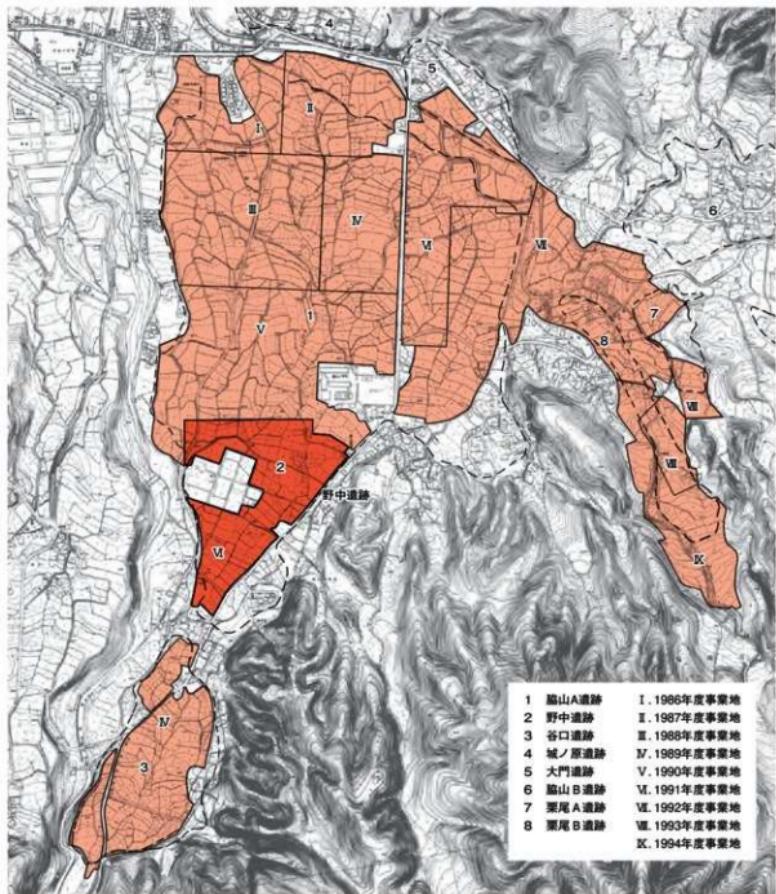


Fig.2 脇山地区圃場整備事業地および遺跡群 (1/15000)

4. 試掘調査

1991(平成3)年、4月1日から4月上旬に事業地内の試掘調査を詳細分布調査として国庫補助を受け実施した。試掘トレチは可能な限り各田面に及ぶように配置したが、耕作の都合等で実施できなかった箇所もある。トレチはバックホーで掘削し、人力で遺構検出を行った。試掘トレチの配置をFig.3に、各トレチの最も浅い箇所の土層断面をFig.4に示した。土層は浅いところでは表土、旧表土の下が地山となり6、7層とした黄褐色または茶褐色のシルト質、砂質の土壤が砂礫層の上に乗っている。3層とした暗茶褐色土は6-2、33、34トレチで見られ、遺物包含層の可能性がある。34トレチではFig.5に示した縄文土器が出土している。埋没した地形では34トレチ西端に落ちがあり、これが32、18、17、16トレチの落ちへつながる小さな谷と考えられる。3地点の調査の際に調査区

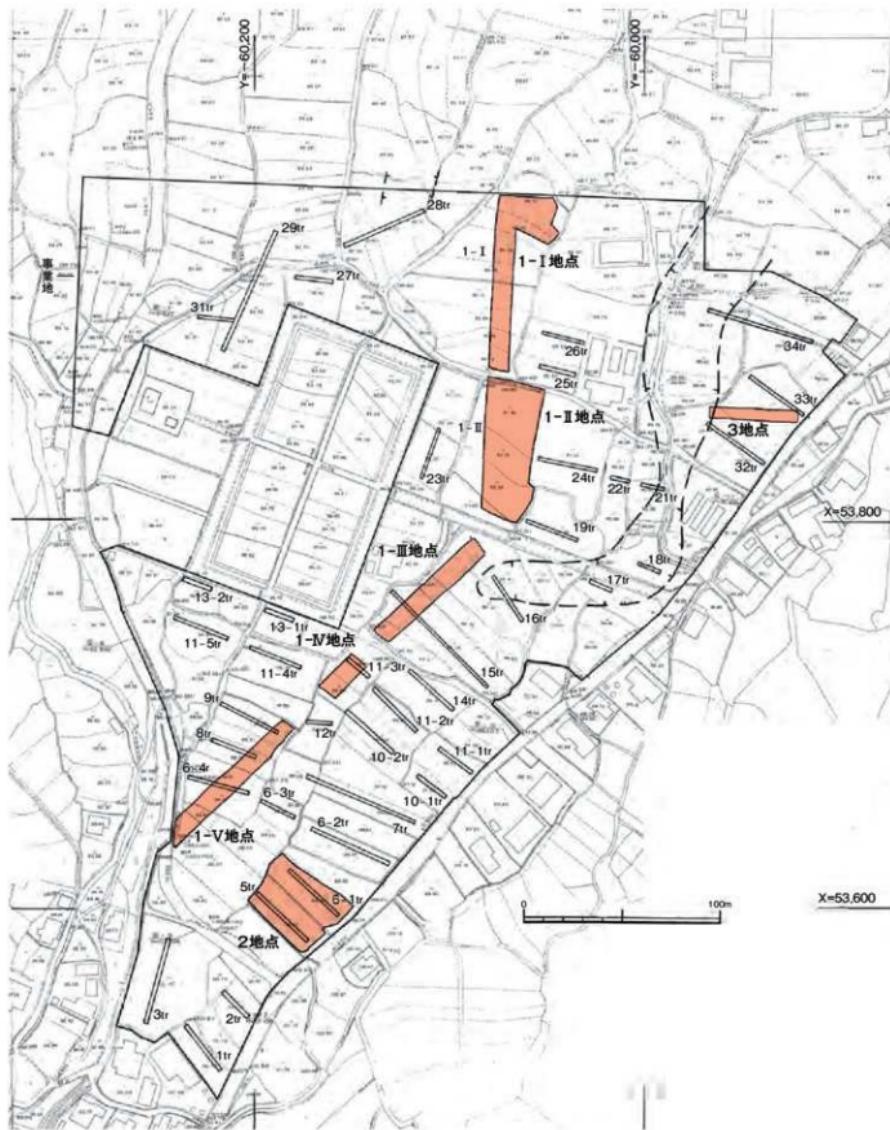


Fig.3 野中遺跡調査区位置図 (1/2500)

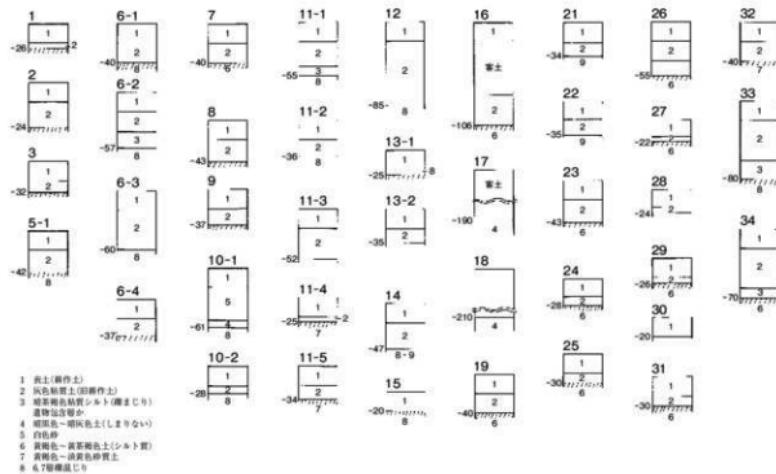


Fig.4 試掘調査土層断面 (1/80)

の西側を掘削し砂礫の浅い谷を確認している。この他に6-3、12トレンチなどがやや深く、先の谷に続く浅い谷状の地形が事業地の中央を縱断する。大きくみると東側の丘陵からの斜面と、主基盤田を頂部とする緩やかな丘陵がありこの間が谷状の地形となる。谷地形で深く礫層が露出する部分では遺構を確認できないが、6、7層が見られる箇所では焼土坑等の遺構がある可能性がある。ただし7、10、11トレンチ付近は礫が露出する部分が多く遺構が確認できそうな状況ではなかった。そうした中で、田面では5-1トレンチで顕著な遺構を確認し、構造物造成地に加えて本調査区とした。また構造物造成地でも1、3区の他では谷部または削平のため遺構が確認できないもしくは確認しがたいため調査から除外している。

試掘調査出土遺物 (Fig.5) 1から3は34トレンチで出土した。1.2は黒色研磨土器で丁寧な研磨調整を施す。3はやはり研磨調整を施すが厚手で赤みがつよい明茶色を呈し、古手の壺を思わせる。4は32トレンチ出土の楕円押型文土器である。3地点周辺では縄文時代の遺物の広がりが予想できる。

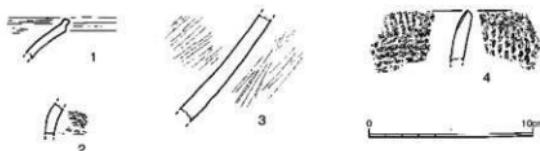


Fig.5 試掘調査出土遺物実測図 (1/3)

II 野中遺跡1次調査の記録

1. 調査の概要

野中遺跡は脇山A遺跡の南側、扇状地上部に位置し、東側は背振山塊からの丘陵で画され、西は椎原川の解析により段丘状をなす。事業地は遺跡範囲にはほぼおさまる。一部脇山A遺跡とされていた箇所があるが連続的である。このため遺跡範囲を見直し、今回の調査地点をすべて野中遺跡とした。また事業地の中央には約2haの主基祭田があり、この部分は事業地から外れている。現況はほとんどが水田で一部畠地として利用されている。各耕作面は段差があり、その差が大きな箇所は1mほどで石垣を築く箇所もある。標高は約88mから103mである。

事業地の面積は8.5haほどであるが、先にふれた試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認できる箇所で恒久的構築物範囲と切り土が遺構面に達する範囲について本調査を実施した。本調査期間は1991（平成3）年4月18日から開始し、途中脇山A遺跡6次、大門遺跡1次調査と併行して、同年10月14日に終了した。調査面積は6849m²である。以下遺跡の概略と各地点の概要を記す。

野中遺跡で確認した主な遺構・遺物は縄文時代早・前・晚期と15世紀前後で脇山A遺跡の様相と一致し、それぞれ集中する箇所がある。また中世の耕地開発に伴うと指摘されている焼土坑が全域に見られた。1地点は事業地を縱断する新設道路部分で、水路や田面の段で区切って5地点に分けた。全域に焼土坑と少量の縄文時代の遺物が出土した。そのうち1-II区では田面部分を拡張した調査区を設定し15世紀の土坑等の遺構と縄文時代晩期の遺構と晩期を主体とし早・前期を含む遺物包含層の調査を行った。2地点では多数のビットが一定の範囲の中で集中し15世紀を前後する時期の屋敷地と推定される。また縄文時代前期、晩期の遺物も出土し1-II地点と同様の時期である。3地点でも遺物包含層から1-II地点と同様の縄文時代の遺物が出土した。

2. 1-I 地点の調査

事業地の北端中央に位置する道路建築と田面の切り土工事箇所での調査で、標高88.5mから90.5mの傾斜地である。表土、旧表土を除去した黄褐色砂質シルトを遺構面とし、焼土坑9基、水田耕作に伴う段落ち、溝を検出した。焼土坑は北側の調査区にまとまるが、南側は表土直下で遺構面となり削平が大きいと考えられる。以下、焼土坑と採集した遺物に触れる。

(1) 焼土坑 (Fig.6, 7)

調査区の北端部でまとまって出土したが切り合はない。SK001が平面方形に近いほかは長方形または梢円形を呈し、方位は一定しない。

SK001 調査区北東で検出した。平面剛丸方形で164×147cmを測る。深さ10cmと底のみが残存し、全面が炭粉で覆われている。長さ65cm、幅15cmほどの炭化木片が残っていた。南側の壁が一部赤変している。剥片鉄11が出土した。

SK002 SK001に接し、平面不整剛丸長方形で132×104cmを測る。底に2、3cmの炭片を含む粉状の炭が堆積する。壁と床の一部が赤変し、壁の一部は緑色に還元している。遺物はない。

SK003 やや細長い剛丸長方形で132×64cmを測る。深さ21cmが残り、底に炭が薄く溜まる。壁は南寄りを中心に赤変している。土器小片が出土した。

SK004 平面が細長の長方形で145×52cmを測る。深さ15cmが残り、10cmほど炭粉が溜まる。壁は側辺が一部赤変している。遺物は出土していない。

SK005 平面は端正な剛丸長方形で150×88cmを測る。深さ10cmと残りが悪く、覆土は炭まじりではあるが炭層ではない。北、東側の一部が赤変する。

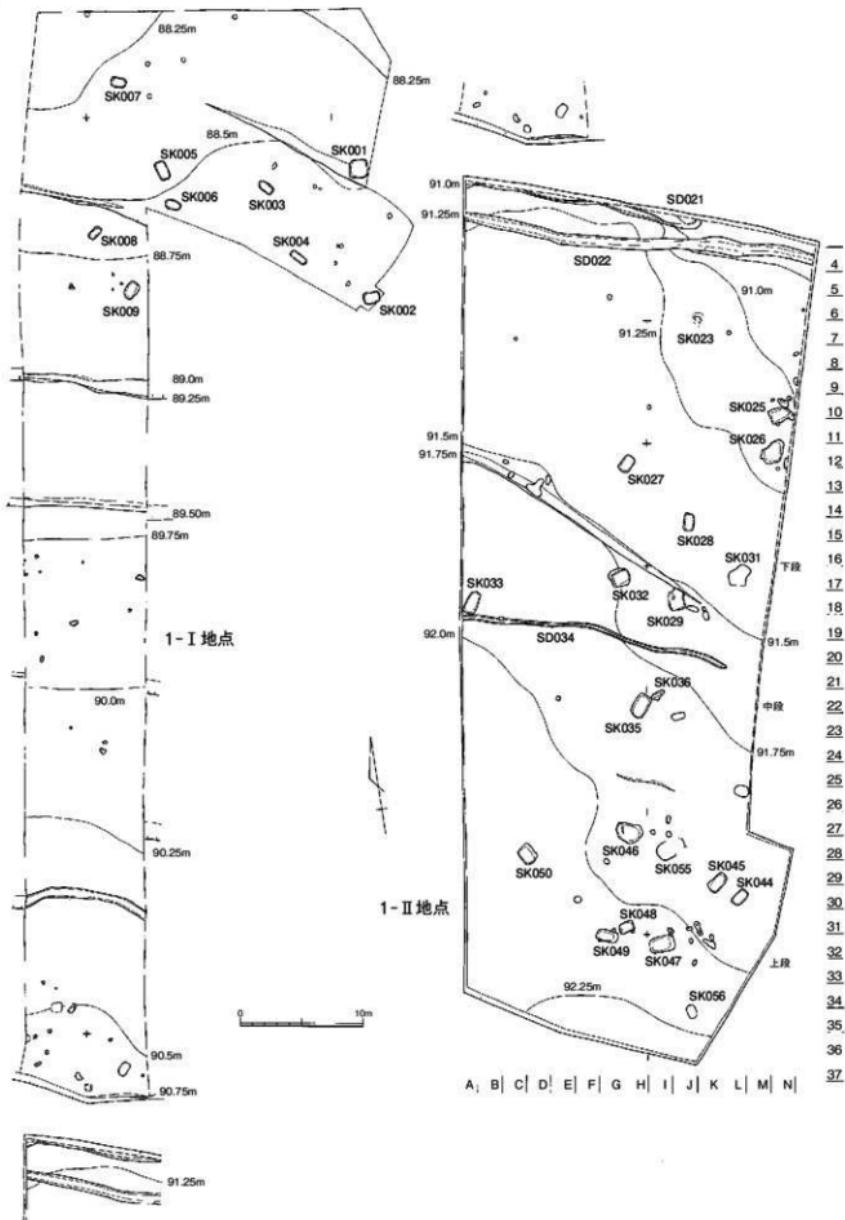


Fig.6 1-I、1-II 地点上層遺構配置図 (1/400)

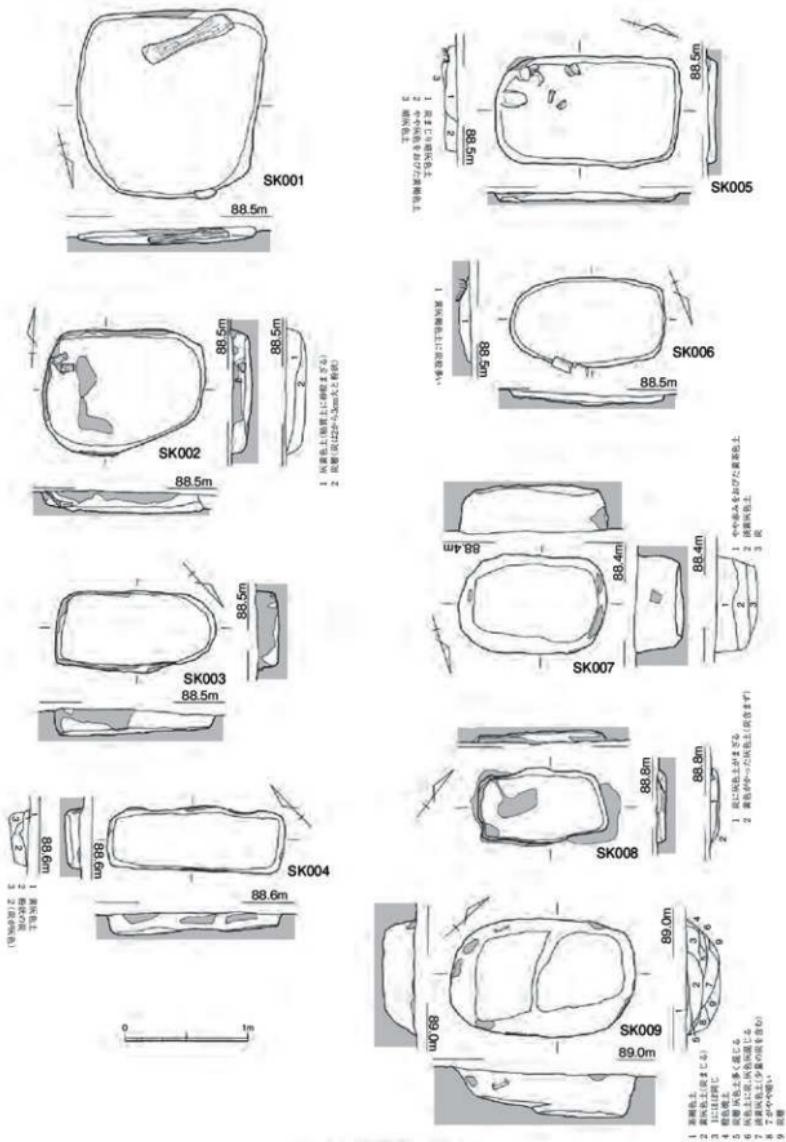


Fig.7 1-I 地点焼土坑実測図 (1/40)

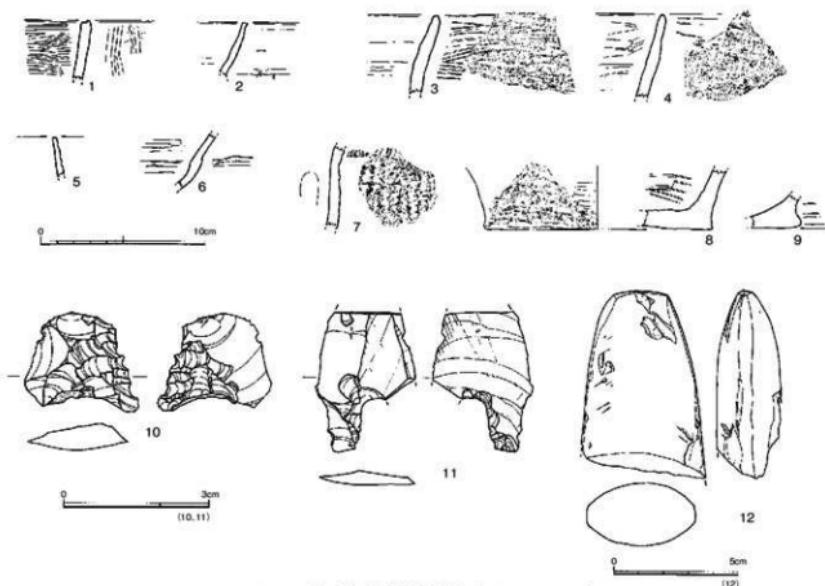


Fig. 8 1-I 地点出土遺物実測図 (1/3, 1/2, 1/1)

SK006 平面橢円形に近い。126×72cmを測る。深さ8cmが残り、床面は礫層で炭まじりの灰黄褐色土がたまる。壁の赤変は見られず、焼土坑ではない可能性がある。遺物はない。

SK007 平面隅丸長方形で123×80cmを測る。深さ38cmと他と比べて残りがよい。北西部にやや外れて削平が及ばなかったためか。底に炭が溜まり、壁の一部が赤変する。遺物はない。

SK008 平面長方形で108×62cmを測り、深さ9cmが残る。壁の上部からむしろ外側平面が赤変している。炭層が溜まり灰色土が混ざる。

SK009 平面隅丸長方形で150×96cmを測る。床は北側がやや深くなり34cmを測り底に炭が溜まる。壁の赤変は一部のみである。遺物は出土していない。

(2) 出土遺物 (Fig. 8)

主に遺構検出時に遺物が出土している。1、2は土師器。1は刷毛目調整で外面は煤ける。2は布留式系の口縁である。3から9は繩文土器で3、4は粗製深鉢、5は荒れて詳細不明だが外面に幅広の沈線を描く。6は黒色研磨土器の浅鉢、7は船元式系で外面に繩文を施し内面はなで調整である。8は外面条痕調整の深鉢の底部で1/8からの復元。晚期前半のものか。9は深鉢の底部で外面条痕か。10、11は黒曜石製の石鎚でいずれも主剥離面を残す。10は基部に自然面が見られ未製品か。11はいわゆる剥片鎚である。12は頁岩製の磨製石斧である。この他には、口縁部に伴う胴部片のうち土師器が比較的目につき、須恵器の提瓶かと考えられる破片、近世陶磁器片などが出土している。

3. 1-II 地点の調査

主基祭田の東側に位置し、丘陵頂部からやや東よりの斜面にあたる。道路建設と切り土工事箇所を調査区とし標高90.75mから92.25mである。遺構面は表土、旧表土を除去した黄褐色から赤茶褐色土

で北東隅へ傾斜する。この面で中世の土坑、焼土坑、近世の溝、縄文晩期の土坑などを確認した。遺構面とした黄褐色土は縄文時代の遺物包含層でもあり、縄文時代の遺構との関係は後述する。便宜上、縄文時代の包含層上面で検出した遺構・遺物を上層の調査、それ以下を下層の調査として報告を行う。また、遺構面は現代の水田の段造成により3段に分かれ、調査時に上、中、下段と呼称して遺構検出時の遺物を取り上げた。包含層の遺物の報告にあたってはこの呼称を使用する。また、下層調査時に2mグリッドを設定した。上層の報告においてもこれを用いる (Fig.6)。なお、調査区の東側で掘削した24トレンチでは遺構は検出していないが遺構面は安定しており遺構が広がると考えられる。また東側は次第に落ちていくが25トレンチ (Fig.3) で焼土坑を確認しており遺構は広がる。縄文時代の包含層は大きく広がることはないと考えられる。

1) 上層の遺構と遺物

(1) 土坑 (Fig.9, 10)

焼土坑以外で明確な遺構は2基のみである。くぼみ状に遺物が出土した箇所もあるが包含層としてあつかった。

SK046 H27 調査区南より中央に位置する浅いくぼみ状の土坑で、平面形不整梢円形で215×140cmを測り、深さ16cmである。覆土は黄色ブロックが混ざる暗い茶褐色土で床面に若干の焼土が残る。床面には小さな段が見られる。遺物は散在する。

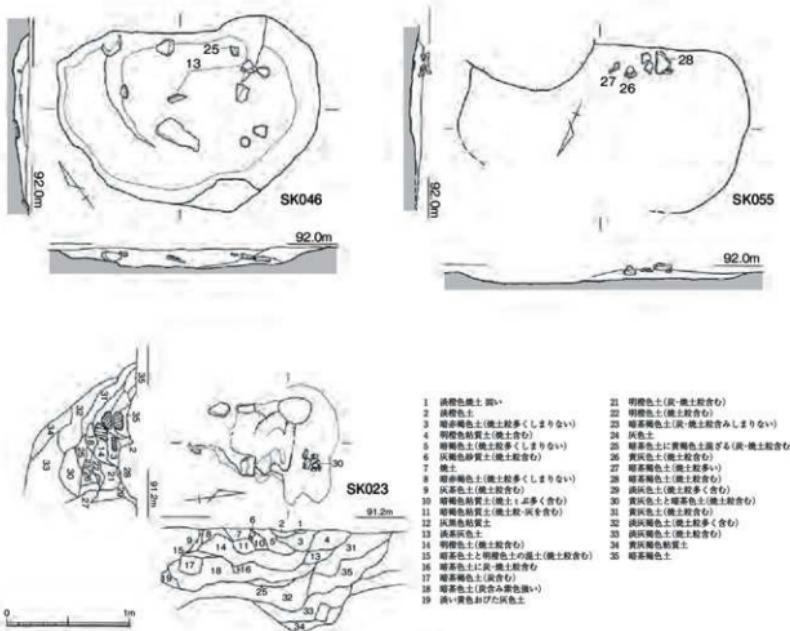
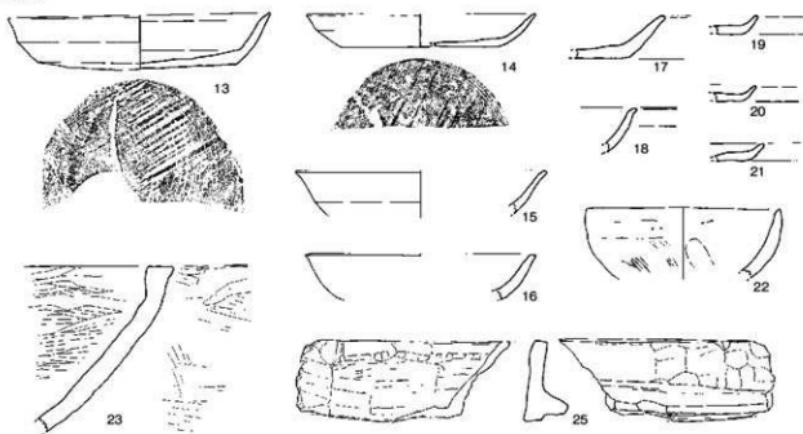
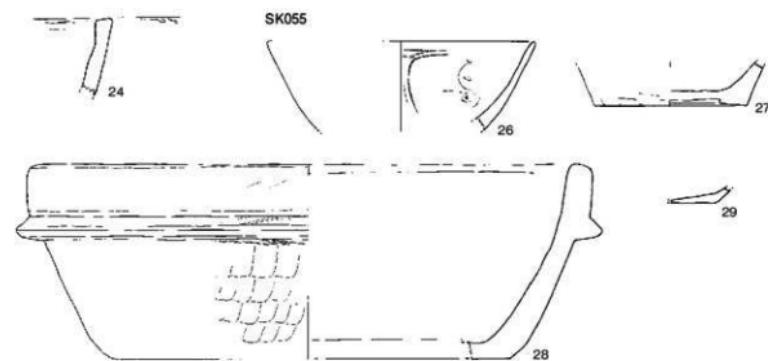


Fig.9 1-II 地点土坑実測図 (1/40)

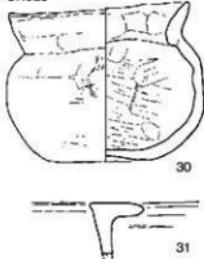
SK046



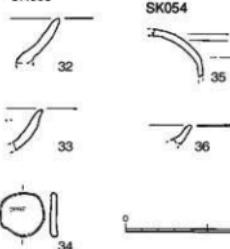
SK055



SK023



SK053



SP1007

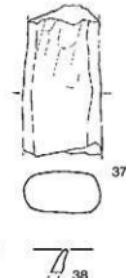


Fig.10 1-II地点土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 13から21は土師皿で、底があるものは糸切りで13、14には板目圧痕が残る。13は2/3が残り口径16.0cmである。14は1/2弱からの復元口径14.0cm、15は1/6から15.4cm、16は1/4からで14.0cmを測る。23は瓦質の鉢で内面はヘラなで、外表面は擦痕状の削り調整である。22は土師器の椀で1/4からの復元。24、25は滑石製の石鍋片である。24は外表面に煤が付着する。25は下端の破面を面取り再加工している。他に白磁片が見られる。

SK055 J28 SK046に近接する。やはりくぼみ状の浅い土坑で、攪乱状のくぼみに切られる。平面梢円形を呈し238×132cm、深さ8cmを測る。

出土遺物 26は龍泉窯系青磁碗 I類で1/4からの復元である。27は青磁壺の底部で底は露胎で豊付に糸切りがみられ、そのうち側はヘラ削りである。28は滑石製の石鍋で1/8からの復元。萼から下は煤け、底付近には炭化物が付着する。29は糸切り底の土師皿である。

SK023 K7 北東隅部で確認した遺構で、風倒木状の堆積の上部に焼土および焼土を含む茶褐色系の土壤が堆積する。14層の明橙色焼土が顕著な色調をしており、この層の前後から上部に特に焼土を含む。この焼土は平面的に広がらず遺構としてとらえることができなかった。平面図は検出面の焼土を含む面の形状などを拾っており意味はない。遺物の出土状況は30で示した土師器の甕がつぶれた状態で3、4層の底付近から出土した。結局、遺構をきちんと掘ることができていない。

出土遺物 30は土師器の甕で一部欠けるがほぼ完形に復元できた。荒い成形で外表面には刷毛目状の擦痕が残り、内面は丸みを持った工具による深い削りが明瞭に残る。31は須玖式の甕で器面は荒れる。遺構の下部からの出土である。

SK053、054 EF25・26付近にくぼみ状部の遺物を番号をつけて取り上げたが、固化していない。遺物のみを個別に報告する。32から34がSK053出土で32、33が土師皿、34は板目圧痕がある土師皿の底を加工した土板である。35、36はSK054からの出土で35は須恵器の坏、36は土師皿片である。

SP1007 I27 調査区ではピット状の遺構をいくつか検出したが、まとまりず柱穴にはなりそうにはない。SP1007はSK046の東のピットで以下の遺物が出土した。37は柱状の土製品で器面は擦過からなで調整で黄褐色である。2次焼成はみられない。38は土師皿片である。

(2) 焼土坑

調査区全体で検出した。

SK025 (Fig.11) N10 平面不整長方形で182×122cm、深さ33cmが残存する。炭は覆土に含む程度で西壁が一部赤変する。土師器と縄文土器の小片が出土した。

SK026 (Fig.11) N11 平面隅丸方形で160×137を測り、北東端が広がる。深さ35cmが残る。北西端には木炭が残っていた。底に炭層が残っている。土師器小片、縄文土器の小片が出土している。

SK027 (Fig.11) H12 平面長方形で138×92cmを測り、深さ37cmが残存する。炭層はないが底にたまる灰色土に炭を多く含む。壁は南側を中心一部赤変する。縄文土器の小片が出土した。

SK028 (Fig.11) J15 平面長方形を呈し142×85cmを測り、37cmが残存する。底には厚さ8cmほどの炭層がたまる。土師器甕小片1点と縄文土器の小片が出土した。

SK029 (Fig.11, 13) J18 平面不整方形を呈す。184×120cmを測り、深さ28cmが残る。底にピットが伴うか未確認。底に炭を含む土壤がたまる。布留式39、土師器、縄文土器の小片が出土した。

SK032 (Fig.11) H17 方形プランで148×127cm、深さ30cmを測る。北側の上端が広がる。底に薄く炭層が広がり、覆土に炭、焼土を含む。壁面は良く焼け赤変する。小土器片が出土した。

SK033 (Fig.11) A18 平面は細長い長方形で181×98cmを測り深さ32cmが残る。底の土壤に炭を非常に多く含む。壁は一部が赤変する。縄文土器の小片が出土している。

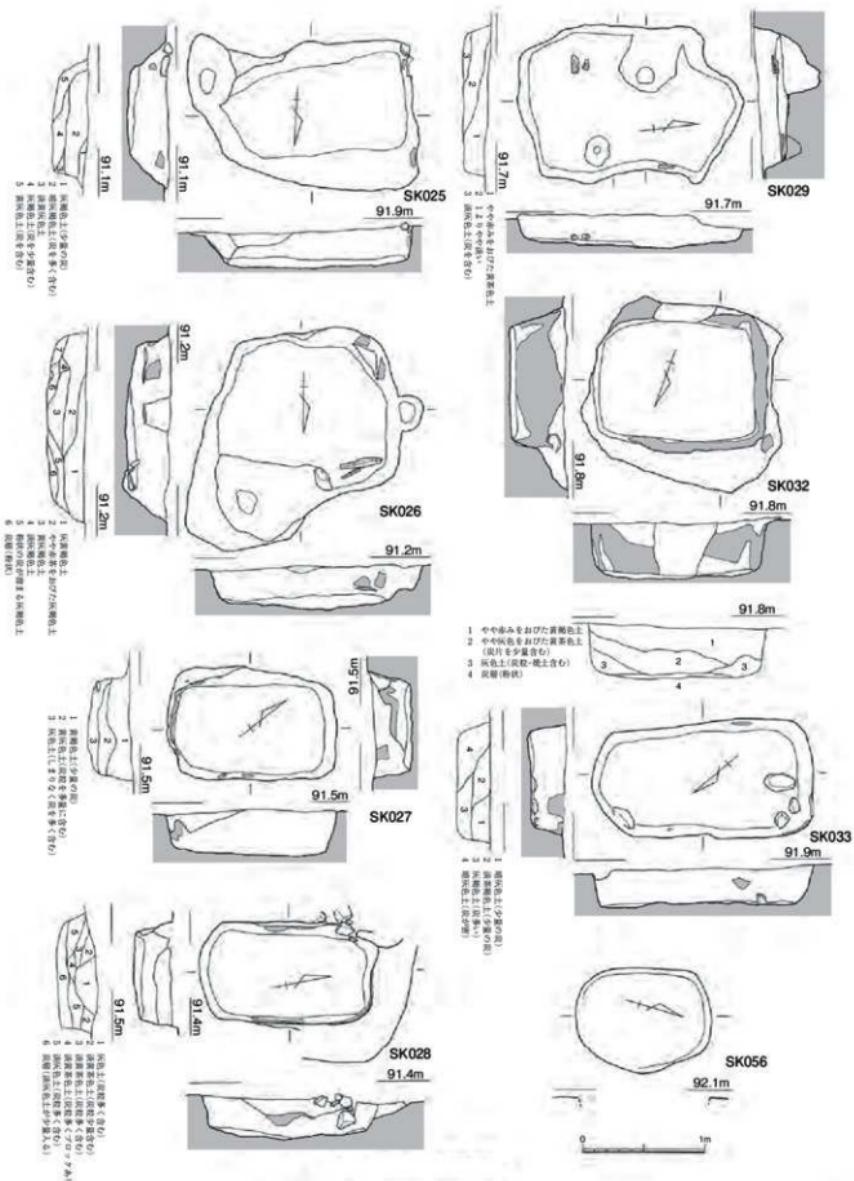


Fig.11 1-II 地点焼土坑実測図1 (1/40)

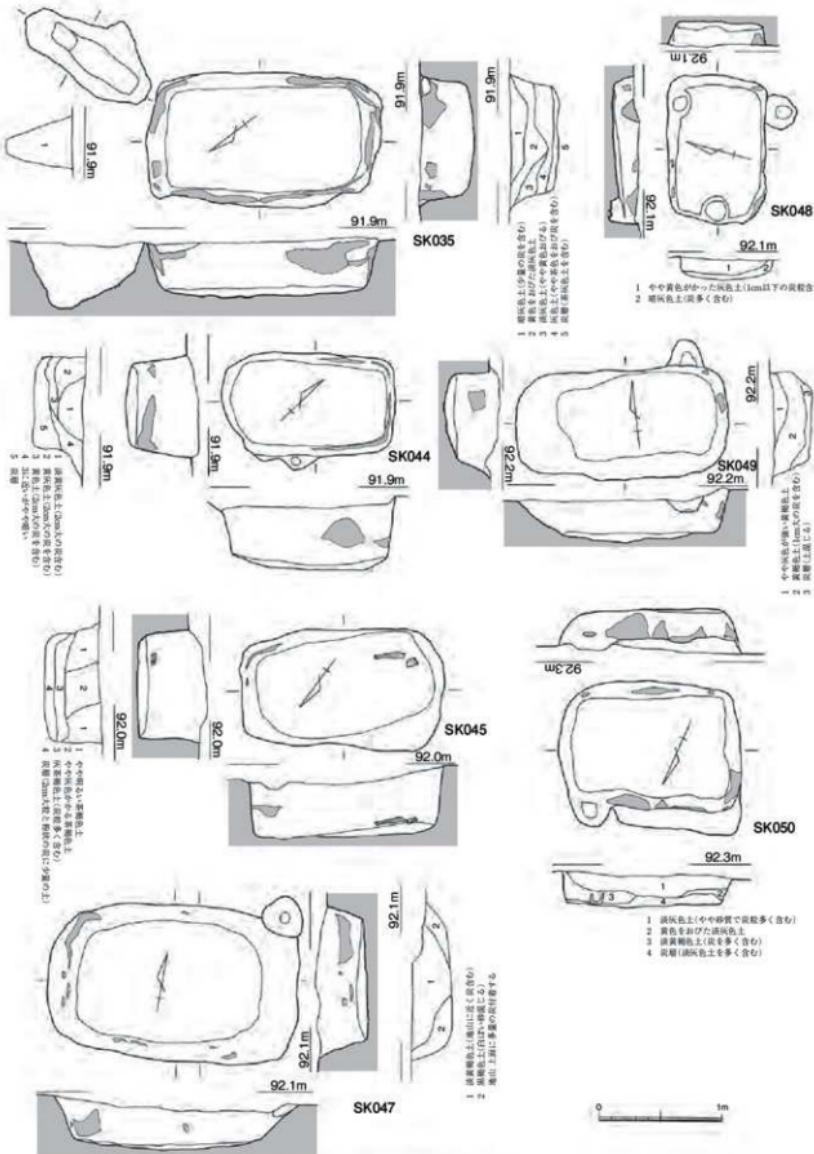


Fig.12 1-II 地点焼土坑実測図 2 (1/40)

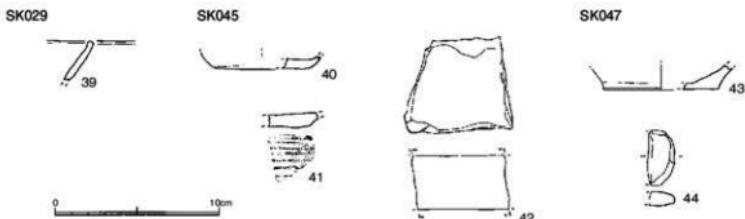


Fig.13 1-II地点焼土坑出土遺物実測図 (1/3)

SK035 (Fig.12) H22 平面隅丸長方形で193×110cm、深さ45cmを測る。底に5cmほど炭層がたまる。壁は比較的焼けて赤変部が多い。北東側に溝状のピットがありSK035の上層と同じ覆土だが関係は不明。遺物は出土していない。

SK044 (Fig.12) L30 平面隅丸長方形で143×87cm、深さ60cmと残りがよい。底に厚さ15cmほど炭層がたまる。北側の壁に赤変部が多い。土師器小片が出土した。

SK045 (Fig.12, 13) K29 平面隅丸長方形で166×93cm、深さ57cmが残る。底に厚さ10cmほどの炭層と木炭片が残る。壁の赤片は一部のみである。40、41は土師皿で砂岩製砥石42は焼成を受け赤片する。他に滑石製石鍋片が出土している。

SK047 (Fig.12, 13) I32 平面は隅丸長方形で204×128cmを測り、深さ22cmが残る。覆土は炭を含み、壁は一部が赤変するのみである。43は土師皿片、44は石製で円盤片か。

SK048 (Fig.12) H31 平面小型の長方形で162×80cm、深さ22cmを測る。底には炭を多く含む層が溜まり、壁は一部が焼ける。石鍋、土師器小片、縄文土器片が出土している。

SK049 (Fig.12) G32 平面長方形で176×88cmを測り44cmが残る。北側の立ち上がりが緩く掘りすぎの可能性もある。底に炭層が見られる。土師皿片、縄文土器片が出土している。

SK050 (Fig.12) D28 平面長方形で150×120cmを測り、深さ35cmが残る。底にたまる炭層には灰色土を多く含む。壁は比較的赤変部が多い。土師器片が出土している。

SK056 (Fig.11) J34 平面楕円形に近い。111×87cmを測る。レベルを未測定のため深さ不明だが、40cm前後はあった。

(3) 溝

調査区を横断する溝SD021、022、034は覆土からいはずれも水田造成に伴うと考えられるが、出土した遺物を報告しておく。Fig.14の45、46はSD021出土の白磁皿で45は全面に釉がかかる白磁皿Ⅸ類、46は外底部付近が露胎で内面は輪状に釉剥ぎし胎土目が残る。

(4) 包含層出土遺物 (Fig.15)

遺構検出時等に出土した遺物をまとめて報告する。表土や遺構覆土のものが遊離したものを含むと考えられる。



Fig.14 1-II地点溝出土遺物実測図 (1/3)

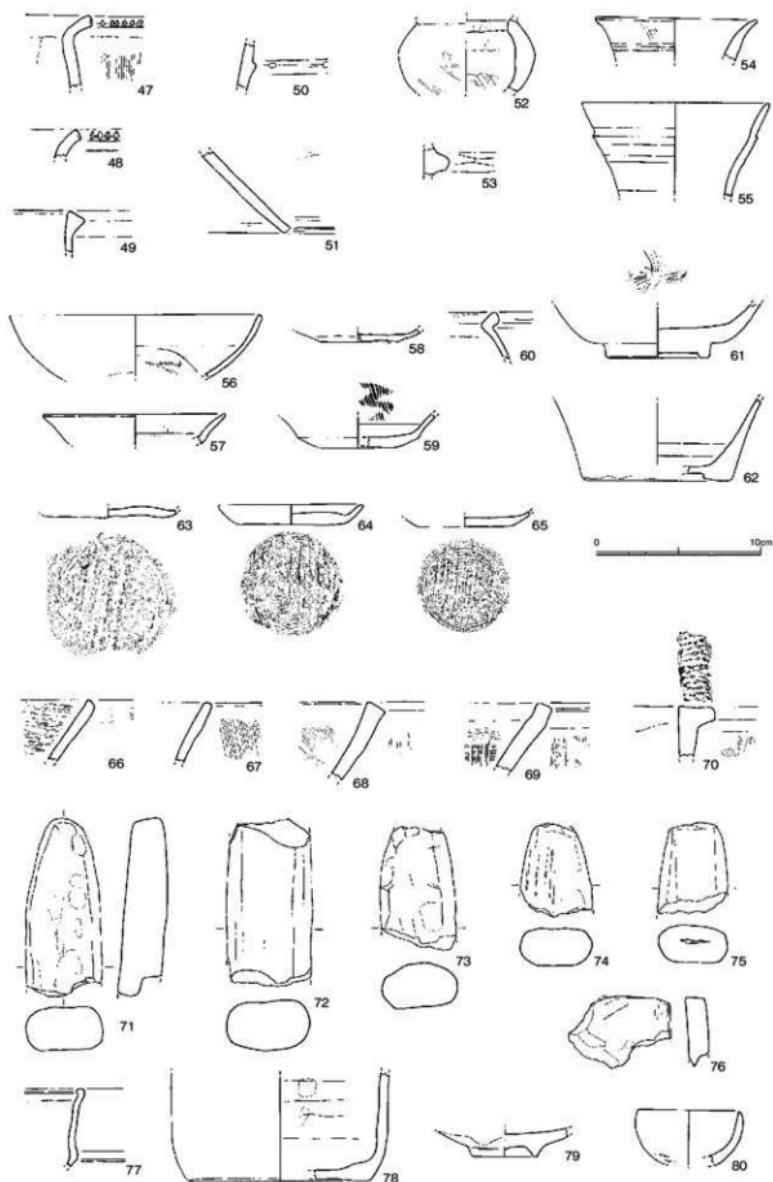


Fig.15 1-II地点上層出土遺物実測図 (1/3)

47、48は板付Ⅱ式の壺で弥生前期前半のもの。外面が煤ける。49は前期末の壺で器面が荒れる。50は低い突帯に浅い刻目が見られる。51は高坏の脚としたが不確かである。器面橙色で研磨調整が残る。52は土師器の小壺で外面に刷毛目、内面下部は削り、上部はなで調整である。53は土師質の胴部に厚い突帯がめぐる。なで調整を施す。54は土師器で口縁部に強い横なでを施す壺か。55は須恵器の口縁部で1/6からの復元。56から59は同案窯系の青磁で56は碗、57から59は皿である。58は下部が露胎、59は底を釉剥ぎする。60は青磁の壺で口縁部内面に胎土目が残る。61は龍泉窯系の青磁碗で釉が厚く疊付内は露胎である。見込みに花文を施す。62は陶器の壺で外面底は露胎である。63から65は糸切り底の土師皿で板目圧痕が残る。64は口縁部が一部欠ける程度で口径8.9cmである。66、67は土師器の土鍋で66は外面に煤が付着する。68は土師質でこね鉢か。刷毛目が残る。69は土師質のすり鉢である。70は土師質の鍋で口縁部上部に繩目圧痕を施す。71から75は土師質の方柱状の土製品で断面隅丸長方形を呈し頭部がすまる。3mm大までの砂粒を多く含み淡橙色を呈す。器面はなで調整で2次焼成の痕跡はない。76は滑石で2面に面取り加工があり、石鍋の再利用品である。77から80は近世陶器で、77は淡橙色に施釉し外面屈曲部から下、内面上部から露胎である。78は外面に薄く茶色に施釉し内面には釉が垂れる。79は茶色釉で外面下部は露胎、内面は輪状に釉剥ぎ。80は黒色の釉を施す。

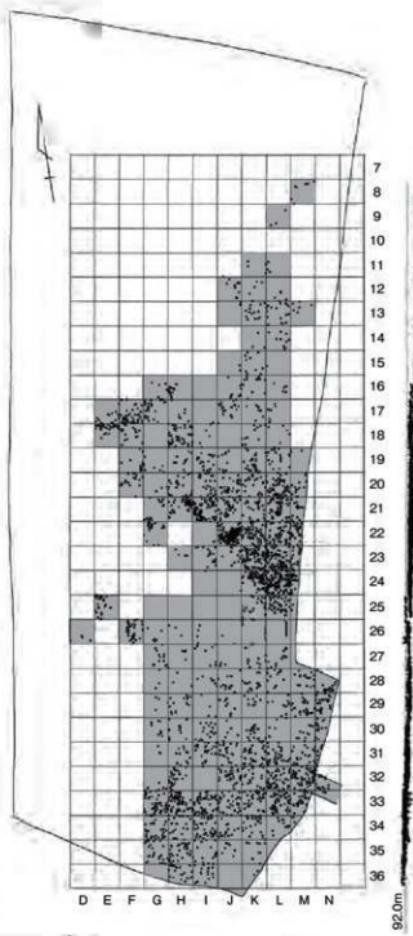
2) 下層の遺構と遺物

(1) 調査の概要

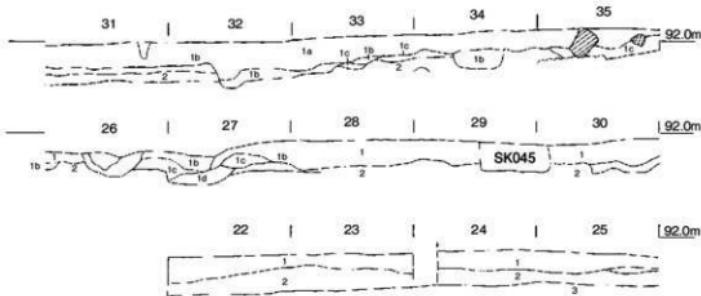
中世の遺構を検出した黄褐色から赤茶褐色土は縄文時代の遺物を含んでおり、遺構検出時から多くの縄文土器等の遺物が出土した。また、SK038などの遺構は上層の遺構と同時に検出し調査を進めた。焼土坑等の中世の遺構の調査が終了した後、Fig.17のように調査区全体に2mグリッドを設定し遺物が多い箇所から順に遺物包含層の掘削を行った。その際、可能な限り遺物の出土位置を記録しながら取り上げた。調査は梅雨時期にかかり、他の地点と前後しながら中断を挟みつつ実施し、時間が許す限り遺物が多い部分から包含層調査グリッドを広げた。Fig.16に遺構の分布、Fig.17に遺物の分布を示している。Fig.17でアミをかけた部分が掘削したグリッドである。

ここで層位について調査区を南北に継断するK-Lグリッド間土層、東西に横断する24グリッド土層を確認しておく(Fig.18)。1層の黄褐色土が縄文時代遺物包含層で厚いところで深さ50cmほどを測る。やや粘質があるシルト質土であるが、大小の礫を多く含み特に24グリッドより北に多い。1層で遺物が出土するのは、遺構で深くなる部分を除いて上部20cmほどである。分層ができる可能性もある。26、27グリッドでは土層に乱れがみられる。ここは現況で水田造成の段差があり、これに伴う掘削を調査時に把握できずに土層に反映できていない可能性がある。2層とした黒褐色土は砂質が強く良くしまる。白色の砂粒を含み目立つ。一部掘削を行った範囲では遺物は出土していない。3層以下は淡い黄褐色系の砂質土でよくしまり、砂礫を含んでいる。24グリッド土層を見ると、地形は東へ下がり、EからHグリッドでは2層が露出し1層は見られない。そしてE-Dグリッドで薄く1層が堆積している。本来連続していた1層が水田造成等で削平を受けたものと考えられる。

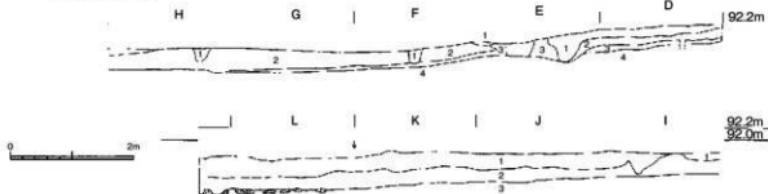
次にFig.17の遺物分布を概観する。遺物の平面分布は特にKL23-24グリッドから北西と33グリッド付近に多く、弧状に集中しているように見える。1層の分布範囲でもある。これに対し、弧状の内側は遺物が少ない。これは先に24グリッド土層で見たように、西側へ地形が高まり包含層である1層が削平を受けたためと考えられる。IJ24グリッドには土層に1層が見られるが、やや薄くなっている。遺物を含む上部がやはり削られ遺物の分布がみられないものと考える。



KLグリッド開土層



24グリッド開土層



- 1a 非赤褐色~黄褐色土
ややしまりなく白色砂むき。
1b 1cに多いが葉より灰食がかる
1c 2cに1g混がる
1d 繩状化土(シルト土)
- 2 黑褐色土 砂質で固くしまる
3 黑灰褐色土質
4 明灰褐色土質

Fig.18 1-II 地点土層実測図 (1/80)

周辺部では北側ほど遺物の出土は薄くなるが、土層との関連は未確認である。東側はN32グリッドで一部広げたところ、東への傾斜が増し包含層は1mほど延長し途絶えた。22、24トレーナンチ (Fig.3) では縄文土器は確認しておらず、東側への遺物の広がりは大きないと考える。また南側10mに位置する1-III地点では縄文時代遺物包含層は確認できなかった。西側は地形的に上がっており包含層が厚くなることはないと考えられるが、DEF25・26グリッドのように遺物の分布がみられ、くぼみ状の部分に1層がたまつたか、遺構の底と考えられる。あとで述べる縄文時代の土坑は残りがよいものがありある程度の削平後も残る可能性があり、西側に遺構が広がる可能性はあるだろう。

KL26グリッドでは近接する集中区から遺物が途絶えている。この部分は土層で触れたように耕作に伴う段差があり、平面図に示していない堀込みや層の乱れがある。また1層の厚みも若干薄くなつており遺物が見られないと考えている。また個別に触れないが、上層の遺構や搅乱、巨石の分布で遺物の分布を欠く部分もある。

次に遺構の概略に触れておく。円形の土坑SK038、039、040、041はEF21・22グリッドでまとまって出土した。この付近は遺構面に2層が露出し遺物包含層がないか薄く、中世の遺構と同時に検出している。J22グリッドのSK069は包含層掘削中に遺物の集中が見られ、2層に達した段階で遺構の堀方を把握することができた。SK060、066なども同様である。SK064、065、070から074は1層を下げ終わつた主に2層上面で検出したくぼみ状の遺構で、1層よりやや明るい黄褐色粘質土を覆土とする。遺物はまれで伴うかはわからない。また人工的な堀込みかも不確実である。

以下、遺構と出土遺物、包含層出土遺物の順で報告する。土器類は遺構毎に図示したが、石器は割り付けの都合で最後にまとめた。またKJ23・24では特に遺物が集中しており、遺構の項で触れる。

(2) 土坑

SK038 (Fig.19, 20, 34) G21 円形の土坑で114×114cm、深さ18cmを測る。浅めだが立ち上がりはしっかりしている。2層と3層の平面的な境で検出した。覆土は暗灰色の砂質土でよくしまる。下部には黄色のシルトがたまる。遺物は覆土中からの出土である。

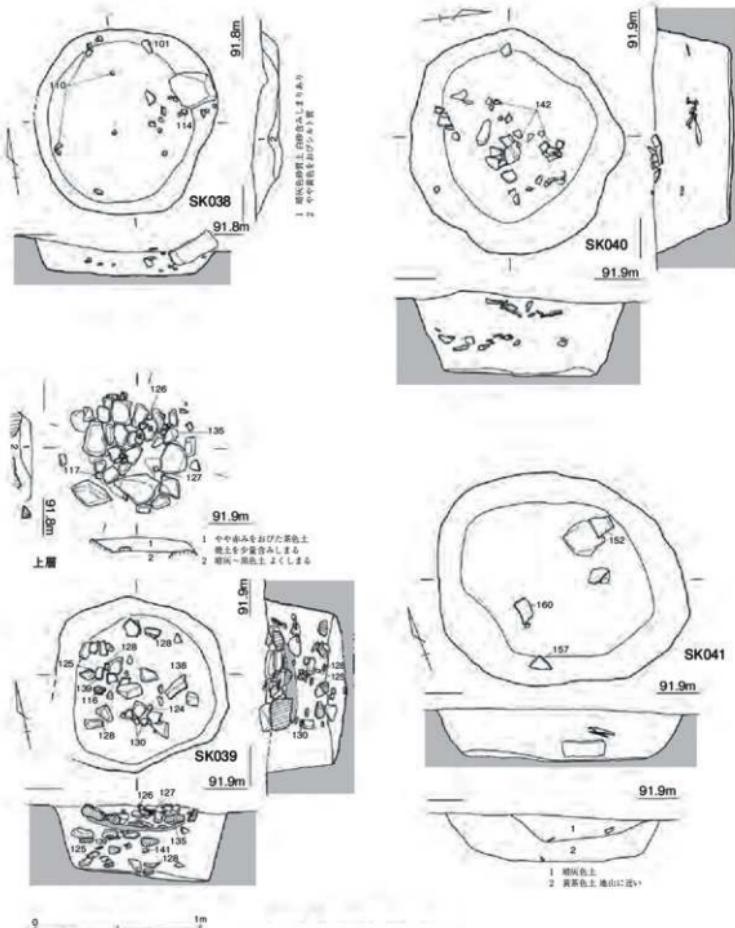
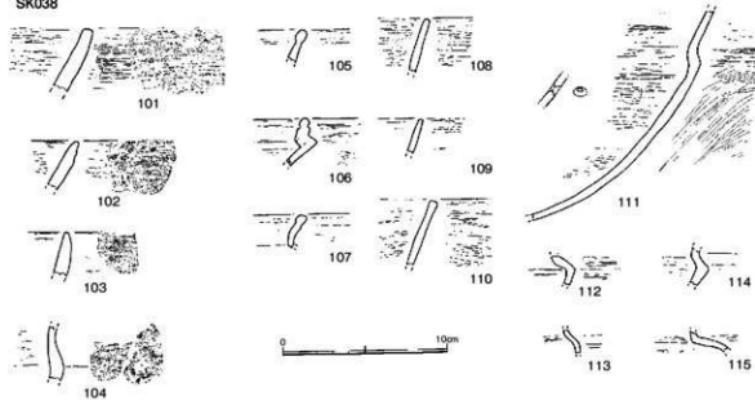


Fig.19 1-II地点下層遺構実測図1 (1/30)

SK038



SK039

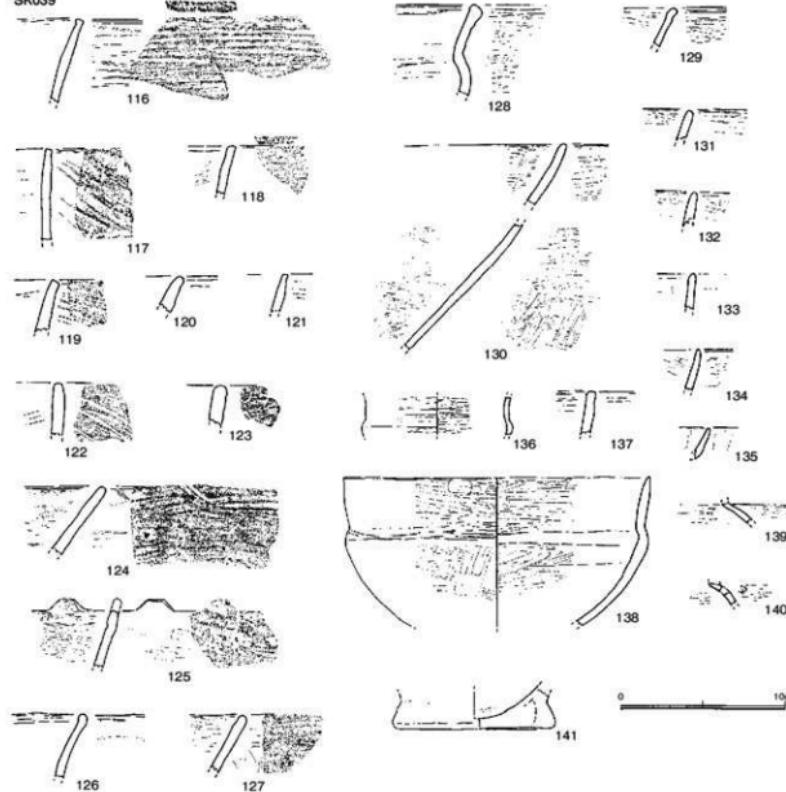


Fig.20 SK038、SK039出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 101から104は粗製土器で外面は101が条痕、他は擦痕が残り、内面はいずれも研磨調整である。104は内面条痕の後なで、外面は煤ける。105から115は精製の鉢、浅鉢で内外面ともに研磨調整である。暗茶褐色を呈すものが多い。106は屈曲がシャープな作りで焼成後の穿孔がある。108は明橙色である。111は接合しない同一個体片に焼成後の穿孔を施す。他に胴部片や安山岩と黒曜石の剥片がある。331は安土岩製の石鎌である。

SK039 (Fig.19, 20, 34) F22 円形の土坑でSK038に接し切られる。平面104×107cm、深さ50cmを測る。上部には20cm大の礫を径60cmほどの範囲に配置し中央をくぼめて炉状を呈する。ただし礫の間は隙間があり、密に組んだ状態ではない。礫の上の覆土は焼土を含む茶色および暗灰色土層でよくしまる。礫の下には最大厚5cmほどの焼土が広がっている。当初、この部分を遺構ととらえ、一回り小さなプランを想定していた。Fig.19の図の上層にその状況を示す。下部は覆土に礫を含むが人為的な配置等はない。土壤の詳細は記録していない。壁の立ち上がりは急で底面は平たい。上下に二つの遺構が重なっている可能性もある。遺物は礫の上下から出土している。図示した中では126が礫より上で117、126、127、135は焼土直下、116、124、125、128、130、138、139、141は下部からの出土である。

出土遺物 116から127は粗製の深鉢、鉢である。外面は条痕、擦過調整で内面は123までは擦過またはなで調整、125から127は研磨を施す。125は口縁部に面取りした突起部を持ち、内面に研磨状に浅い沈線を施す。126は外反する口縁部を軽く内側に曲げて口縁帶状をなす。128から140は精製の器種で特にふれる以外は内外面ともに研磨調整である。132は外面を削り、133は丁寧になでる。135は内外面なでである。128、137は外面に炭化物が付着し130は煤けている。140には焼成後の穿孔がある。138は外面下部に擦痕が残る。1/4からの復元で口径18.5cmを測る。141は粗製土器の底部である。石器は黒曜石の石鎌332と333が出土した。他に胴部片、黒曜石の剥片と石核、安山岩の剥片が出土している。黒川式期と考えられる。

SK040 (Fig.19, 21) F21平面不整円形の土坑で136×131cm、深さ50cmを測り残りがよい。壁の立ち上がりは急で床面は若干の凹凸がある。土層は記録していないが、大きく2層に分かれる。遺物は検出面に近い高さで142がまとまって出土している。別の遺構とも考えたが下部出土の土器片が接合し、同じ遺構と判断した。覆土に礫は少ない。

出土遺物 142から148、151は粗製土器である。142は内外面に条痕調整を施し外面は荒く、内面はなでる。1/6からの復元口径39cmを測る。143から147は外面に条痕を施す。内面は143、144はなで、145は研磨調整、146は条痕、147はなでである。146外面には炭化物が付着する。148は粗製土器の外反部に蝶ネクタイ状の突起を貼付する。149、150は内外面研磨の精製土器である。151は粗製土器の底部である。他に粗製土器を中心とした胴部破片がある。石器は黒曜石の使用痕のある剥片と石核、黒曜石と安山岩の剥片類が出土している。黒川式期と考えられる。

SK041 (Fig.19, 22, 34, 58) E24 不整円形の土坑で平面150cm×130cm、深さ32cmを測る。2層上面で検出し、壁から底は3層である。底は西が若干高い。覆土は上層が暗灰色土で下層は3層に近い。底には台石状の礫があり若干の遺物が覆土から出土した。

出土遺物 152から160は粗製土器である。152は外面条痕調整で肩部はなで調整、内面は研磨で下部には擦痕が残る。1/3からの復元口径24.4cmを測る。153から155は外面を条痕調整で内面は研磨、へらなでで平滑に仕上げる。156は外面上部に擦過痕が残り下部は研磨し、内面はなで仕上げである。157は口唇部に突起を付着し外面に突帯を付す。外面は削り状の調整で内面は荒れる。158の外面は斜め方向の条痕の後に縦方向のシャープな条痕を施す。調整が帯状に途切れる部分があり突帯が剥がれた様な痕跡を残す。内面は細い削り状の条痕を横方向に施し、下部は縦方向のへらなでを施す。傾き

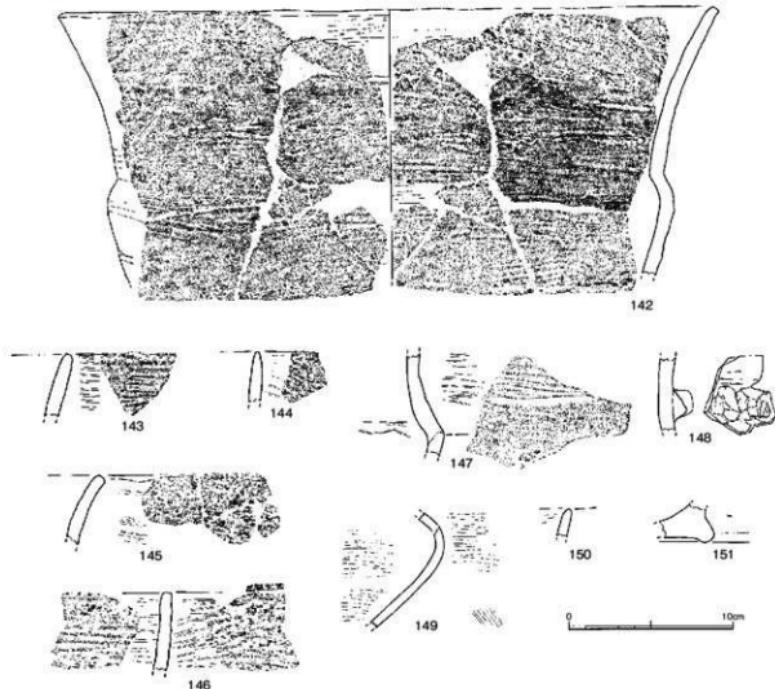


Fig.21 SK040出土土器実測図 (1/3)

は不明。調整は他と異なる。159は深鉢の緩やかな屈曲部で内外面条痕、外面下部は削り、内面上部はなでである。160は内外面横方向の条痕調整で外面下部は力強い研磨を施す。1/4からの復元だが傾きは不確実である。161は外面に板状工具によるなで、内面なでで1/4からの復元である。162から167は精製土器で内外面に研磨を施す。168は粗製土器の底部で器面に気泡が見られる。石器は安山岩製の石鎌334から336がある。336は背面には調整剥離がわずかしか見られない。891は玄武岩を扁平の円形に加工した石器でやや楕円形になると思われる。平面は平坦で滑らかである。側面には打痕が残る。灰色の石材で器面に細かな気泡が見られる。注記にある取り上げ番号がなく他の遺構のものかもしれない。他に黒曜石、安山岩の石核、剥片が出土している。

SK042 (Fig.23, 34) C21で検出した風倒木と考えられる遺構で、3層の遺構面に黒色の粘質シルト土壤がみられトレンチを入れ遺物が出土した。平面図等は記録していない。

出土遺物 171から175は粗製土器で173が内外面条痕調整の他は外面条痕で内面は研磨または擦過で平坦に仕上げる。172の口唇部には浅い刻みを施す。176は内外面横なで調整で口唇部に密に浅い刻みを施す。177はなで調整で器面荒れ気味。178から182は内外面に研磨を施す精製品である。

SK041

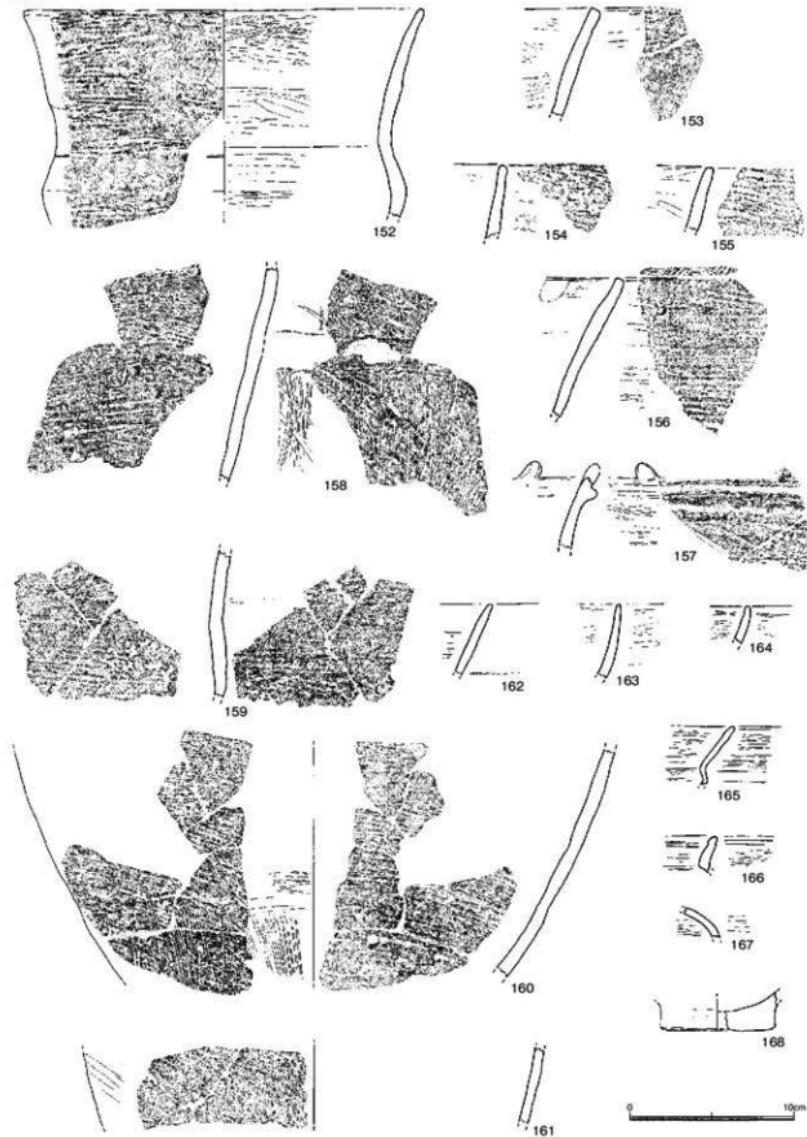


Fig.22 SK041出土土器実測図 (1/3)

SK042

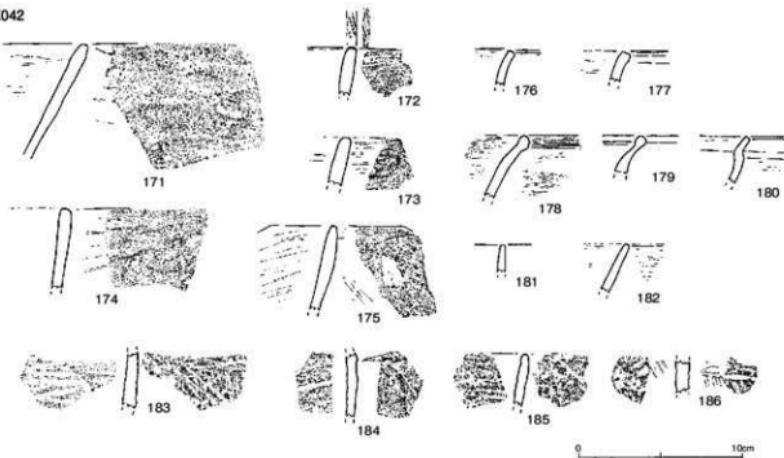


Fig.23 SK042出土器実測図 (1/3)

180は口縁部内面にわずかな段を作る。183から186は滑石を少量含む小片である。内外面に条痕または削り調整が残る。186には横と斜方向に沈線文を施す。石器は安山岩製の石錐337の他に黒曜石、安山岩の剥片等が少量出土している。

SK060 (Fig.24, 25, 34) GHI21 平面形はカーブを描く溝状の造構で延長540cm以上、幅104cmを測る。I22グリッド部分は攪乱で乱されプランは不明だが少し伸びる程度と考えられる。掘方のレベルを記録しておらず、遺物の出土状況を図に示した。これからみると深さは102cm以上で壁の立ち上がりは急傾斜である。

出土遺物 土器は小片ばかりである。187から194は粗製または半精製の土器である。187は外面条痕、内面なで調整で、188は外面をヘラ状工具で深めに削るようになる。189、190、192、193はなで調整である。191は研磨状の擦過、194は内外面に条痕を施す。195から198は内外面とも研磨調整の精製土器である。石器は338、339が黒曜石、340から342は安山岩製の石錐である。342は先端部に主剥離面の打点を残す。他に黒曜石のスクレーパー片、黒曜石・安山岩の使用痕のある剥片、剥片類が出土している。

SK061 (Fig.24, 25) H33 平面形不整円形の浅いくぼみ状の土坑で南側がくぼむ。北側は造構面全体の削平もあって不明瞭であった。現状で平面262×235cm、深さ23cmを測る。

出土遺物 遺物は少ない。199は粗製深鉢で削り調整後になで消す。200は蝶ネクタイ状の突起と粗製土器の頭部に貼付する。201、202は粗製土器の底部で外面に擦痕が残る。

SK063 (Fig.24, 25, 34) G34 平面梢円形の浅いくぼみ状の土坑で西側は掘削していない。平面210以上×146cm、深さ23cmを測る。覆土は黄褐色のシルトで2層に掘り込む。

出土遺物 203は粗製深鉢で外面削り調整。204は外面削りで浅い沈線を施す。205は精製浅鉢で内外面研磨。206は粗製土器の底部で1/4からの復元である。遺物は少なく晩期に収まる。包含層で取り上げた造構検出面より上の遺物も含んでいる。343は黒曜石の剥片でノッチ状に加工する。他に黒曜石が3点出土している。

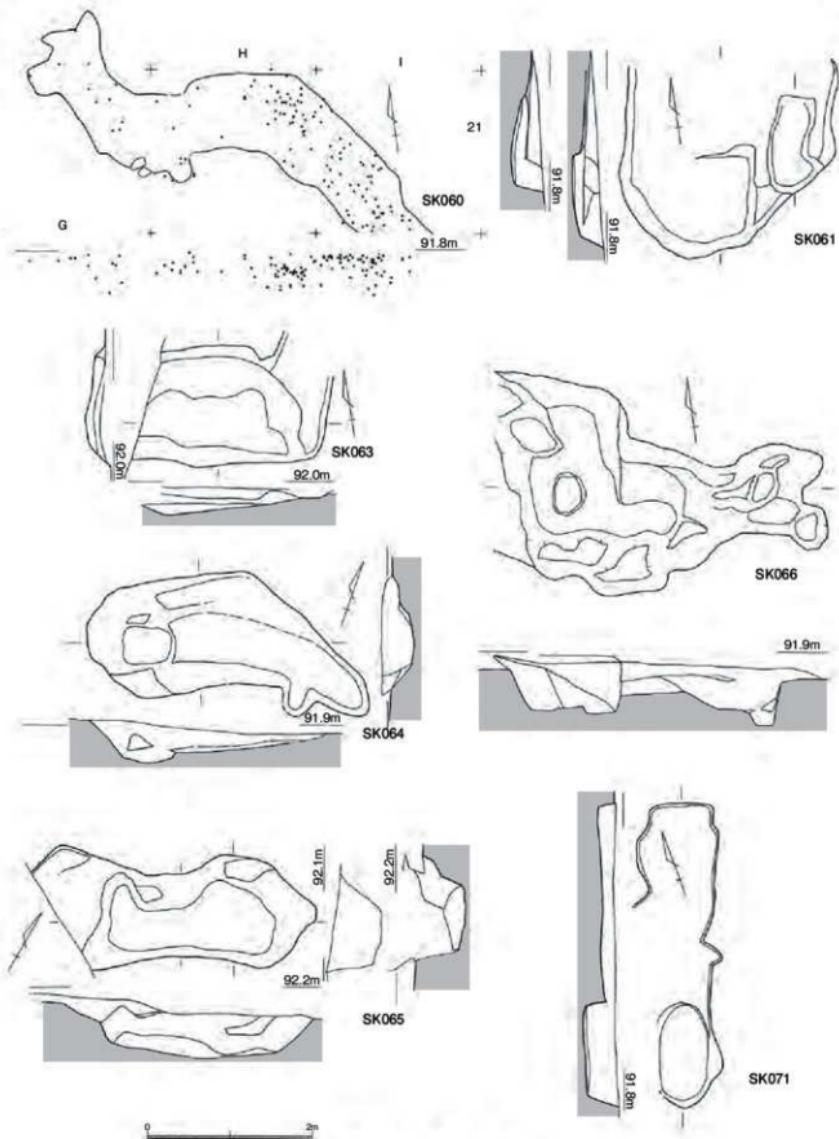
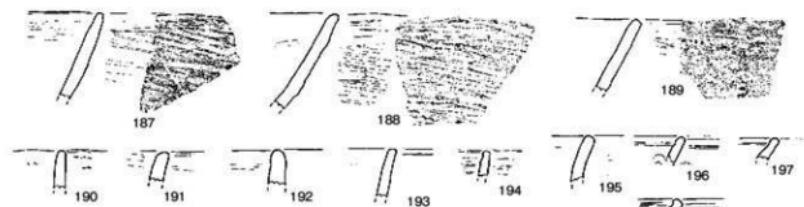


Fig24 1-II 地点下層遺構実測図2 (1/60)

SK060



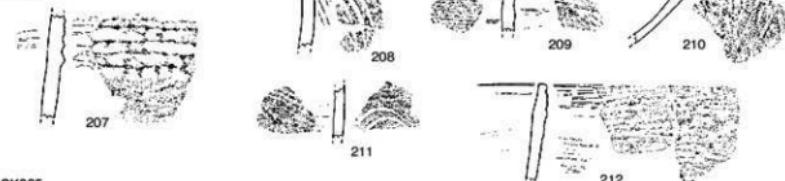
SK061



SK063



SK064



SK065



Fig.25 SK060、061、063、064、065出土器実測図 (1/3)

SK064 (Fig.24, 25, 34) HI34・35 溝状のくぼみ状の土坑で西側が深くなる。1層調査後の2層上面で検出した。覆土は黄褐色のシルトで1層に近いが明るい。人為的な造構ではない可能性がある。遺物は少ないが、轟式など古手の遺物がある。

出土遺物 207は轟B式土器でミミズ腫れ状の突帯を4条貼付する。全体に摩耗する。208は外面幅広の条痕、内面は狭い条痕で外面橙色を呈す。208は外面弧を描く条痕で轟A式か。赤みを帯びた淡茶色を呈す。209は外面斜方向の後、調整痕によるものか横方向の細く低い突線が3条見られる。内面は条痕調整。210は外面条痕、内面丁寧なまで底部に近いと考えた。212は外面条痕の深鉢で造構の

検出レベルより上のもので伴わない可能性がある。344は黒曜石製の石鎌で、他に黒曜石・安山岩の剥片等が少量ある。

SK065 (Fig24, 25, 34) I36 調査区南端で検出した溝状の土坑で平面358×158cm、深さ80cmを測る。1層調査後の2層上面で検出した。覆土は黄褐色のシルトで1層に近いが明るい。人為的な遺構ではない可能性がある。遺物は少ない。

出土遺物 213、214は横方向の条痕を内外面に施す。内面は深い。213は口縁部にヘラ状工具で刻目を施す。215は外面に条痕の上から弧状の条痕を施す。内面も条痕である。前期の遺物が少量だがまとまる。345、346は安山岩、黒曜石製の石鎌である。他に黒曜石の石核、黒曜石と安山岩の剥片類が出土している。

SK066 (Fig24, 26, 34, 35) EF17・18 不整形の溝状を呈す。底の凹凸が大きく、複数の遺構の切り合いの可能性もある。全体で403×149cm、深さ65cmを測る。黄茶褐色の粘質シルトを覆土とする。

出土遺物 216から218は粗製土器の口縁部である。216は外面条痕、内面なで調整。218は山形の口縁部を持ち器壁は薄手である。外面は条痕の後などで下部は研磨調整で煤ける。内面はヘラなどである。217の外面は削り。219は外表面を研磨状のヘラなどで調整、220はなでで半精製品である。221、222、223は屈曲部で221は外表面を研磨調整、他は外面を条痕、削りの後などである。224から230は基本的に内外面研磨調整の精製品である。224は外表面を擦痕のあと研磨調整で内面は研磨を施す。225、226は1/4からの復元で口径14.6、9.2cmを測る。225は山形の口縁になると考えられる。230は内外面擦過で器面は平滑である。233は粗製土器の底部で1/4から復元した。石器は347から359を図示した。347から350は黒曜石製石鎌、351、352は安山岩製である。353と355は黒曜石製の石錐、354は安山岩製でスケレーパーある。356は安山岩製の石匙でE17グリッド出土だが遺構に伴うかは不確かである。

SK066

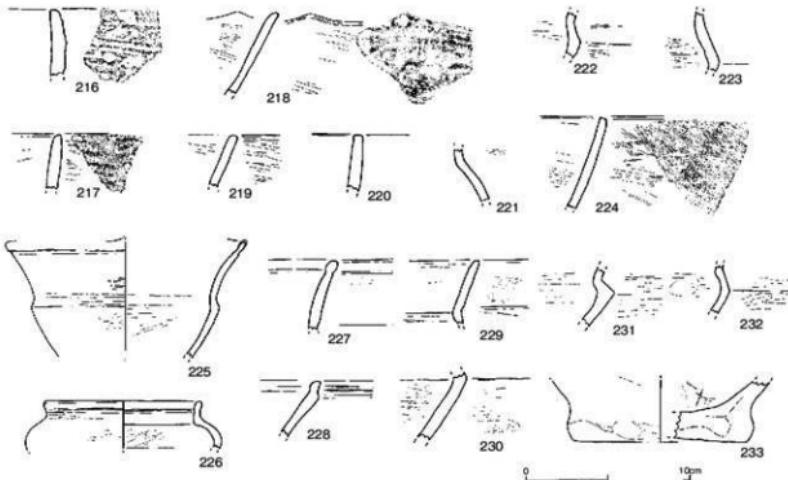


Fig.26 SK066出土土器実測図 (1/3)

357から359は安山岩製のスクレーパーである。他に剥片等が比較的まとまって出土している。

SK069 (Fig.27, 28, 35) J22 包含層掘削当初より遺物の集中が見られ、遺構の存在が予想された。20cmほど掘り進んだ段階で平面8の字形の遺構を検出した。二つの遺構の切り合いの可能性があるが、当初南側遺構の中心プランを確認し掘り進め、壁を掘削する作業中に北側のやや周囲と土が異なる部分を掘削した。北側部分では遺構として掘りくぼめた部分に遺物は少なく、掘り違いの可能性もある。そうなると確実な遺構は南側の径125cm、深さ45cmの範囲で、包含層として掘削した上部が含まれる。覆土は上部が赤みが強くやや粘質の茶褐色シルトで1層に近い。下部は暗灰色の枯質土となる。土層図の4層とした部分の遺物は、掲載した中では237、239、243、246があげられる。包含層で掘削した遺物と遺構内の上・中位の遺物には接合したものがある。上部はプランがはっきりしないためJ22グリッドの出土遺物をSK069出土とした。若干のまじりがある可能性がある。また遺物の出土位置は煩雑さを避けるためドットで示した。

出土遺物 234から244は粗製土器である。外面は条痕または削り調整を施す。内面はなでまたは掠過で平滑な器面をなす。234は1/4からの復元口径27.8cmを測る。外面上部は条痕で下部はヘラなで状調整の後に擦痕を施す。235は1/4強からの復元である。丸底で下部は橙色を呈し浅いあばた状のくぼみが見られる。2次焼成によるものか。外面は削り状の荒い調整後に軽いなでを施す。内面は丁寧なで平滑にした後にヘラ状工具で粗くなる。内面の底より5cmほど高い位置に炭化物が付着する。242の内上面部は削り状、下部は研磨を施す。244は外面前りで内面研磨である。245から258は内外面研磨の精製土器である。259は平底の底部で器面は荒れる。胎土は砂粒を含むが細かく橙白色を呈す。胴部との接合痕が明瞭である。260は粗製土器の底部で1/4から復元した。石器では360から370を図化した。360から362は黒曜石製、363、364は安山岩製の石鏃である。365、366は黒曜石製、367、369、

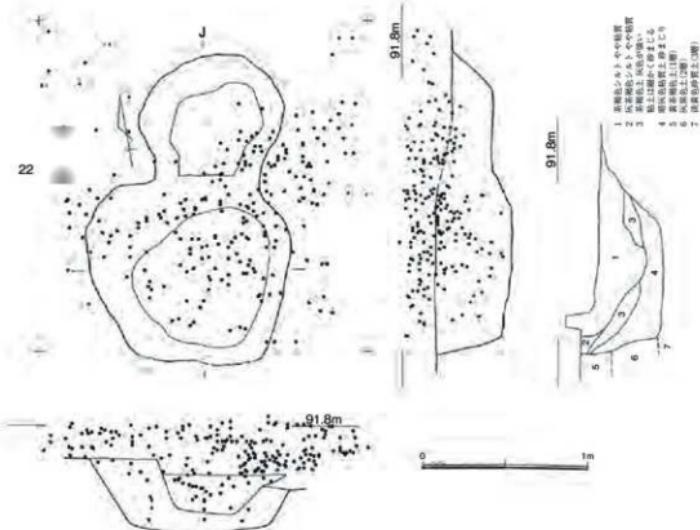


Fig.27 SK069実測図 (1/30)

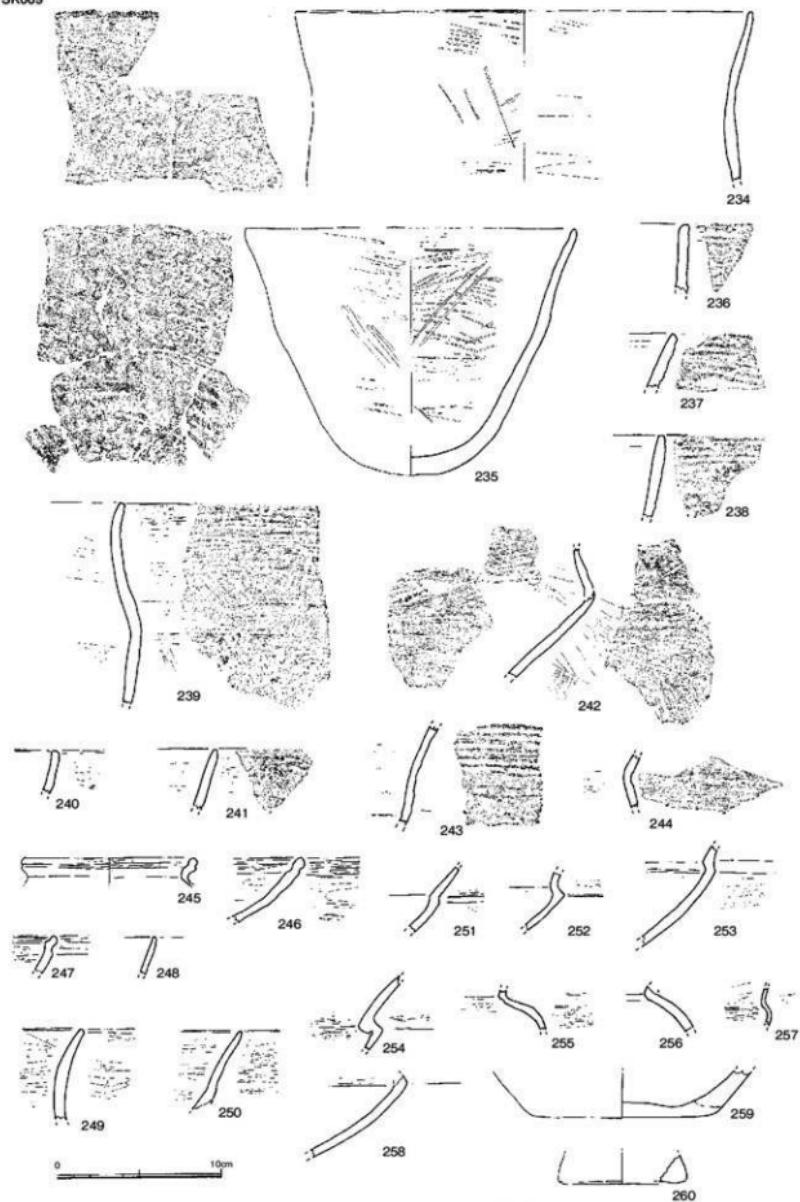


Fig.28 SK069出土土器実測図 (1/3)

370は黒曜石製の削器である。368は安山岩製の石匙で横長剥片側片に加工を施し、両端に自然面を残す。つまみと別に突起部を持つ。石材は色調が黒くきめ細かい。剥片等は多く黒曜石製の削器、石鎚の小破片、使用痕のある剥片、石核などを含む。

SK070 (Fig.16, 30, 35, 57) J21 土坑状のビットで全体図に位置のみ示した。径30cmほどである。

出土遺物 遺物は少ない。262から265は粗製土器で外面条痕または削り、内面はなで調整を施す。266、267は内外面研磨の精製土器。268から270は条痕を施す。268の内面の条痕は深く、269外面は弧状を描く。前期の可能性がある。270は内面なでである。石器は892、893は敲石で892は側刃を中心に全体に敲打痕があり、893の平坦面は磨り、側刃は荒れている。灰色で黒色鉱物を含む。遺構の周辺の遺物を含む可能性がある。他に黒曜石片がある。

SK071 (Fig.24) I31・32 浅いくぼみ状の遺構で、南側の深い部分は別の遺構と考えられSK062とした。切り合いは不明である。全体で375×100cm、深さ22cmを測り、SK062部分で118×68cm、深さ38cmを測る。覆土は1層に近い。遺物は出土していない。

SK072 (Fig.29, 36) KL32,33 溝状くぼみで検出した平面は250×112cm、深さ40cmを測る。遺構は2層上面で検出したが、土層断面を観察すると少なくとも1層下部から明瞭な落ちがある。Fig.18のKLグリッド間土層の32、33グリッド部分に落ちが現れている。覆土の質は1層に近いが、色調が明るく薄く橙色かった明黄褐色を呈す。

出土遺物 371は黒曜石製の石鎚で鍔形を呈す。372は縦長剥片の先端に槌状剥離を施す彫器である。他に剥片が少量出土している。

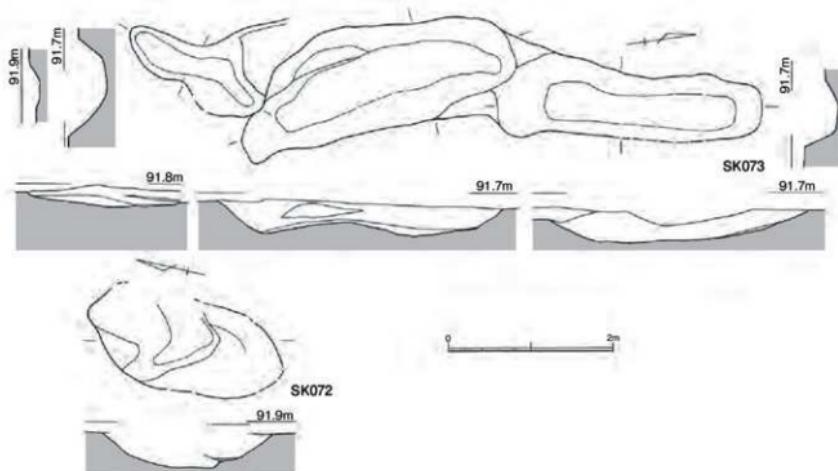


Fig.29 SK073, 072実測図 (1/60)

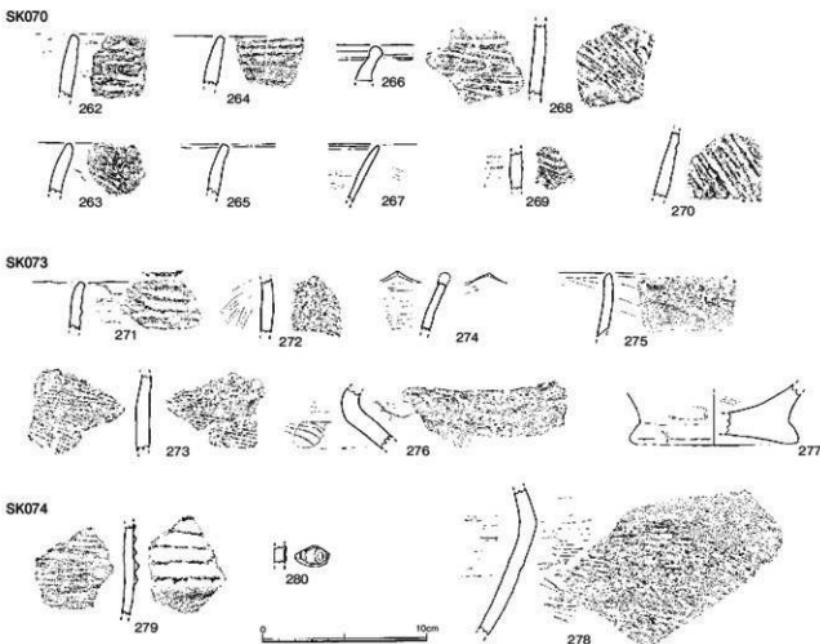


Fig.30 SK070、073、074出土土器実測図 (1/3)

SK073 (Fig.29, 30) L30・31 最大幅150cm、深さ37cmほどの溝状のくぼみが連続する。個別のものかもしれないが一括して扱う。1層掘削前の2層で検出した。覆土は明るい黄褐色の粘質シルトである。

出土遺物 遺物は少ない。271は外面は深い横方向の条痕で口唇部に浅い刻目を入れる。内面は横方向のなでである。272は外面に浅い縄文状のくぼみが見られる。273は内外面条痕で前期かと思われる。274から278は検出面より上の包含層掘削中の遺物で造構に伴わない可能性がある。274は内外面研磨調整で口縁部に突起がある。275は外面削り内面丁寧なで、276は内外面擦過の粗製土器である。277は粗製土器の底部で1/4からの復元である。278は粗製深鉢の屈曲部で外面条痕である。石器は安土岩製の削器2233、黒曜石、安山岩の剥片が少量あり、使用痕があるものもある。

SK074 (Fig.30) J26付近で検出した溝状のくぼみで位置をメモしたのみで実測を行っていない。

出土遺物 279は轟B式土器で高い4条の突帯を貼付する。280は外面に浅い突帯に刻目を施す。天地左右不明である。他に土器小片、黒曜石、安山岩片が少量ある。

KL23・24グリッド (Fig.17, 31, 32, 33, 36) 包含層として調査したうちで最も遺物が集中して出土した地点で、丁度グリッドと重なるように方形の集中域がみえる。床も確認しておらず造構とする

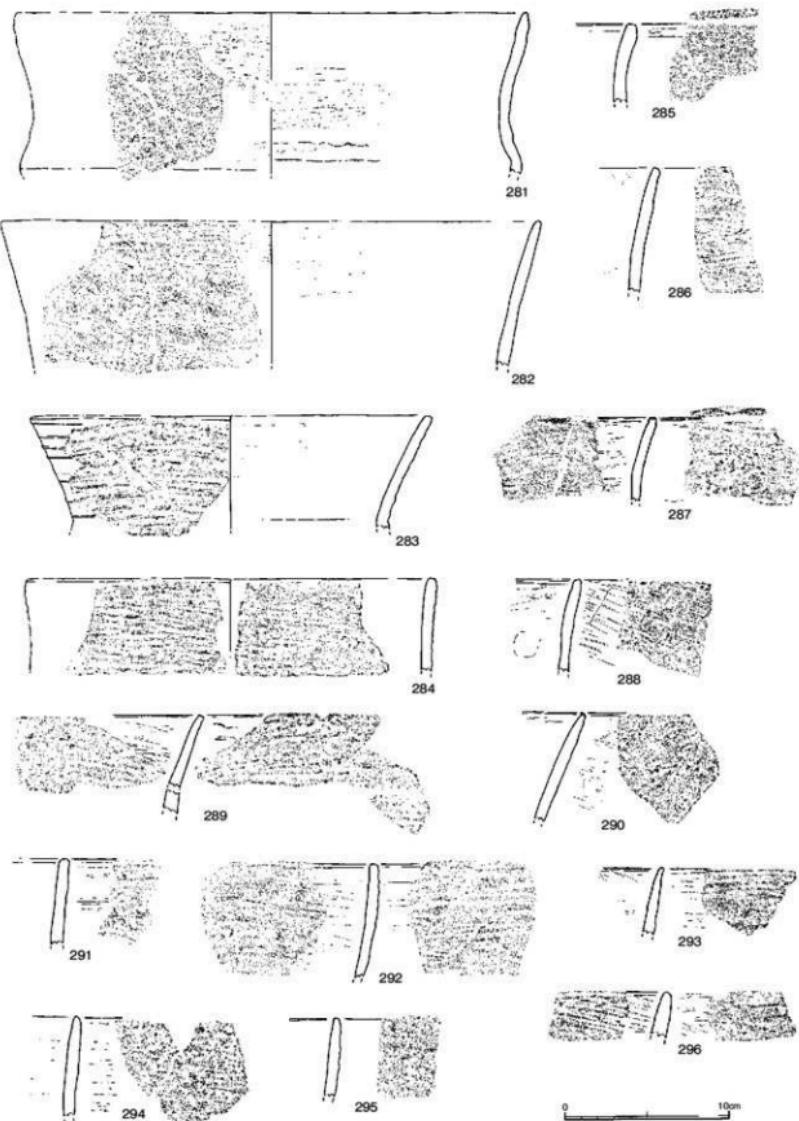


Fig.31 KL23·24グリッド出土土器実測図1 (1/3)

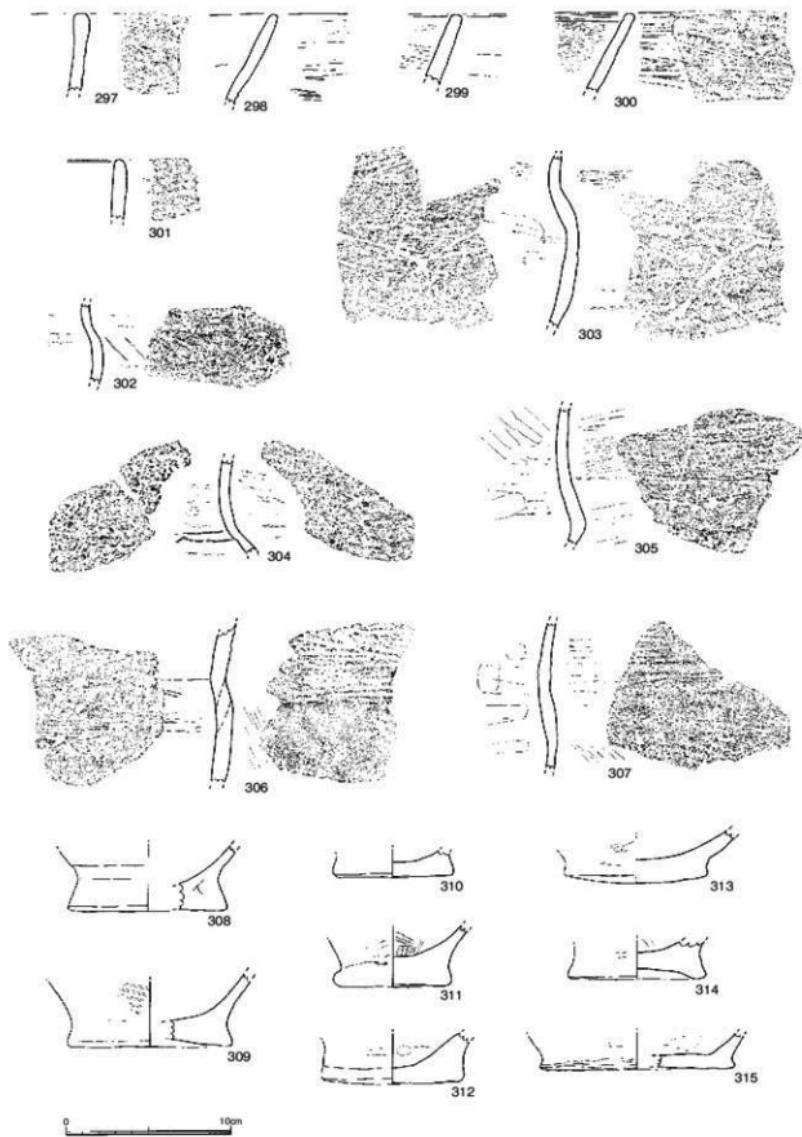


Fig.32 KL23·24グリッド出土土器実測図2 (1/3)

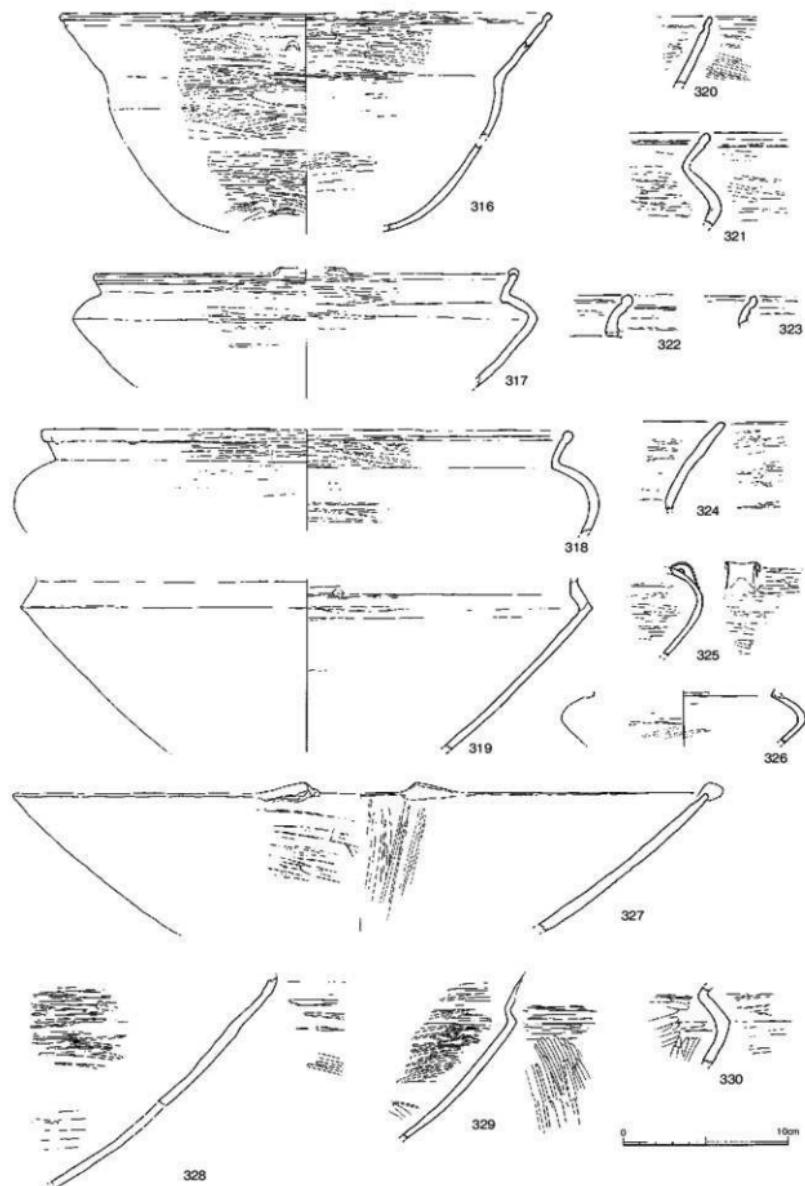


Fig.33 KL23・24グリッド出土土器実測図3 (1/3)

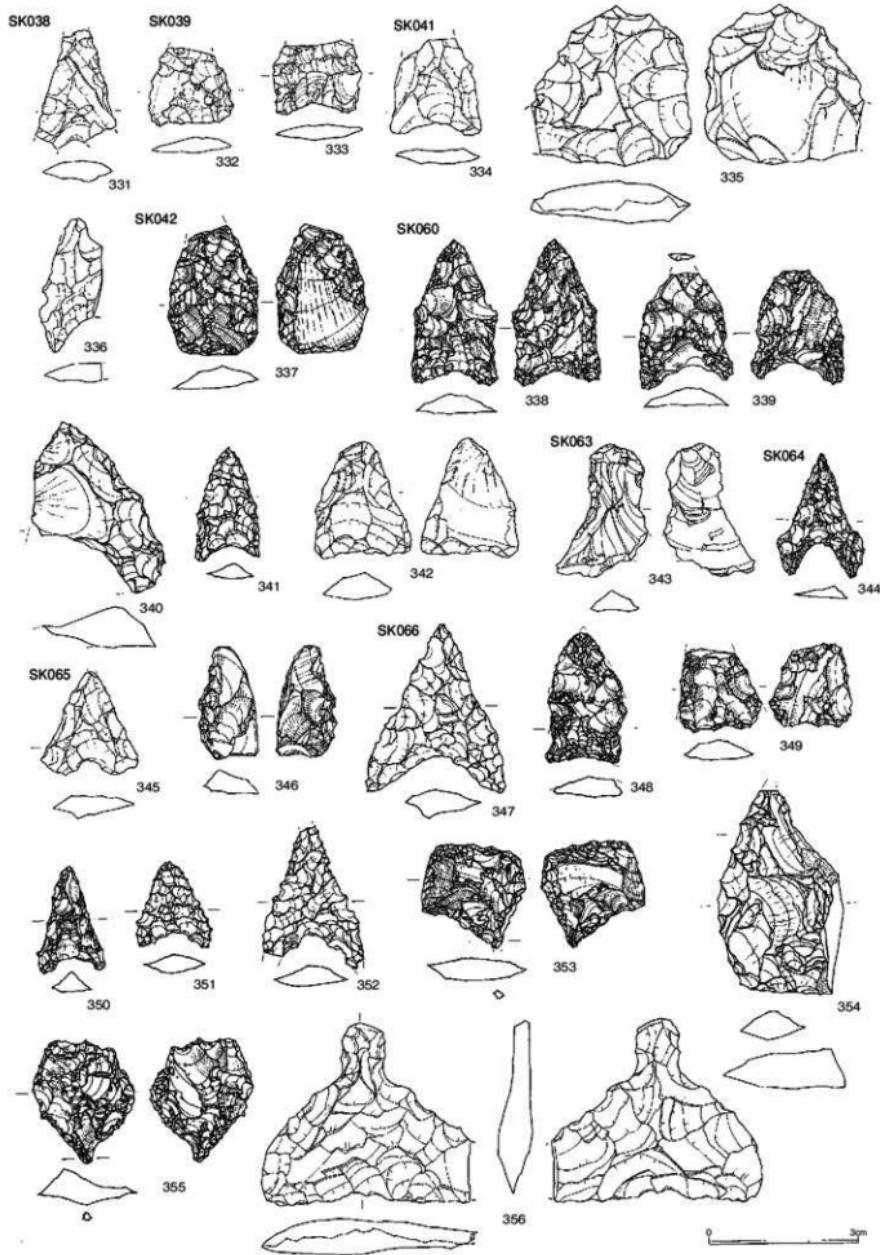


Fig 34 1-II地点下層遺構出土石器実測図1 (1/1)

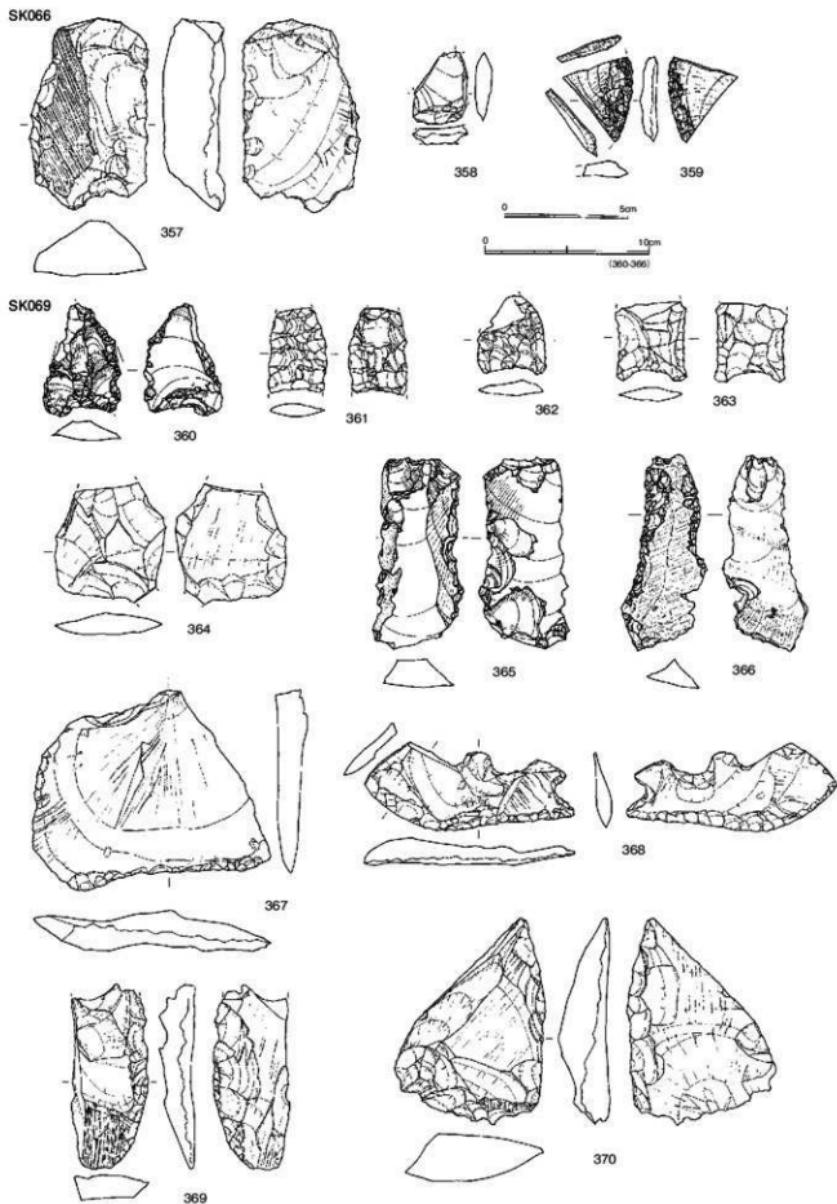


Fig.35 1-II 地点下層造構出土石器実測図2 (1/1, 1/2)

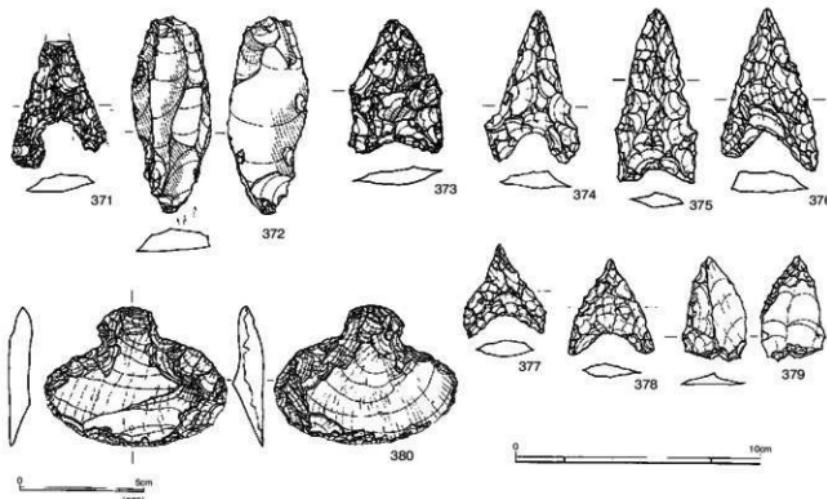


Fig.36 1-II 地点下層遺構出土石器実測図3 (1/1, 1/2)

積極的根拠はないが、個別に取り上げて集中部の遺物の様相を示したい。周囲の包含層に比べて比較的大きく接合できたものがある。

出土遺物 281から315は粗製土器である。281から292は外面条痕調整で内面は擦過、なでで平滑に仕上げる。口縁部は外反するものがほとんどで292のように内湾気味に仕上げるものもある。289から301は外面を擦過、浅い削り調整で内面は同様に平滑に仕上げる。300は内面研磨調整で口縁直下に浅い沈線を描く。301も内面研磨である。303から307は頸部から屈曲部で、外面は上部が条痕で下部は擦過、削りと調整が異なる。308から315は粗製土器の底部でおおむね断面台形を呈し、313は底に丸みがあり、314は上げ底になる。309が外面に条痕が残るが他はなで調整である。315は復元径が11.6cmと大きく、底は薄く台形が発達しない。外底に横縞質の圧痕がある。308が1/5、309が1/4、311が1/2、315が1/6からの復元である。316から330は内外面研磨調整の精製土器である。研磨は横方向がほとんどだが、327の内面、329の外面に縱方向が見られる。317は口唇部に突起が、325は肩部に輪状の突起を貼付する。327は外面を擦過、なでで平滑にするが削り痕が全体に残る。内面の研磨は浅く丁寧である。淡黄茶色の深い色調で口唇部に突起を貼付する。石器は373から380を示した。373のみ黒曜石製で他は安山岩製である。379までは石鎚、380は石匙である。他に石片と考えられる個体が1点ある。他に剥片類は多く、安山岩製削器片がある。

(3) 包含層の調査

中世等の遺構の調査終了後に縄文時代の遺物包含層の調査を行った。Fig.17に示したように2mグリッドを設定し、遺物が多い箇所から順次掘削を行った。出土した遺物は極力位置を記録した。落としたドットの点数は約3700点である。この他に1つのドットで複数を取り上げたり、原位置から動いたためグリッド単位で取り上げたもの、遺構検出時等に取り上げた遺物も多い。

出土した遺物は、土器は撚糸文と押型文が少量、次に轟A、轟Bなどが一定量あり、そのほかの大部分を晩期の古閑式と黒川式が占める。早期、前期、晩期にわたる。石器は黒曜石、安山岩の剥片石器が多く、特に石鏃はI-II地点だけで281点にのぼる。出土した層位は先に触れたが、1層とした黄褐色から赤黄茶褐色のシルト質土層の上部である。この層は脇山地区の他の地点の縄文時代遺物包含層と共通し、入部等の平野部での縄文時代の遺物包含層とも類似する。主にレス堆積由来と考えられているものである。時期的にアカホヤ火山灰が降灰したはずであるが確認できていない。層位の上下関係は確認できなかった。

今回の報告に当たって、土器は口縁部についてはできるだけ掲載できるように努めたが小片や類似品がある程度あるものは図化していない。石器は掲載したものは一部のみで、剥片石器で図化・掲載できていないものが多い。特に安山岩製の石鏃は図化した割合が少なくなった。また使用痕のある剥片や石核については全く掲載できていない。小結の項で数量を示している。また掲載した土器の出土位置と器種のみを巻末の表3に示し、石鏃、削器、石錐等の定型化した石器については、巻末の表4と写真に掲載遺物に統いて示した。またいくつかの遺物分布についてまとめの項で若干触れる。

土器 (Fig.37-52)

381から386は撚糸文土器である。381から383は同じD22グリッドからの出土で同一個体と考えられる。381ではわずかに外反気味の口縁部で外面に斜方向の撚糸文が施し、内面は上部には横方向に原体条痕を施す。口縁部の外面には施文後に横なでを施し、内面には指押さえ痕が見られる。胎土には石英、長石を中心とした砂粒が多い。器面は外面が橙色かかった灰色、内面淡灰褐色で外面は全体に煤ける。焼きは固い。384から386は斜方向に撚糸文を施文する。384は内面に一部条痕が見られる。385は内面の指圧痕が顕著で大型の砂粒が多い。386は橙色が断面内部におよんでいる。後3点は381と同一個体の可能性はあるが不明である。387は外反する口縁の器壁が薄い、外面に横方向、内面上部に縱方向に梢円押型文を施文する。内面はなで調整で指圧痕が見られる。胎土の砂粒は細かいが粘土はやや粗い。

389から485は轟A、B式を中心とする晩期以外の遺物を集めた。条痕文土器については内面に比較的深い条痕を施し、胎土の粘土質が粗めのものを抽出しこの一群とした。条痕は2枚貝によるものが多い。混じりもあると思われる。

389から404は口唇端部に刻目を施すものを集めた。389から396は口縁部を面取りし口唇端に刻目を施す。調整は基本的に外面の条痕を弧状に施し、内面に横方向の条痕を施す。外面は煤けて灰褐色から暗灰褐色を呈す。刻目は392、394の様に端部に急角度に短く施すものや389、393のように浅い角度で下方向に刻むもの、さらには軽く長めに引く391もある。395の一部は刺突状に施している。内面の条痕は明瞭で深いが、390はなで消して指圧痕が顕著で、391も条痕の後に軽くなっている。395は口唇部がくぼむまでなで、内面の条痕も弧状で橙色を呈す。389の内面には7mm大の深い圧痕が残る。397は口縁部を急に内側に曲げ、口唇部を深く鋭く刻む。外面は様々な角度で斜方向に条痕を施した後に縦に条痕を入れる。内面は横方向の荒い条痕である。器壁は薄く固い。この中ではやや異質である。398もこれに近い特徴を持つ。399は内外面とも横方向の条痕の後に縦に条痕を入れる。口唇部刻みは不確実である。400から404は内面の条痕が見られないか、なでてつぶれる。浅い角度で下へ刻目を施す。器壁は薄く外面は淡灰色から橙色を呈す。401は破面近くに隆起があり突帯かもしれない。

405から422は外面の条痕を弧状に施す胴部破片である。内面は417を除いて横方向と考えられる一方向の条痕を施す。389等の胴部になると考えられる。胎土は大きめの砂粒を含むものが多く、421のように砂粒をわずかしか含まず胎土がきめ細かいものもある。418、419は暗灰褐色と暗めの色調だ

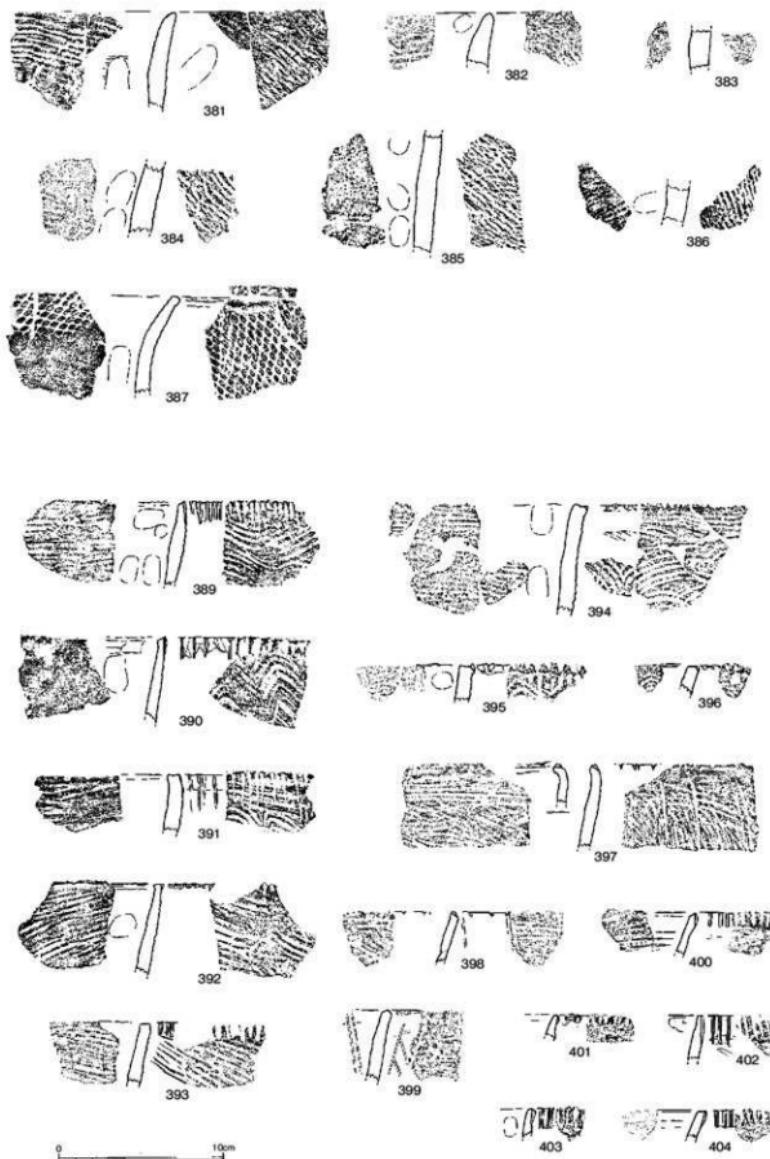


Fig.37 1-II 地点包含层出土土器实测图1 (1/3)

が、淡橙色や灰橙色のやや赤みを帯びた色調のものが多い。413、414、415は同一個体と考えられる。419は条痕文、色調、胎土から394の同一個体の可能性がある。420の外面条痕は特に深く幅広である。422の条痕は幅狭で細かく、胎土の砂粒は細かいが粘土は砂質である。423から426は外面に2方向の直線的な条痕を規則的に施し、偶発的にせよ菱形、山形を描く。そんな一部を示した。内面は横方向の条痕である。

427から437は突帯に刻目を持つ一群で西之園式を含む。一つひとつ特徴がある。427は2条の幅広で厚みがある突帯で、なでは目立たず貼り付けは弱い。刻目は棒状工具で上下別方向に施す。上の突帯の刻目は途中で止まったものがあり右上方から刺突状に施す。刺突の先の痕跡は丸く竹管状である。外面は縦方向の条痕が薄く残り、内面は鉄分付着で見えにくいかがなでのようである。胎土は大きな砂粒は含まないが砂質である。胎土は以下同様である。全体にもろい。428は2条の薄い粘土帯を貼り、指頭によると思われる刻みを施す。口縁部は一部のみ残り、刻目状の痕跡がある。器面は荒れ気味で条痕は見られずなでのようである。429はわずかに外反する口縁部に2条の断面三角突帯を貼付し深いヘラ工具による深い刻目を刺突状に施す。下の突帯下端には刺突による円形のくぼみ状が見られる。偶発的なものかもしれない。器面は荒れて調整不明で淡黄色を呈す。430は口唇部から幅広で薄い突帯を貼付し指頭による浅い押圧刻みを施す。内面は条痕が薄く残る。金雲母が目立つ。431は厚い三角突帯に先が割れた工具で刺突状に刻目を施す。外面は突帯貼付前に不規則な斜方向の条痕、内面は縦方向の上から横方向の条痕を施す。金雲母を多く含む。432は三角突帯に指による刻目を施す。いわゆる刻目突帯文土器に近いが、胎土がこの一群に近い。外面に横方向の条痕、内面は指頭圧痕が残る。433は太く高い突帯を貼付し横なではない。刻みも大きく指によるものか。内外面なでで外面に炭化物が付着する。434は2条の三角突帯を横なでしシャープな形状に仕上げ、棒状工具で刻む。口唇部も刻む。胴部には弧状の細いミミズ腫れ状の突帯を貼付する。内面は横方向の条痕である。435は2条の突帯を貼付し横なでを施し、上下異なる方向に深めの刻目を密に施す。口唇部外端も浅く密に刻む。外面は縦方向の浅い擦過状の条痕を施し、内面は横方向のなでで条痕を消し、下部に横方向の条痕がわずかに残る。その下には横方向の前の縦条痕が残る。いずれも浅い。436、437は胎土が密で細かく橙茶色を呈し、これまでと異なる。436は口唇部を面取りし軽く外に屈曲し、突帯は断面三角でシャープな形状を呈す。刻目はヘラにより狭く深く鋭い。内外面に浅く幅狭の条痕が残る。437は口唇部を条痕工具でなで沈線状をなす。断面三角形の突帯に刺突状の刻目を施し、突帯の下に幅5mmほどの刻目を上から下へ抉るように施し細い条痕状の痕跡が残る。内外面とも幅広の深い条痕を横方向に施し、外面はその上から幅狭の条痕を弧状に施す。

438から457はミミズ腫れ状の突帯を持つ轟B式土器で口縁部にはすべて刻目を施している。器面調整は条痕を施し、439、443、447、449、453から456は内面をなで消す。外面は茶褐色から暗褐色を呈す。刻目は438、440のように口唇部に浅く刻むものと口唇端に刻むものがある。439は突帯が重なり、その下に斜方向の沈線状が見られる。441は斜方向に突帯貼付前の削り状の条痕が残る443の突帯は斜方向に配置する。445は口唇部の刻目が鋭く深い。斜方向の条痕が見られる。器壁が固い。446は口唇部に浅いくぼみ状刻みを指で施し、口縁直下に細く短い沈線状の刻みを複数方向に斜めに入れる。448は山形口縁をなし、頂部から垂下する突帯の後に、口縁部に平行する横方向の突帯を貼付する。突帯の横なでは弱く貼り付けは弱い。外面は斜方向の条痕で突帯間にも見られる。口唇部の刻目はヘラ状工具で鋭い。胎土は細砂粒を多く含み、外面暗茶褐色、内面茶褐色を呈す。453は横方向の突帯下部に斜方向の突帯が見られる。454は天地不明で斜方向の突帯に横方向の低い突帯を貼り、その上に円形の刺突文が見られる。455と456は集約化した低い突帯を貼付する。455は弧状を描くようである。

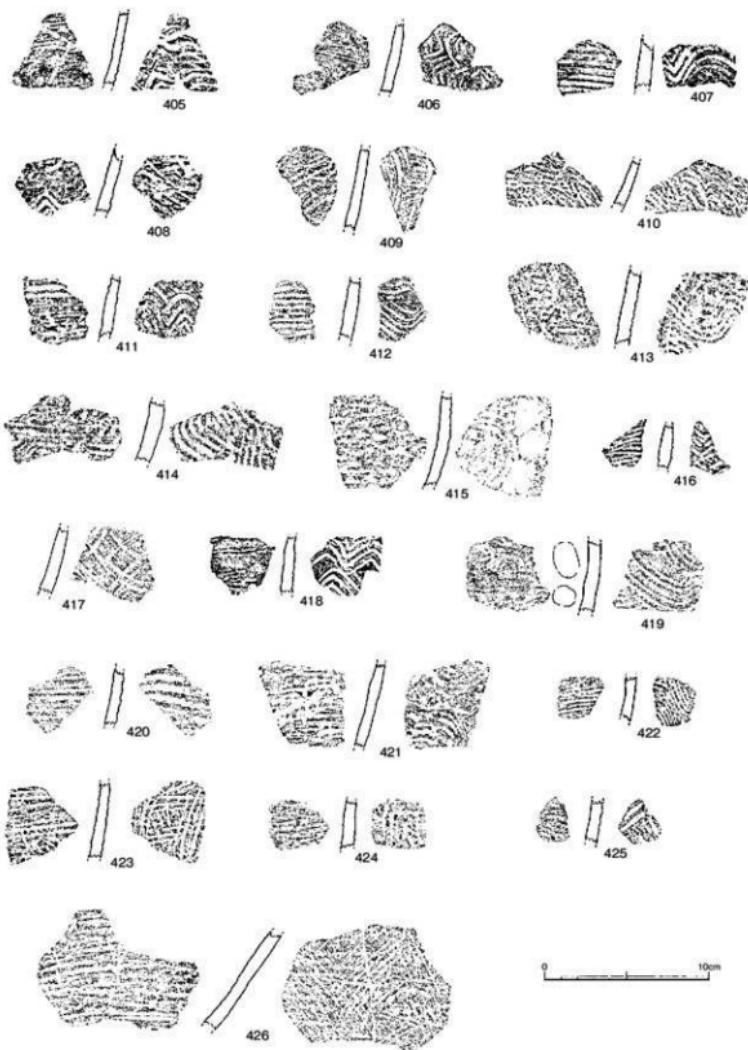


Fig.38 1-II地点包含層出土土器実測図2 (1/3)

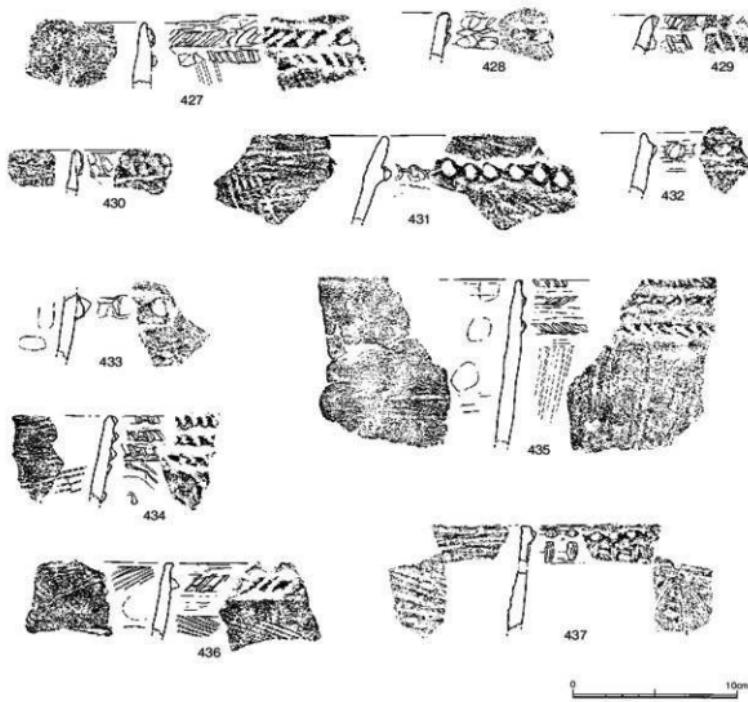


Fig.39 1-II 地点包含層出土土器実測図3 (1/3)

457は突帯部分に焼成後の穿孔を外面から施す。下部は斜方向の条痕である。

458から470は条痕を施す胴部で轟A、B式と考えたものである。458は焼成後の穿孔を施す。459は底部近くで条痕は深く橙色を呈す。460は淡黄色で1/4からの復元。462は内面をなで消す。463の外面条痕は浅く器面に光沢がある。464は外面橙色で、内面は指か当て具状の痕跡がある。465の外面は浅く擦過状で内面は深い。いずれも纖維束状の工具か。468は内外面ともヘラ状工具による調整で条痕風である。470外面は縦方向で深く荒い。胎土と焼きが晚期的である。

471は内外面に深い条痕を施し、外面に細めで低い突帯を貼付する。472は内外面条痕で外面にミミズ腫れ状の突帯を弧状につける。473は鋭角に接する細い突帯を貼付した後に細い沈線を斜格子に描く。474は斜方向の突帯の周りに丸い列点文を刺突する。475は外反する口縁より少し下に突帯を貼付し、破面部分で屈曲するようである。口唇端部、ヘラ工具で刻み、突帯までの間に列点状の刺突文を施す。476は内外面横方向の条痕で外面に浅く山形波状文を1条施す。その上部には竹音状の工具で径7mmほどの列点刺突文を施す。外面に炭化物が付着し暗褐色を呈す。477は薄い器壁でわずかに外反する。内外面深い条痕で、外面に小さな粘土粒が付着するが偶発的なものか。478は外反する外面に長さ3.5cmほどの細く低い突帯を施す。480は口唇部を面取りし、外面には条痕を平行沈線状に施し口縁



Fig40 1-II 地点包含层出土土器实测图4 (1/3)

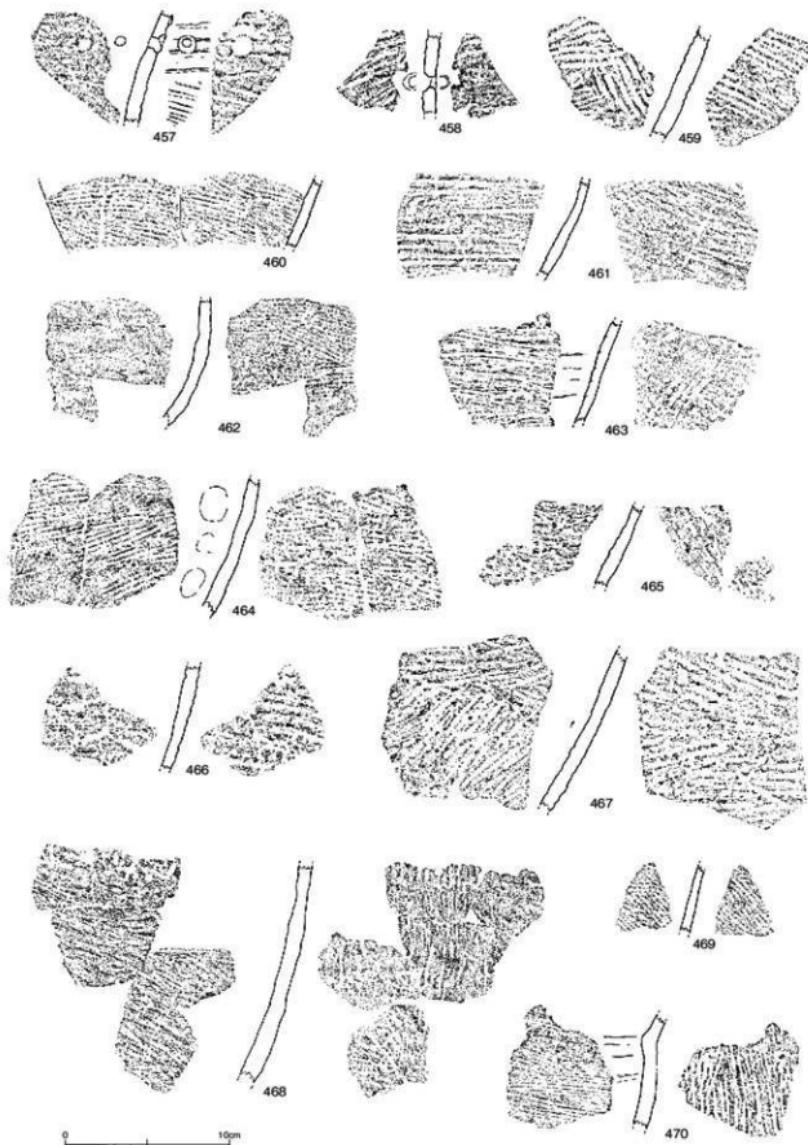


Fig41 1-II 地点包含層出土土器実測図5 (1/3)

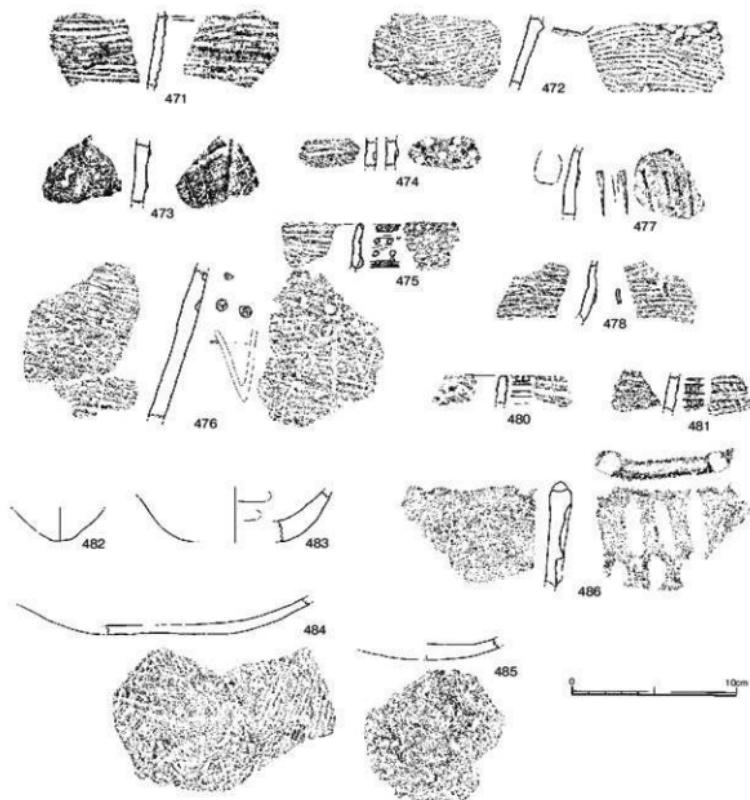


Fig42 1-II 地点包含層出土土器実測図6 (1/3)

端部を小さく刻む。内面は弧状条痕で、外面橙色を呈し胎土は細かい。481は外面の深い条痕で突帯状を呈し、突帯には縦方向の条痕の痕跡が残る。482は尖底部で淡黄褐色を呈し黒色鉱物が目立つ。483は狭い尖底状の丸底を復元したが不確実。淡黄色を呈し胎土は細かい。484は平底で外面は条痕を軽くなじで暗茶色から橙茶色を呈し、内面は条痕の痕跡や擦痕があるが丁寧になじて平滑で暗褐色を呈す。485は外面削り条痕が残り茶褐色を呈し、内面はなじで淡黄茶色である。

486は滑石を多く含む阿高式土器で、外面には縦方向の凹線を上から下に施し、またその下に横方向の後に太い列点状を描く。口唇部は強いので長さ5cmほどくぼませ、その両側に刻目を施す。器壁は厚く、なじ調整で内面に横方向の調整痕が伺われる。

Fig.43-501からFig.52-779は晩期の土器を集めた。包含層出土土器の主体を占める。大きめの破片も多少あるが、大きく接合できたものはない。1/6以上残存するものは反転復元した。

501から661は粗製土器である。外反、直立する口縁部があり、胴部に屈曲部、肩部を持つものが多いと考えている。ただし直線的に底部へすぼまるものもあり器形を判断し難い。口縁部周辺の器面調整は外面に横方向の条痕や削りを施し煤けるものが多い。条痕は2枚貝によるものと織維束状が想定されるものがある。内面は擦過、なで、研磨状の調整で平滑に仕上げるものがほとんどだが、横方向の条痕が残るものがあり基本的に条痕で成形したと考えられる。外面を擦過やなでたものには半精製と呼べそうなものもある。口唇部は面取りをしないものが多く、面取りしたものには調整施文具による圧痕、刻み目があるものがある。色調は灰褐色か灰茶色のもの多く、淡灰色や淡橙色の明るいものもある。胎土は砂粒を多く含み細かめで焼きが固い。

501から546は口縁部へ向けて外反するもの、外反気味のものを集めた。特徴的な事項について触れる。501は1/6からの復元口径21.6cmを測り口唇部に山形の突起をつける。502は1/6からの復元口径16.2cmを測り、条痕は幅狭である。503は内面の深い条痕が沈線状である。505は内面を条痕の後研磨を施す。507は口唇部にごく浅く細い刻目を施す。508は器壁が厚く、口唇部刻みは密で連続し木目が残る。512は口縁部に指による押圧がある。518の口唇部刻みは2枚貝の圧痕か。519は内面研磨状の調整で条痕がわずかに残る。口唇部刻みは条痕工具による。胎土が砂質である。524は口縁部を立ち上げ口縁帯状に成形するが屈曲は鈍い。525も口縁部を内側に緩やかに曲げて口縁帯風に成形する。外面はヘラなどで状で器面は明るい。529は外面なで、内面なでと研磨で平滑に仕上げ、口縁部に大きく刻む。536、545は条痕工具によると思われる口唇部刻みを施す。546の口唇部刻みは条痕工具状で4、5条単位を間隔を開けて施す。

547から589は直立し内湾気味の口縁部である。547は1/6からの復元口径29cmを測る。内外面に擦痕が残る。549は1/9からの復元口径21cmである。外面条痕で炭化物が付着する。550は1/6からの復元口径17cmを測る。551は条痕工具状の圧痕で口唇部を刻む。557は外面に短い削り状の荒い調整で粘土の動きが多い。560は口唇部が少し折り返したような帯状を呈す。外面は強い擦痕で内面はなで、淡黄灰色を呈す。561は焼成後の穿孔を施し、外面に穿孔途中の痕跡が残る。562は外面なでと縱方向の研磨状の調整で半精製品。薄手で淡茶色を呈す。口縁部は山形の突起部がある。564は口唇部を短く曲げて突帯状になる。566の口唇部には浅い刻み目を施し、内外面斜方向の条痕で器壁が薄い。

574から589は内湾気味で傾きが大きくなりそうだが不確実である。577は破面部が段状となり口縁帶になるものか、579は弱い山形もしくは不整形な口縁部である。581から585は内面研磨を施す。588は外面に沈線を深く施す。589は外面削りで、研磨した内面の口縁部直下に沈線を施す。

591から606は碗状に底まですぼまる器形を想定した。器面調整は外面が削り、擦過で条痕が残るものはみられない。内面は研磨、なでで仕上げ平滑である。591は口縁部に山形の突起部を貼付する。復元口径32cmを測る。外面は削りで炭化物が付着する。内面は研磨で光沢がある。同一個体の大型の破片が多い。593は丸底から反転し復元口径20.8cmを測る。594は口唇に突起を貼付し中央を厚くし両側に山形になると思われる。595は口縁部下に焼成後の穿孔を施し、内面に穿孔途中の痕跡が見られる。603は試掘時の遺物で口唇部端に刺突状のくぼみが2つあるが傷かもしれない。604は外面削り状の研磨、内面研磨で丸みをおびた山形を呈し、器面は明るめの茶色である。606は外面の強い削りを短く施し面を成す。茶褐色を呈す。

607から672は粗製土器の胴部で何らかの特徴がある部分を示す。607から612は突起を貼付する。

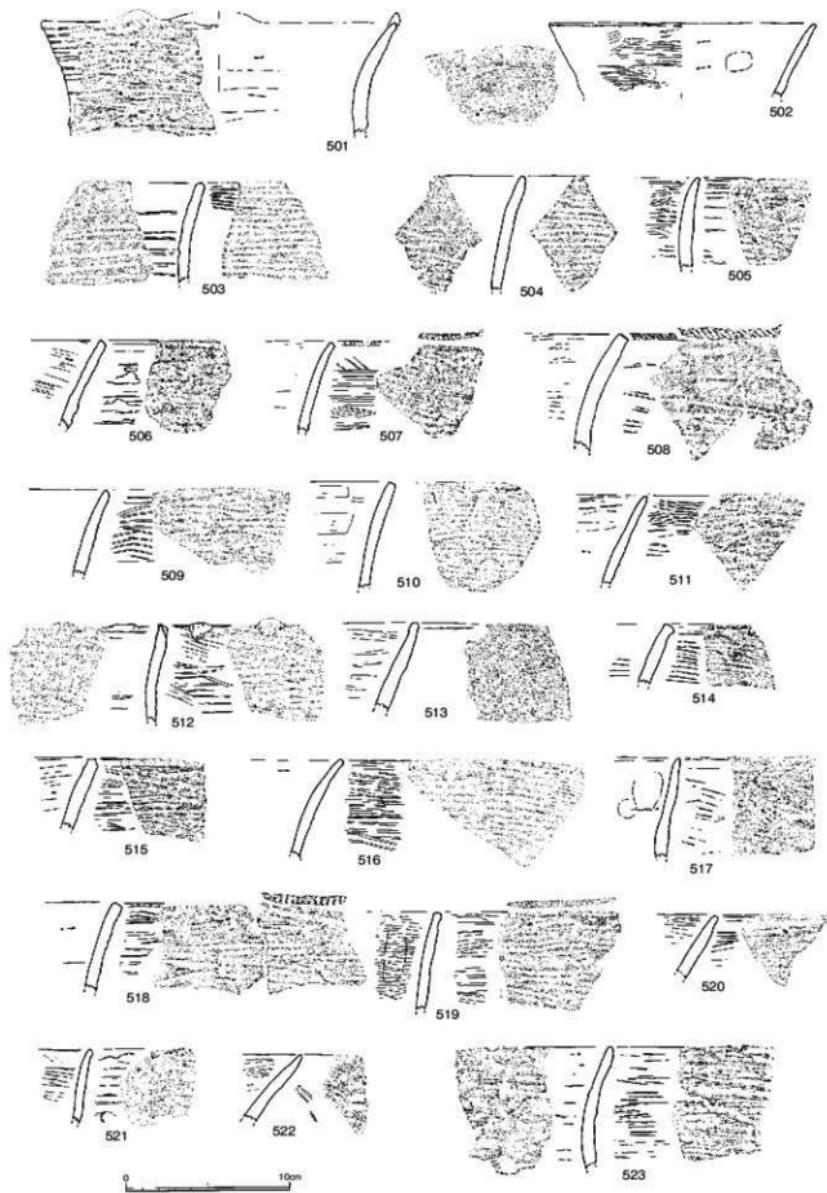


Fig43 1-II 地点包含层出土土器实测图7 (1/3)



Fig44 1-II 地点包含层出土土器实测图8 (1/3)

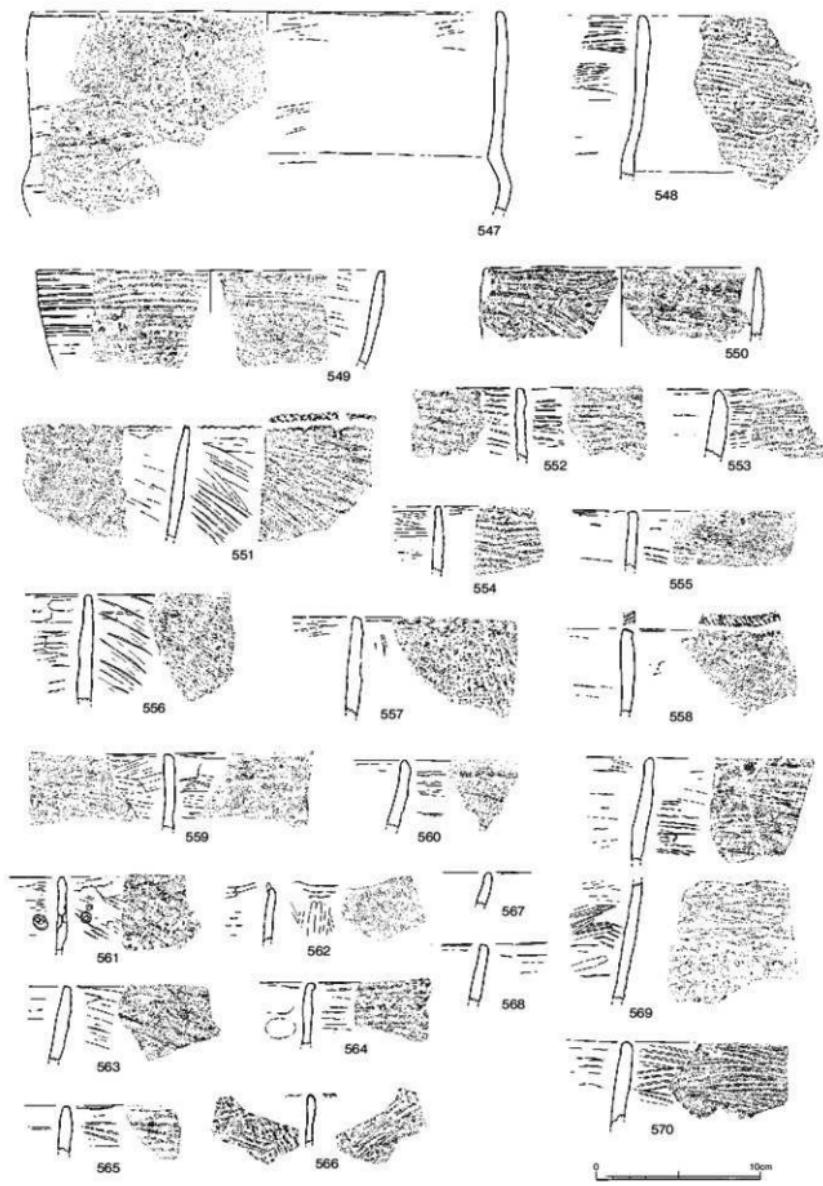


Fig45 1-II 地点包含層出土土器実測図9 (1/3)

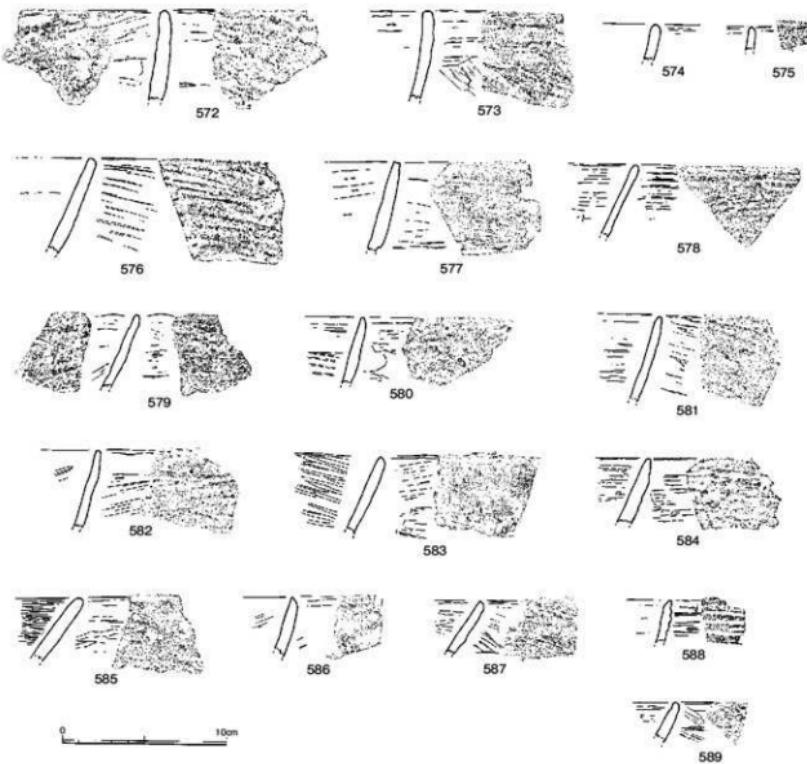


Fig.46 1-II 地点包含層出土土器実測図10 (1/3)

607と608は肩部に縦方向のつまみ状の粘土帯を持ち、609も同様の下端部か。ただし細い。610は短い肩部と頭部の境に蝶ネクタイ状の突起を、611は鼓状の突起、612は軽く外湾する頭部に横方向のつまみ状突起である。613は外面肩部削りの後なので、胴部は荒い削りのままである。614は外面削りの後なので炭化物が付着し、内面はなで仕上げで接合痕が残る。1/6からの復元。615の肩部の屈曲は緩やかで、肩部外面はなで仕上げで、胴部は条痕の後なのである。616は内外面に条痕が残り内面の指押さえが顕著である。617は肩部と頭部間に擦痕端部が細い隆起線状をなす。618の肩部はヘラなで状の調整である。619は内外面条痕で緩やかに屈曲する。620は屈曲する頭部か。淡黄白色で外面は擦過の後なのである。621から623は肩部と頭部間の調整によって段をなす。625と626は焼成後に内外面から穿孔する。617は外面なので後、沈線が施され調整か文様か不明瞭。内面もなでる半精製品。

628から631は胴部片で底部に近い部分である。外面は縦または縦に近い斜方向の粗めの調整が残る。632は外面条痕の後ヘラ状工具による荒い擦痕で内面は擦過のちに粗で弱い研磨状の調整を施し暗文風を呈す。傾きが不確実で部位を迷い図示した。633から655は断面台形の底部で1/4以上残るも



Fig.47 1-II 地点包含屑出土土器实测图11 (1/3)

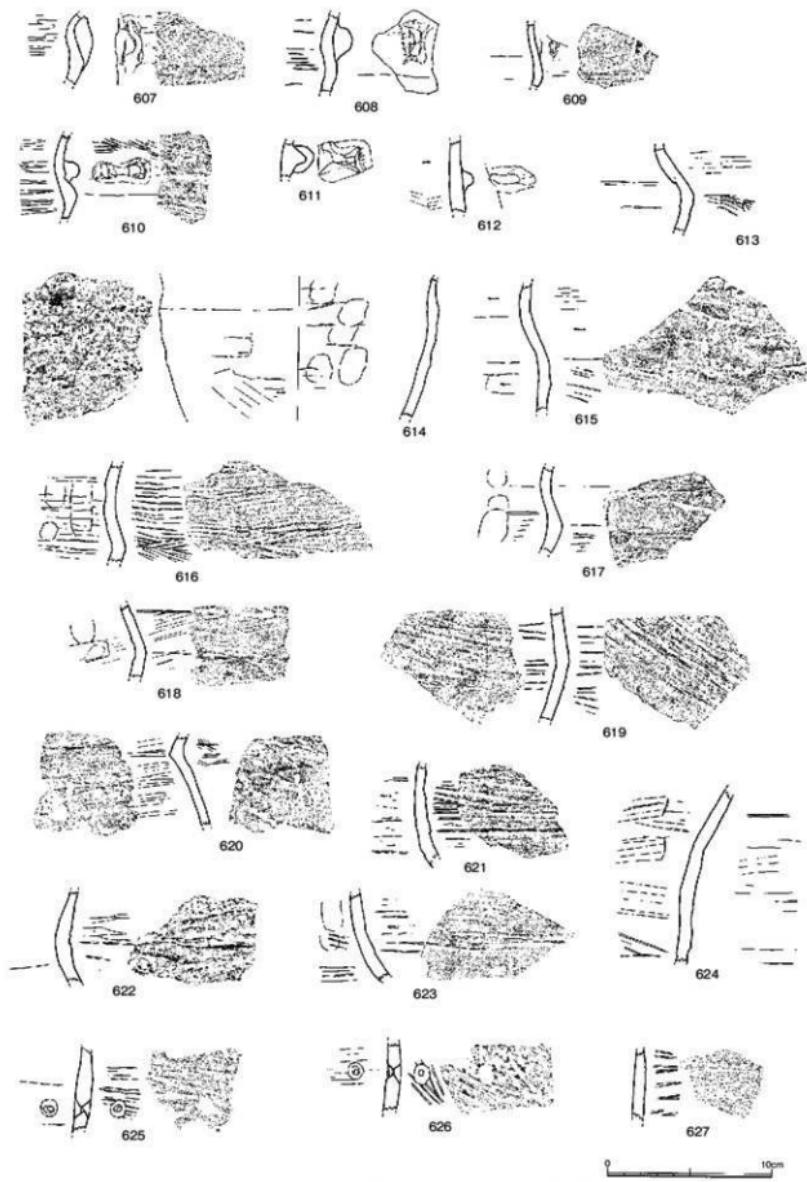


Fig.48 1-II地点包含屑出土土器实测图12 (1/3)

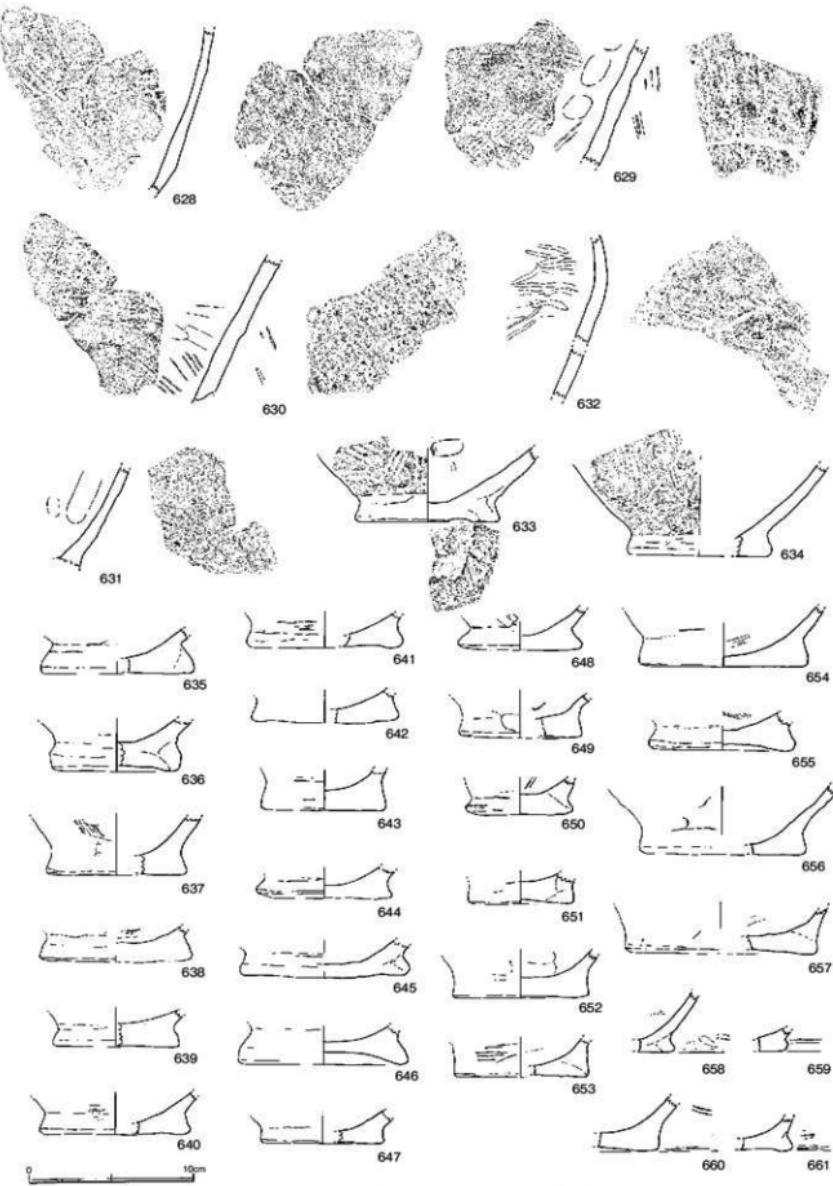


Fig.49 1-II 地点包含屑出土土器实测图13 (1/3)

のを図示した。一周が残り反転復元していないものは644と646のみである。全体に淡橙褐色から淡灰茶色の明るい色調である。633、634のように胴部下部が残るものは条痕などの調整が見られるが、屈曲部は横方向のなで調整を行っている。底は無調整のものもあるが擦過、なで調整を施すものが多い。645は外面中央部が周囲よりわずかに高く不安定である。652、653、657は底部と胴部の接合部の器壁を薄く仕上げ内面を広く成形する古手の特徴を持つ。台形底のものと比べて胎土が細かく砂粒が少ない。652、657は気泡状のくぼみ、種子状圧痕が見られる。

662から778は内外面研磨調整の精製の器種である。662から678は口縁部を口縁帯状に成形し外反する頸部が長くなる器形になると思われる。678は1/4からの復元口径15cmを測る。662から674は口縁部が屈曲し口縁帯をなすが、678までは内外面の沈線を施すのみである。684から693は頸部が短めのもので684のように短い屈曲する肩部から胴部につながる器形や丸く球形をなす器形が想定される。687は口唇部にリボン状の突起をつける。694から714は718のような丸い胴部の器形になると考えられる。718は1/6からの復元口径33.4cm、719は1/6からの復元口径32cmを測る。

720から722は口縁部下が小さく屈曲しそのまま底部へすばまる浅鉢である。724は擦過仕上げの外面にヘラ状工具で沈線を施す。深鉢の可能性もある。725は山形の口縁部で頸部に段があり短く屈曲すると思われる。726から732は直口の口縁部が頸部で屈曲し長短の肩部を持つ。726は1/6からの復元口径24.8cmを測る。731は屈曲が弱い。732もわずかに屈曲する。なで調整で器壁は薄く外面は煤ける。傾きが不確かである。733は口縁部を肥厚した破片で、幅広の突起状部分と考えられる。734は口唇部突起部で2対になるもの一部と考えられる。736は山形の口縁部を肥厚し突堤状に成形し、突堤基部から深い沈線を描いたあと口唇部を横なでする。外面擦過、内面なで半精製である。737から753は口縁部に特に手を加えない。胴部以下の器形は不明だが、屈曲するもの、そのまま底部へすばまるものがあるだろう。747は破片の下端で緩い段がみられる。

754から777は各種の胴部形態を示した。776は横方向のつまみ状突起を貼付する。777は深鉢の肩部で外面擦過、内面ヘラなで状の研磨で指圧痕が見られる半精製品。778は研磨調整で外面から焼成後の穿孔を施す。傾きは不明。779は外面ヘラなで後に沈線を施す。内面はなで半精製品。

780はミニチュアと呼べるような小型品で1/4からの復元口径4.5cmを測る。内傾する口縁部はなで調整で下端に段がある。器形は不明。細い穿孔は焼成前の可能性がある。781は手すくねの小型品で1対の焼成後の穿孔がある。782は外面条痕の粗製土器で斜方向の沈線が見られる。783は土製円盤で径9.3cmほど、厚さ3cmを測る。器面成形は雑で不整形。指圧痕が残る。胎土は細かく大きな砂粒は少ないが焼成があまい。ばらばらに碎けて出土した。784は土製の玉で断面方形を呈し各面の中央がくぼむ。

石器 (Fig.53-58)

包含層中から出土した石器は表2に示したように黒曜石、安山岩の剥片石器が大多数を占める。定型化した石器は石鎚が多く、黒曜石製が117個、安山岩製が121個と近い数である。この他に石匙、スクレーパー、石錐などが目立つ。この中で図化できたのは一部だけで、およその器種は示したが全貌には遠い。図化できなかった石鎚、石錐、削器などの剥片石器については表3と卷末の写真に2000番代の遺物番号を付して示した。使用痕のある剥片や石核などは卷末の表2に数量を示すのみである。石斧などの礫石器は確認できたものは図化して示した。石器の時期は、土器との併存関係が不明で出土状況からは判断できない。

785から838は黒曜石製の石鎚である。図には抉りが深いものから並べた。787は第3地点出土。漆黒の石材が大多数を占めるが789、794などは灰色をおびる。808、811は器面の風化により器面がくすん

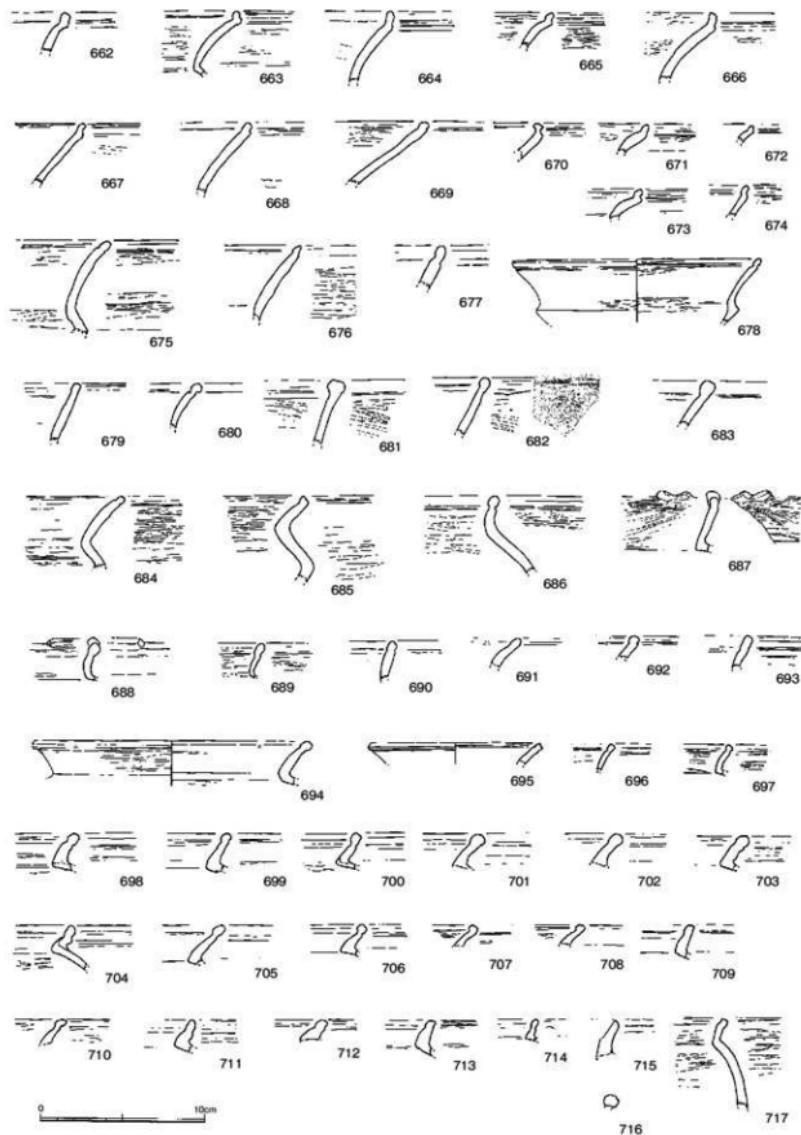


Fig.50 1-II 地点包含屑出土土器实测图14 (1/3)

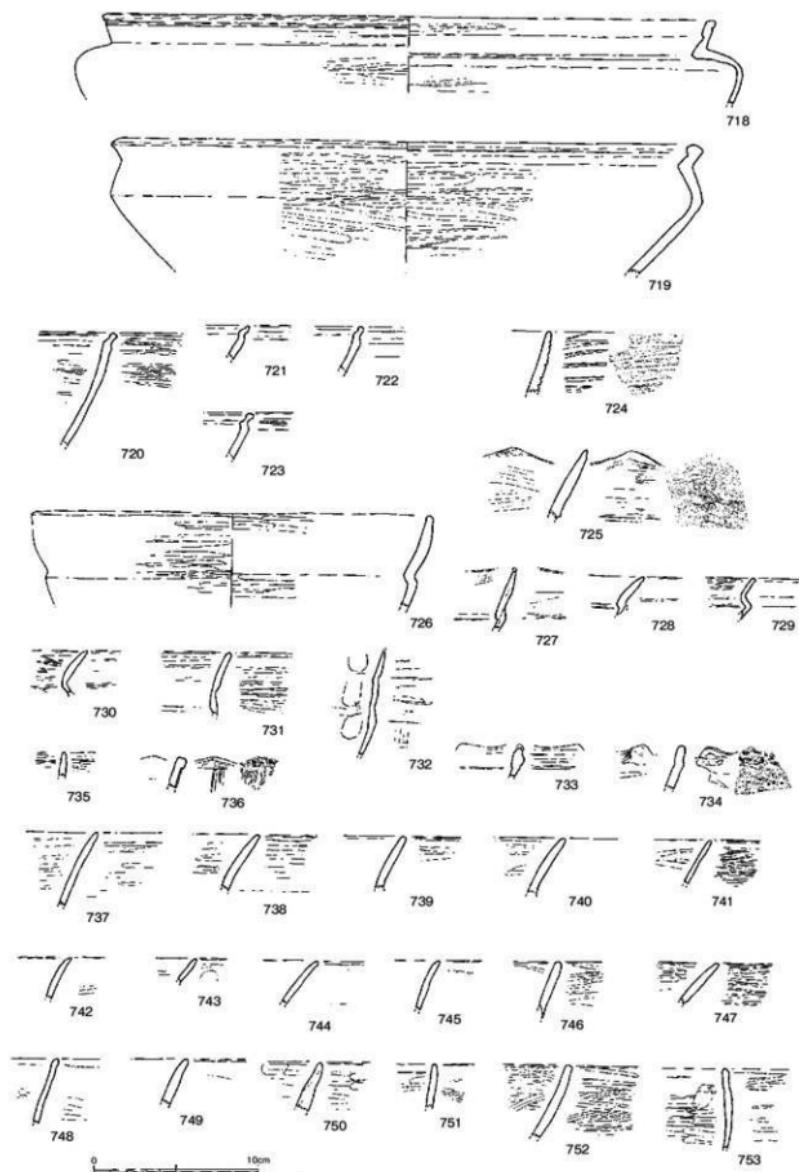


Fig.51 1-II 地点包含屑出土土器实测图15 (1/3)

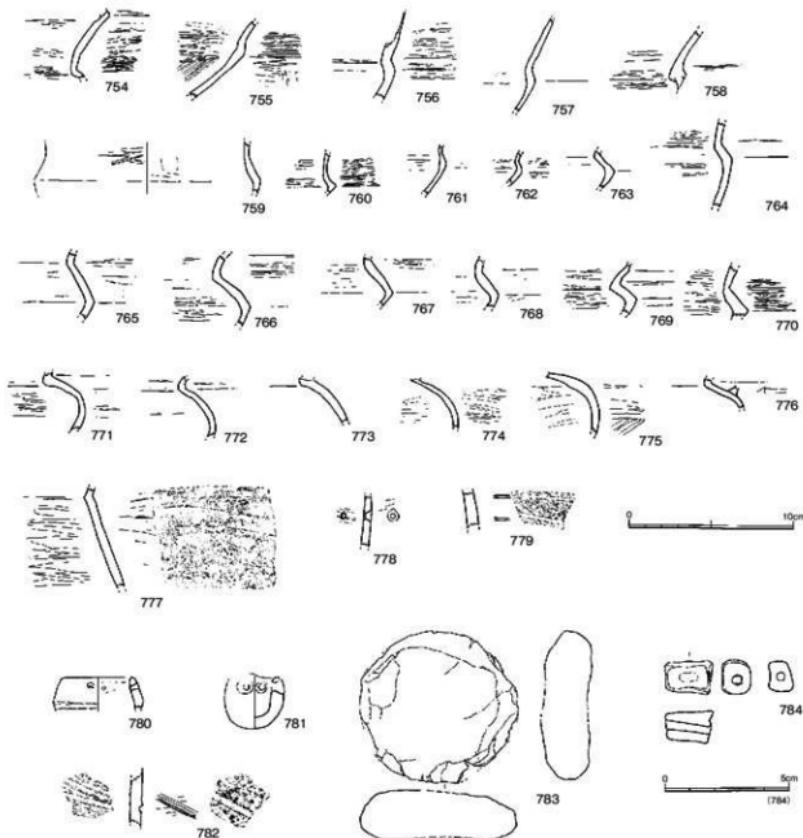


Fig.52 1-II 地点包含層出土土器実測図16 (1/3, 1/2)

でいる。また、805、817は淡灰色で粒状に黒色が入り姫島産の黒曜石である。石材は良質なものがほとんどだが、819、834、836、837などの砂粒を含む石材もあり、平基のものに目立つ。形態は785などのように小型で脚部が長いもの、三角形の大きな抉りが入るもの、平基と各種があり、そのなかで三角の抉りのものが目立つ。土器が早期、前期、晩期と時期幅があり、これに対応した形態差であろう。成形の剥離は細かく全面に施すが802、803、806、832-836には主剥離面が残る。814は大きめの調整剥離により側辺を鋸歯状に仕上げる。823、824は側辺に突起を作り出し、824は人形の様である。

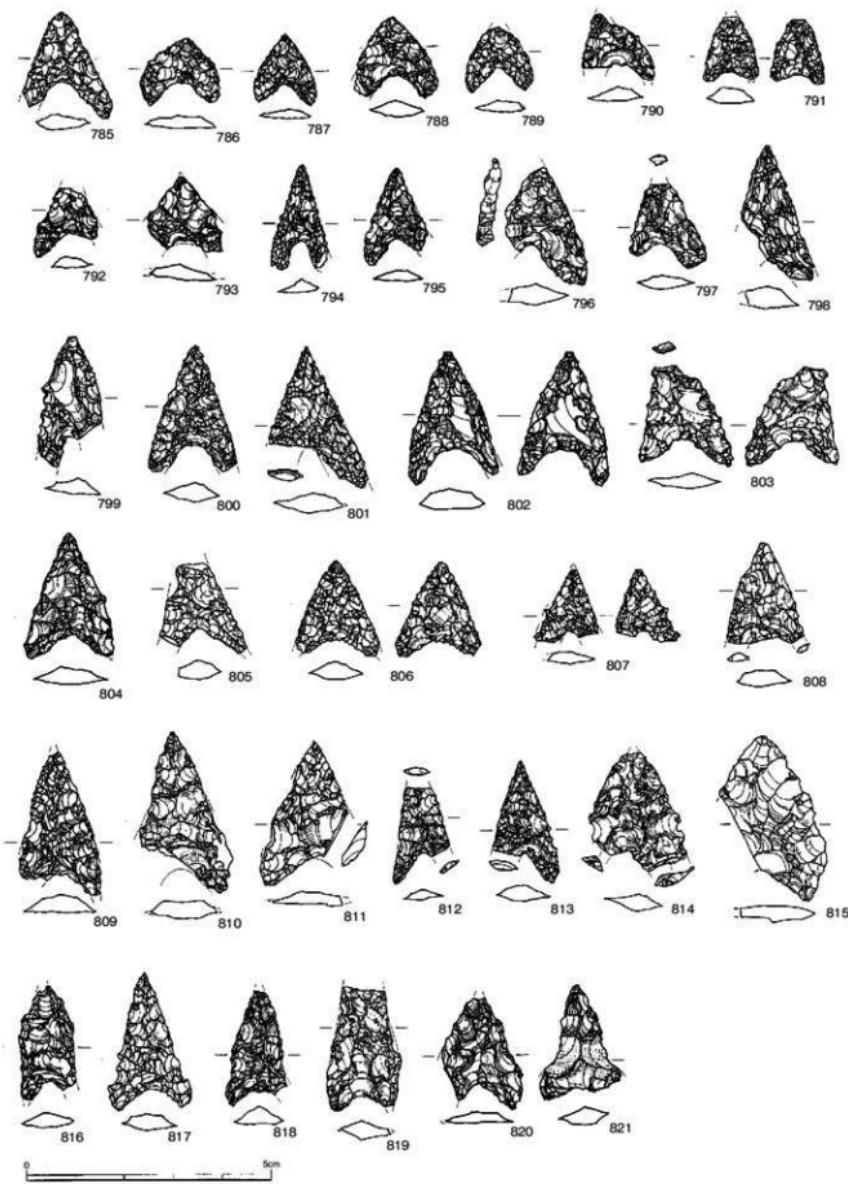


Fig.53 1-II 地点包含层出土石器实测图1 (1/1)

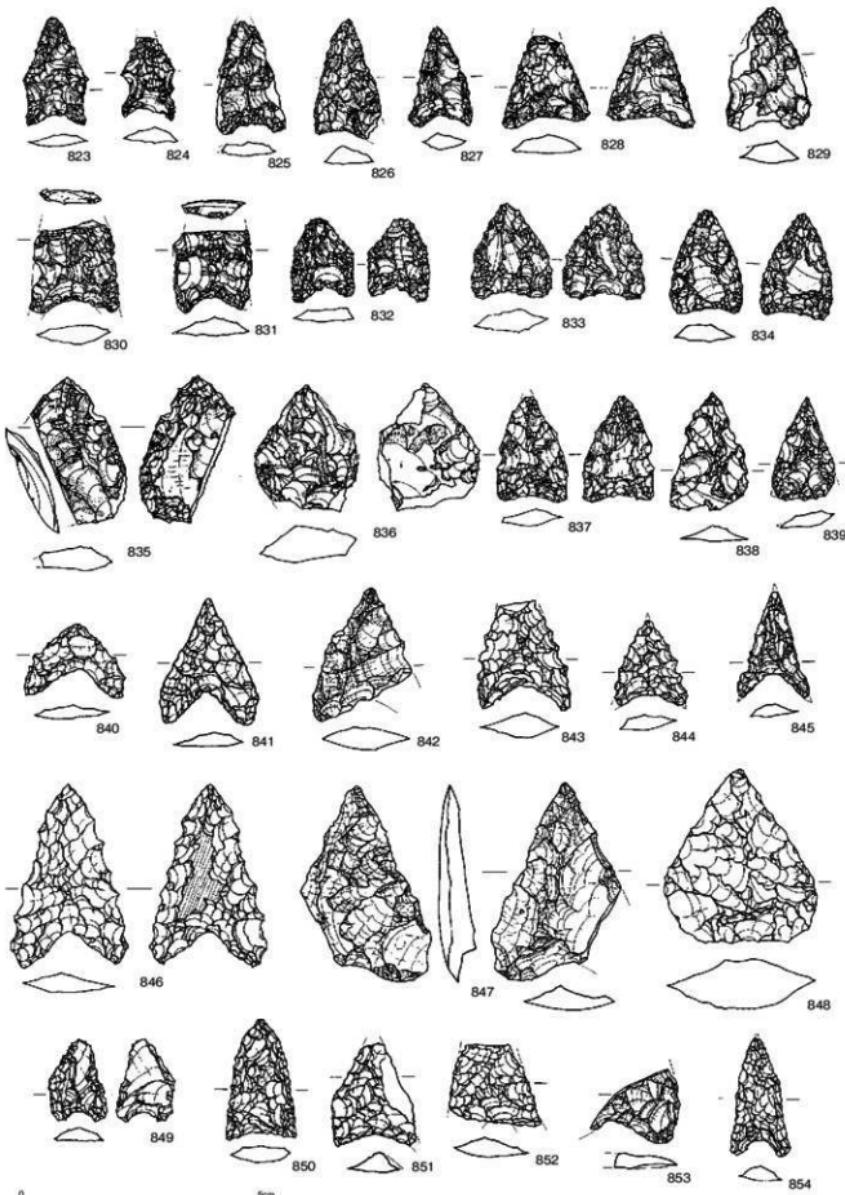


Fig.54 1-II 地点包含層出土石器実測図2 (1/1)

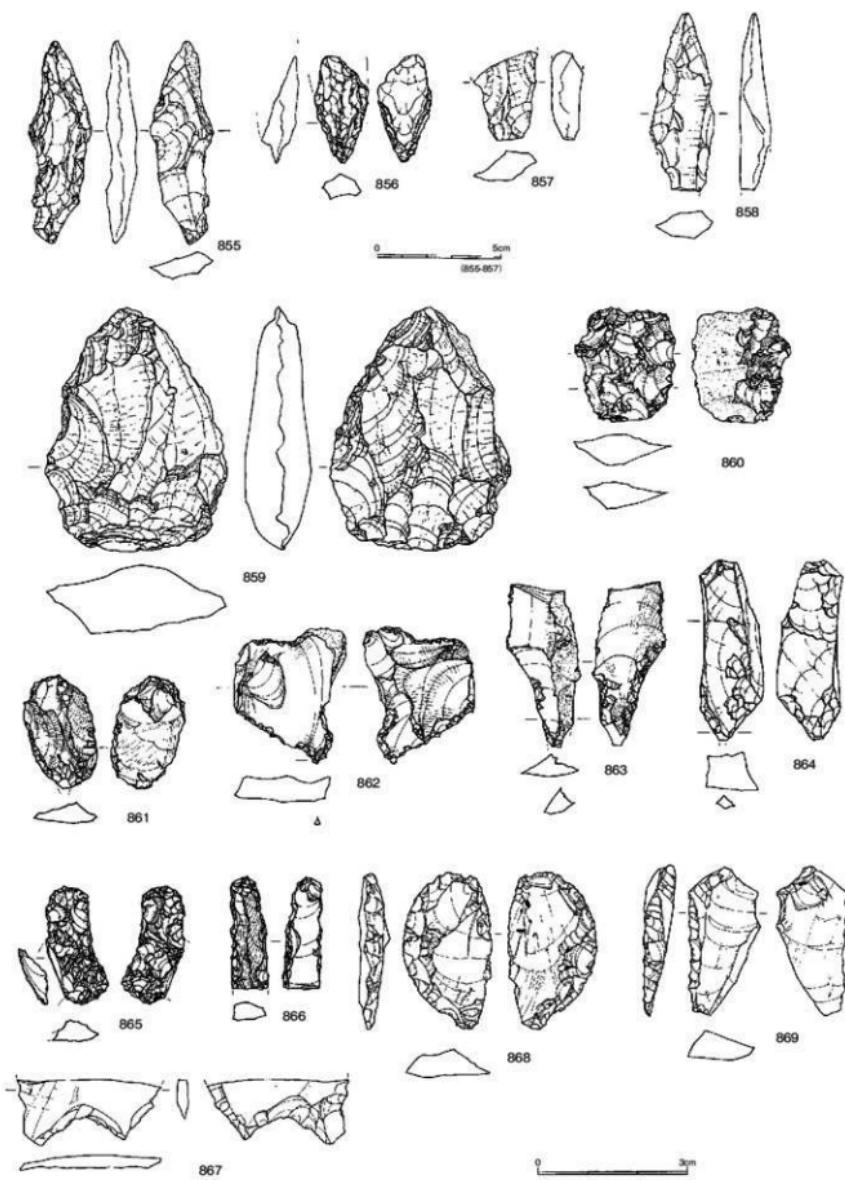


Fig.55 1-II 地点包含層出土石器実測図3 (1/2, 1/1)

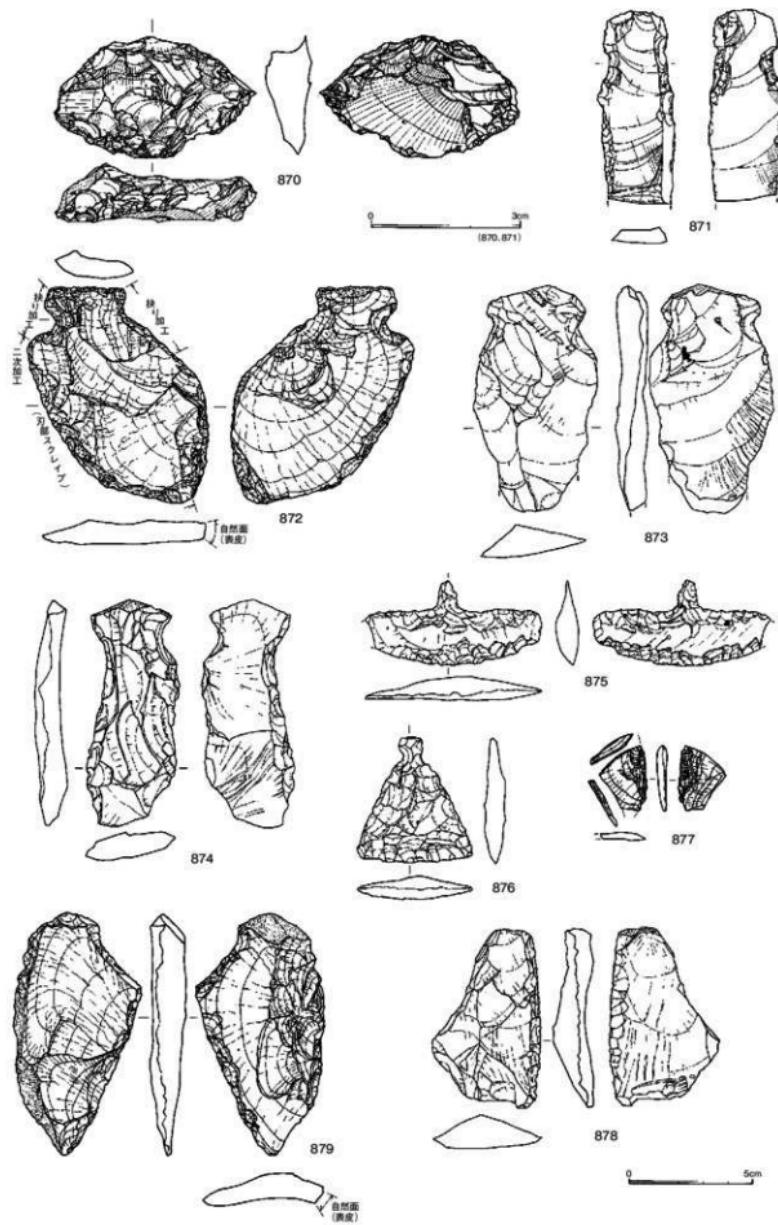


Fig.56 1-II地点包含層出土石器実測図4 (1/2, 1/1)

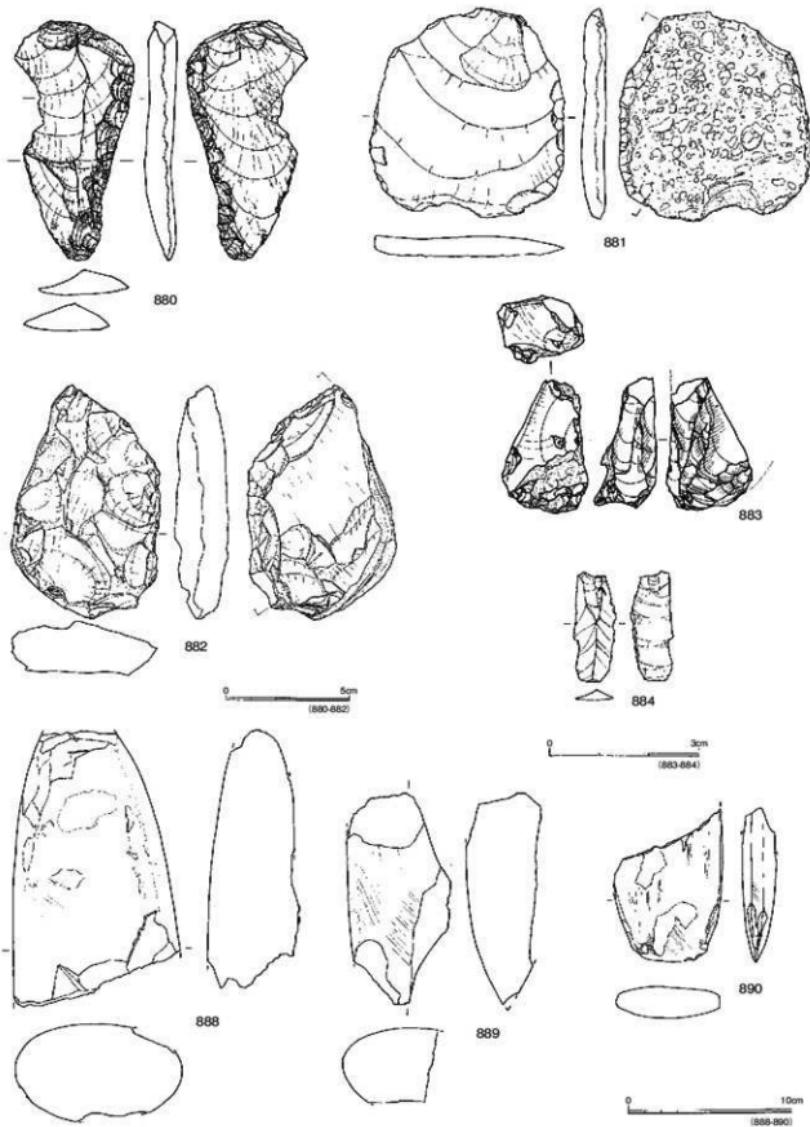


Fig57 1-II地点包含层出土石器实测图5 (1/2, 1/3, 1/1)

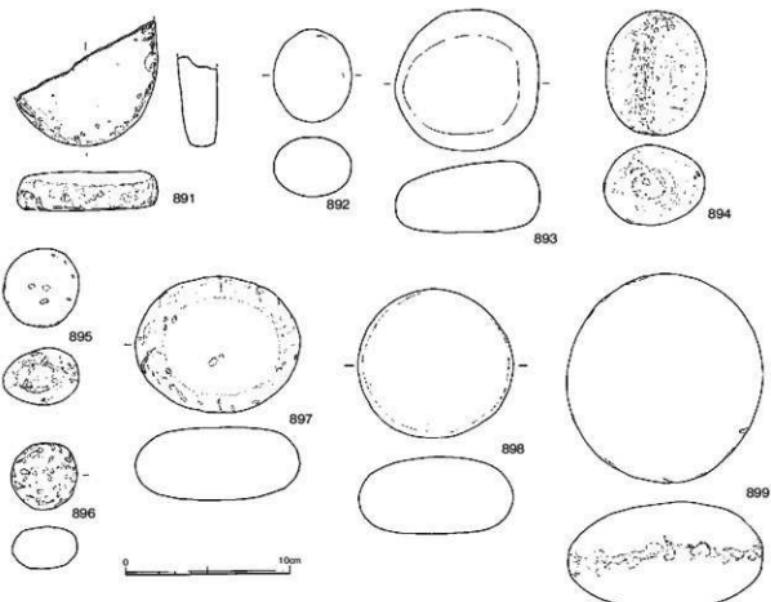


Fig 58 1-II 地点包含層出土石器実測図6 (1/3)

836は厚く成形の剥離も一部のみで未製品様である。基部に大きな砂粒があり、制作を止めたか製品としたものか。840から854は二つを除いて安山岩製である。843、852はハリ質の乳灰色を呈すチャートか。安山岩製も黒曜石同様に各種の器形が見られる。846、847は片面に自然面を、849は主剥離面を残す。安山岩製石錐は図化できていないものが多く、巻末の計測表と写真を参照されたい。

855から857は安山岩製で石槍か。855は自然面が残る。856、857は基部の可能性を考えた。858は安山岩の石錐で槍先形を呈す。859は先端部に自然面を残すが形は整い、製品で鉛とした。860は片側の側辺を鋸歯状に仕上げる組み合わせ式の石鉛を想定した。片面に自然面が大きく残る。861から864は石錐で863までは黒曜石製、864は安山岩製である。865と866は黒曜石製品で、865は細かな剥離が全面におよび三方に突出する形態になろう。866は主剥離面を残し縁辺に細かな剥離を施す。異形石器とした。868は安山岩製で薄い剥片の縁辺に細かな剥離を入れ成形する異形の石器である。868と869は黒曜石のやや厚手の綫長の剥片の片辺に角度が大きな剥離を施し搔器状を呈す。870は黒曜石の不整形剥片の背面の一辺に細かな剥離を施し刃部となす。主剥離面の打点部は打ち欠く。871は黒曜石の端正な綫長剥片の側辺に細かな剥離を施す削器で頂部はつまみ状に作り出す。872から876は安山岩製の石匙である。872から874は綫型でいずれもつまみ状の頂部に自然面を残し、872には左側辺にも自然面が残る。873は綫長剥片に抉りを入れたのみで剥片の側辺を刃部とする。先端は欠ける。872、

874は横長ぎみの剥片の抉り部と側辺に細かな剥離で刃部を成形する。875は横型の石匙で主剥離面を残し横長剥片の縁辺に細かな剥離を施し成形する。876は三角形を呈し表裏とも全面におよぶ細かな剥離を施す。877から882は安山岩製の削器である。877は破片で薄い剥片の両面に細かな剥離で刃部を作る。878と880は綫長、879は横長剥片の一辺に刃部を作り、いずれも手に馴染む。878、879は自然面が残る。881は原石から剥いた剥片の一辺に刃部を作る。882は石核の一辺に粗い刃部を作り、反対の側辺には自然面が残る。

883は黒曜石の半船底の型細石核である。打面部を大きく欠き、背面には自然面を残す。884は黒曜石の小剥片で細石刃の可能性がある。刃部に刃こぼれがみられる。

888から890は磨製石斧でいずれも一部の残存である。888は緑色の火成岩で裏面は器面の凹凸があり研磨が十分行われていない。889は緑色の火成岩で丁寧な研磨で器面は平滑である。890は蛇文岩製の小型品で刃部は銳角で鋭い。側辺は面をなし端部が稜をなす。891から899は円礫を素材にした敲石もしくは磨石で主に側辺に敲打痕が見られる。891は研磨成形で扁平な形状をなし、897も使用もしくは成形によりやや扁平になる。この他は顕著な形状の成形は見られない。

4. I-II 地点の調査

I-I 地点からII地点部分の計画道路は、I-II 地点南側の現在使用中の道路を挟んで約40°西に曲がる。I-III 地点からV地点はこの道路建設地の調査である。I-III 地点は現在使用中の道路を挟んでI-II 地点から16m離れる。調査区は幅10m、長さは南側の使用中の道路までの68mである。北端の遺構面の標高は93.0m、南端は95mで、現況で5枚の水田面にわたり造成による段、溝が調査区を横断する。北端とI-II 地点の南端とは約50cmの比高差がある。

検出した遺構は焼土坑5、土坑2、ピット4である。この他に溝があるが現在の用水路および暗渠である。焼土坑等の明らかな人為的な遺構は最北部の田面に集中する。この田面は旧表土の上に1mほど真砂を客土していた。遺構面は黄褐色の粘質土でI-II 地点の1層に相当すると考えられるが、縄文土器包含層はなく、1層下部であろうか。

SK103 (Fig.59, 60, 61) 平面不整楕円形の浅い土坑で172×120cm、深さ15cmを測る。覆土は炭を多量に含む茶褐色土で焼土坑の底と考えられる。壁の赤変はみられない。902は縄文土器で器面は荒れ、外面に条痕が残る。他に土師質の擂鉢、土師皿のずれも小片が出土した。

SK104 (Fig.59) 平面不整楕円形の土坑で76×50cm、深さ18cmを測る。覆土に炭を多量に含むんでおり焼土坑と考えられる。壁の赤変はみられない。

SK105 (Fig.59) 平面不整円形のごく浅いくぼみ状で平面92×94cm、深さ4cmを測る。覆土は刻褐色土で炭を多量に含む。焼土坑の底の可能性もある。遺物は出土していない。

SK106 (Fig.59) 平面不整楕円形の土坑で162×135cm、深さ52cmを測る。周辺部は深さ5cmほどで、実際はピット状を呈す。覆土上部に炭化物を含む。石の抜き跡の可能性もあろう。土器小片が1点出土している。

SK109 (Fig.59) SK110を切る土坑で平面プランを記録する前に、ベルト状に残していた上端が大崩壊で崩壊し記録できていない。平面楕円で、長さ120cmほどで幅60cm、深さ58cmである。壁面の赤変はないが覆土の底に炭が多く溜まり焼土坑と考えている。遺物は出土していない。

SK110 (Fig.59) 平面隅丸長方形の焼土坑で平面316×226cm、深さ82cmを測る。底に炭層がたまる。土層は記録できていない。器壁の下部に赤変した箇所がみられる。遺物は出土していない。

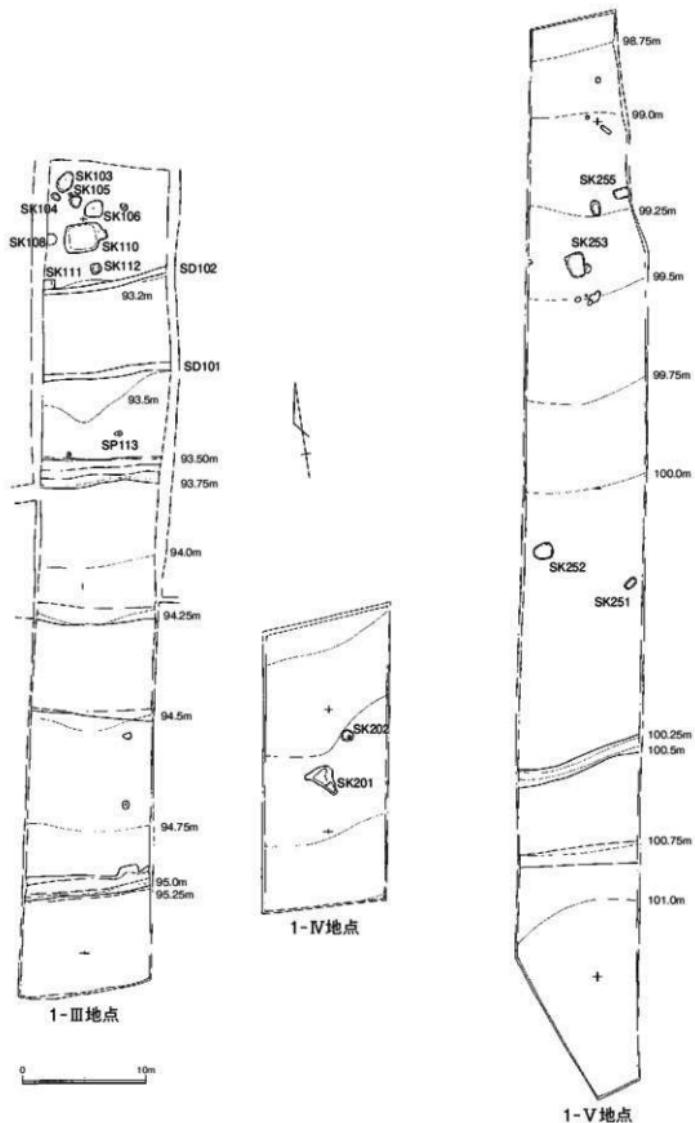


Fig.59 1-III、1-IV、1-V地点造構配置図 (1/400)

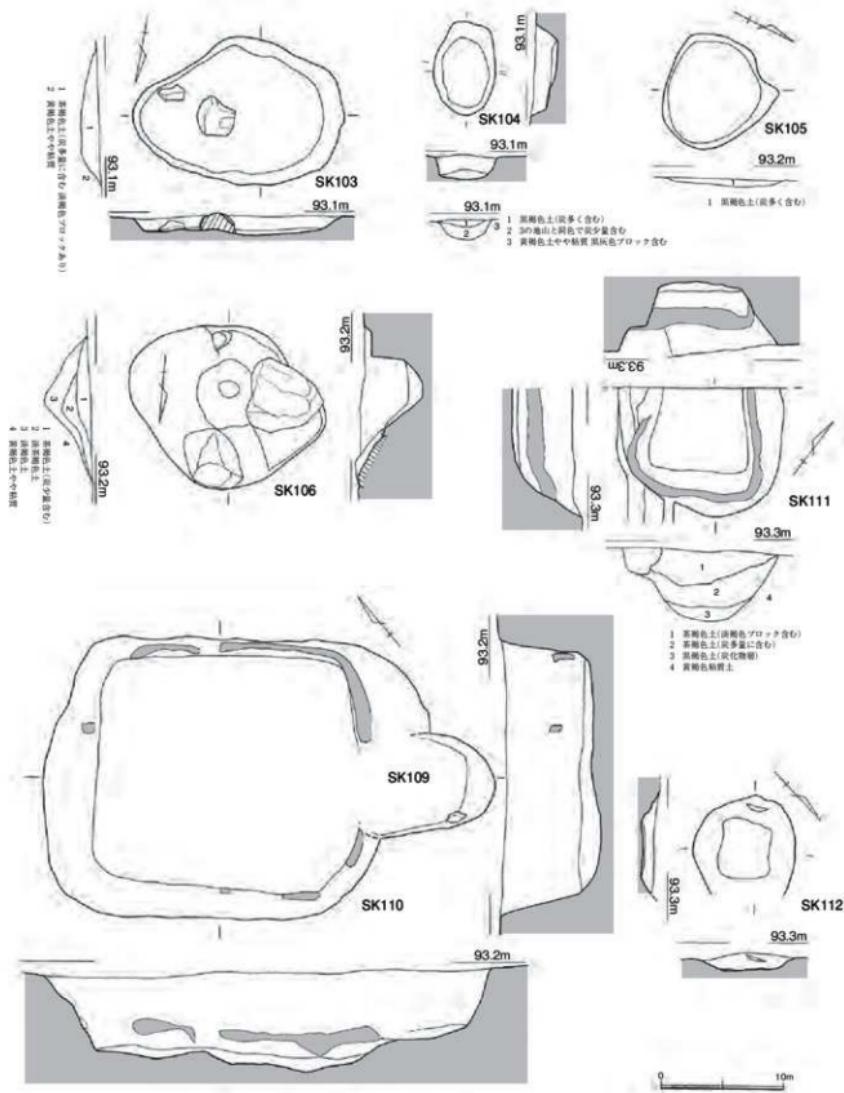


Fig.60 1-III地点遺構実測図 (1/40)

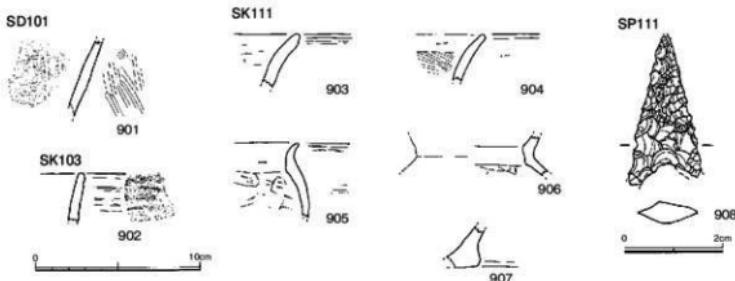


Fig.61 1-III出土遺物実測図 (1/3, 1/1)

SK111 (Fig.59, 60) 調査区の西側で検出した焼土坑で調査区外へ延び、検出できたのは全体のおよそ半分と考えられる。平面隅丸長方形を呈し確認した。長さ103cm、幅135cm、深さ60cmを測る。底に炭化物が溜まり、壁面下部が赤変する。暗渠の溝に切られる。903から906は土師器の壺で903は外面横なで、内面擦過、904は外面横なで、内面刷毛目、905の外面は荒れ、内面胴部は削りである。906は器面が荒れる。907は底部片で縄文晩期の粗製土器である。他に外面刷毛目調整の土師器の壺片も出土し、ほぼ古墳時代の土師器である。土師皿の可能性があるものはごく小片1点のみで、周間に古墳時代の遺構の存在を何わせる。

SK112 (Fig.59, 60) 円形の浅いくぼみ状の土坑で一部調査区外に出る。覆土に多量の炭を含み、焼土坑の底か他の焼土坑と同じ時期に埋まつた土坑と考えられる。土師器と縄文土器と思われる小片が少量出土している。

(2) 溝

溝SD101、SD102は幅40cm、深さ20cmほどでSD102には竹が埋めてある。現在の水田の暗渠である。SD101からは土師質の掘り鉢901と土師皿片が出土している。SD102からは土師器と縄文土器、近世染め付けの小片が出土した。SD103は現在の田面の段直下を走り幅230cm、深さ10cmほどである。遺物は取り上げていない。

(3) その他の遺構と遺物

ピットはいくつか検出しているがまとまる様子ではない。SP113からは条痕土器片が出土している。908は検出時に出土した黒曜石製の石鎌で基部が欠ける。長さ30cm、幅147cmが残る。

5. 1-IV地点の調査

I-IIIと現行の道路等を挟んで6m南の地点で幅10m、延長24mの調査区である。標高は北端で96.5m、南端で97.3mと80cmの比高差がある。検出した遺構は土坑2基である。

SK201 (Fig.62) 浅いくぼみ状の土坑で260cm、幅165cmほどの規模で深さ17cmを測る。覆土は暗茶褐色土で炭を含み、底に炭化物が散乱する。炭化物で長いものは70cmを測る。炭層はなく壁の焼けもない。焼土坑ではなさうである。外面刷毛目の土師器小片が出土している。

SK202 (Fig.62) 径90cmほどの円形の土坑で上部15cmは粉状の炭を覆土とし、下部は茶色土に炭を含む。底のピットの埋土は黄白色土である。

この他に遺構検出時に土師器の壺、縄文土器片が出土している。

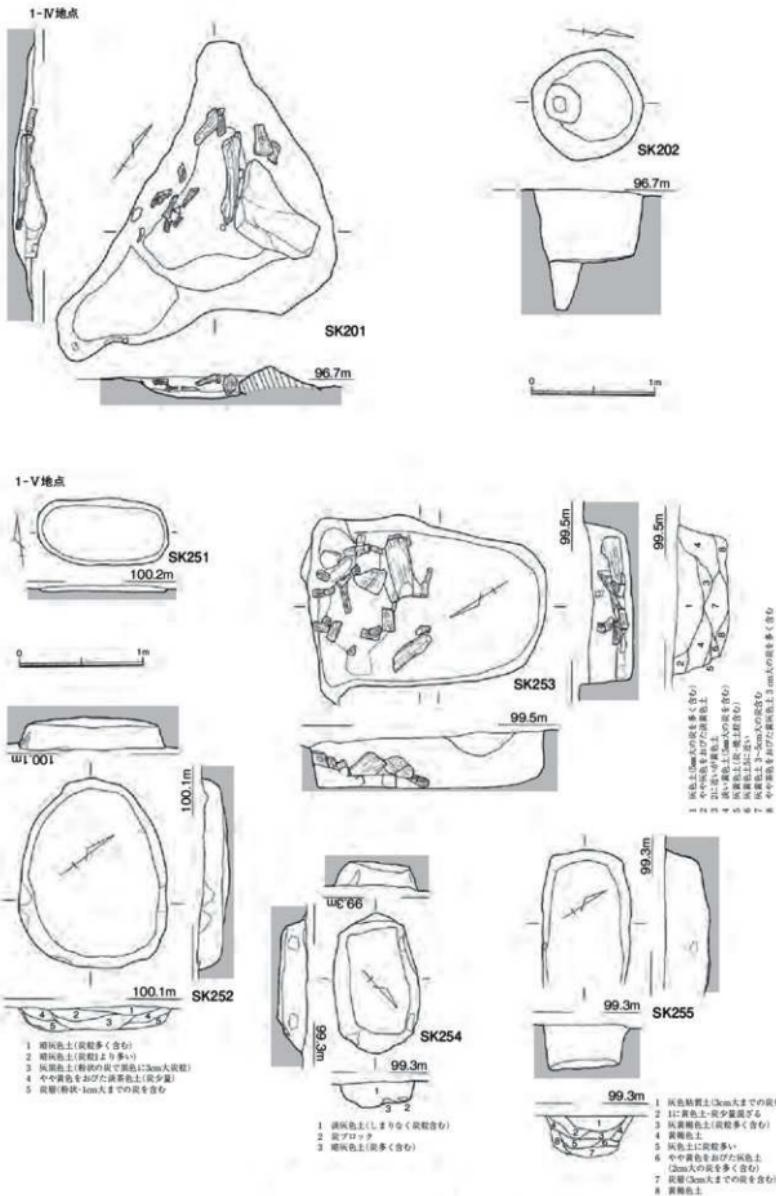


Fig.62 1-IV、1-V地点遺構実測図 (1/40)

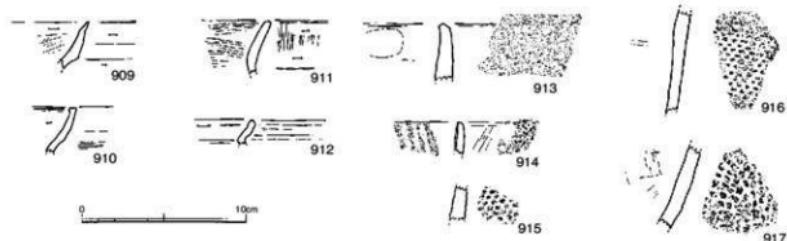


Fig.63 1-V地点出土遺物実測図 (1/3)

6. 1-V地点の調査

1-IV地点から25m間をおいた幅10m、延長89mの調査区で、北端の標高98.5m、南端101mで比高差2.5mほどである。焼土坑5基を検出した。

SK251 (Fig.62) 調査区中央で検出した浅い長楕円形の土坑で105×55cm、深さ5cmを測る。覆土は炭層である。赤片部はみられないが焼土坑の底が残ったものと考えた。遺物は出土していない。

SK252 (Fig.62) 調査区中央で検出した不整楕円形の焼土坑で155×123cm、深さ22cmを測る。覆土には炭を含み、床面の縁に粉状の炭がたまる。壁に焼成による赤変部がみられる。遺物は出土していない。

SK253 (Fig.62) 調査区南よりで出土した隅丸長方形の焼土坑で196×138cm、深さ45cmを測る。覆土は灰色土で5cm大までの炭粒を含む。北側の底には木炭および炭層が残るが、木炭は整列していない。南側は炭層もみられない。壁は図示していないが赤変部が多い。909は土師器の口縁部で内外面に横なでを施し、橙色を呈す。910は布留式系の壺で内外面を横なでで仕上げる。他に外面刷毛目、内面削りの古墳前期土師器小片が10数点出土している。

SK254 (Fig.62) 隅丸長方形の焼土坑で108×68cm、深さ24cmを測る。覆土はしまりがない灰色土で炭粒を多く含む。目立った炭層はない。壁は一部赤変している。遺物は出土していない。

SK255 (Fig.62) 隅丸長方形の焼土坑で調査区外へ広がる。長さ112cm以上、幅71cm、深さ35cmを測る。覆土は灰色、黄褐色の粘質土で炭粒を含み、底には炭層が溜まる。壁はわずかだが焼けている。遺物は出土していない。

この他に検出面で911から917が出土した。911は土師器で外面縦方向の刷毛目の後横なで、内面横方向の刷毛目を施す。912は縄文晩期の精製浅鉢で内外面研磨調整である。913は粗製の縄文土器で外面に横方向の削りによる砂、粘土の動きがあり、口唇部は横なでである。内面は鉄分が付着する。914から917は押型文土器である。914は外面は器面荒れのため不明確だが破面下部に斜線がみられ山形押型文か。内面には縦方向に原体条痕を施文する。915、916は同一個体と考えられる。外面に小型の楕円押型文を施し内面は丁寧なでで平滑である。砂粒を多く含み金雲母が目立つ。焼きが良く固い。917は大きめの楕円押型文を施し、押型文の重なり部が多い。径のカーブが大きく底に近い部分と考えられる。砂粒は細かく少なく、胎土は細かいため器面は滑らかである。この他に検出時には土師皿、古墳前期の土師器壺、縄文粗製土器、近世染付片が出土している。

7. 2地点の調査

事業地の南端近くの調査区で門戸口の集落に近い。現況で佐賀方面への街道から西の椎原川の谷筋への降り口に位置する。田面切り土工事に伴う $45 \times 35m$ の略長方形の調査区である。遺構面は表土、旧表土、茶褐色土を除去した茶褐色粘質土または砂質の強い黄褐色土で、下は礫を多く含む黄褐色砂質土である。遺構面に礫が露出する事が多く、遺構が集中する南隅と調査区北西1/3に特に礫が露出する。その間のSD350 (Fig.64) の南東側付近、調査区南東半は少ない。遺構面の標高は南西側で100.25m、北東側で99.25mと比高差が1mほど北東へ傾斜する。調査前の田面2面の範囲で、水田面の段差は遺構面にも現れ、調査区中央を横断する溝SD318から段落ちがこれにあたる。段差は西側の大きなところで30cmほどである。南側の上段中央から南西側の遺構が集中する部分はほぼ平坦で整地が行われたと考えられる。

検出した遺構は溝、土坑、焼土坑、多くのピットと掘立柱建物である。この調査区では南側の一画に集中するピット群が特徴的である。ピットは並ぶものが多く、出土する遺物は15世紀を中心とする時期で、限られた期間に建て替えが行われたことが想定できる。南側には水田土壤を覆土とする搅乱がいくつか見られるが、石の抜き跡ではないかと考えられる。また、上段中部では遺構検出面である黄茶褐色粘質土から縄文土器がまとまって出土した。縄文土器は中世の遺構、遺構検出時にも出土している。

以下、各遺構と出土遺物、包含層出土遺物の順で示す。

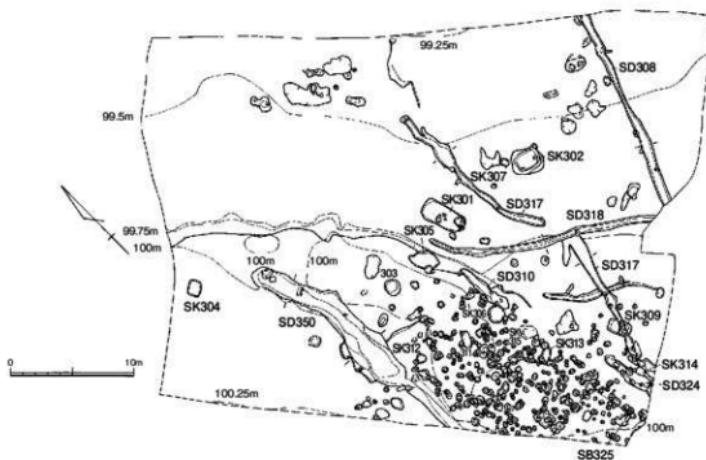


Fig.64 2地点遺構配置図 (1/400)

(1) 土坑

焼土坑や溝、ピット以外の遺構をここであつかう。

SK301 (Fig.65) 隅丸長方形の浅い土坑で炭層がたまる。焼土坑の底のみと考えられる。390×160cm、深さ8cmを測る。南側はピットに切られ、中央は底では小ピットを検出した。赤片はみられない。遺物は出土していない。

SK302 (Fig.65, 67) 隅丸長方形の焼土坑で平面250×225cm、深さ60cmを測る。覆土には下部に炭を多く含む層があるが炭層にはならない。壁は下半の急傾斜部の東半で赤変する部分が大きい。底、床に礫が露出する。

出土遺物 中世1点と繩文土器片が出土している。1000は土鍋の口縁部で外面が煤ける。

SK303 (Fig.66, 67) 略円形の土坑で127×120cm、深さ26cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで赤変はない。覆土は上部に焼土粒を含む灰色砂質土で、中程の薄い2層が赤みを帯びており、炉等であつたかもしれない。現地で十分な検討を行っていない。

出土遺物 1001は外反気味の口縁部で外面横なで、内面刷毛目で土鍋であろう。1002は土鍋、1003は糸切り底の土師皿片である。他に黒曜石片が少量出土した。

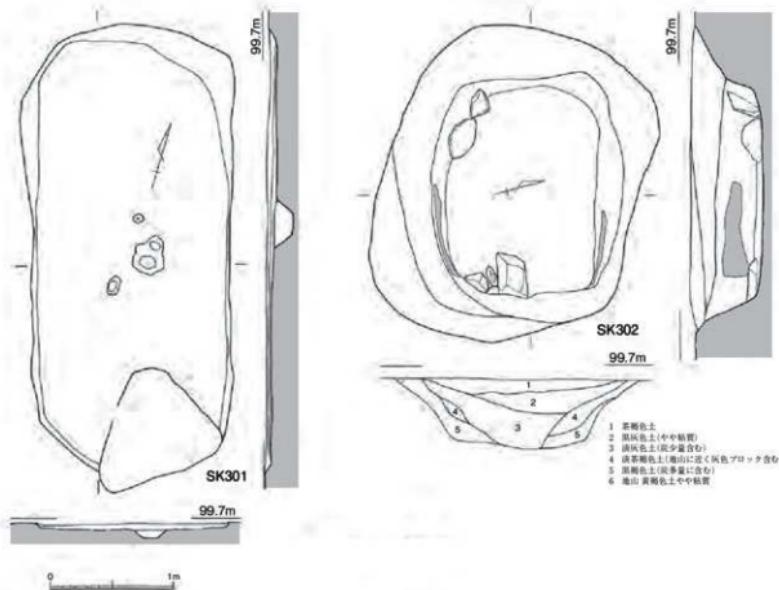


Fig.65 SK301, SK302実測図 (1/40)

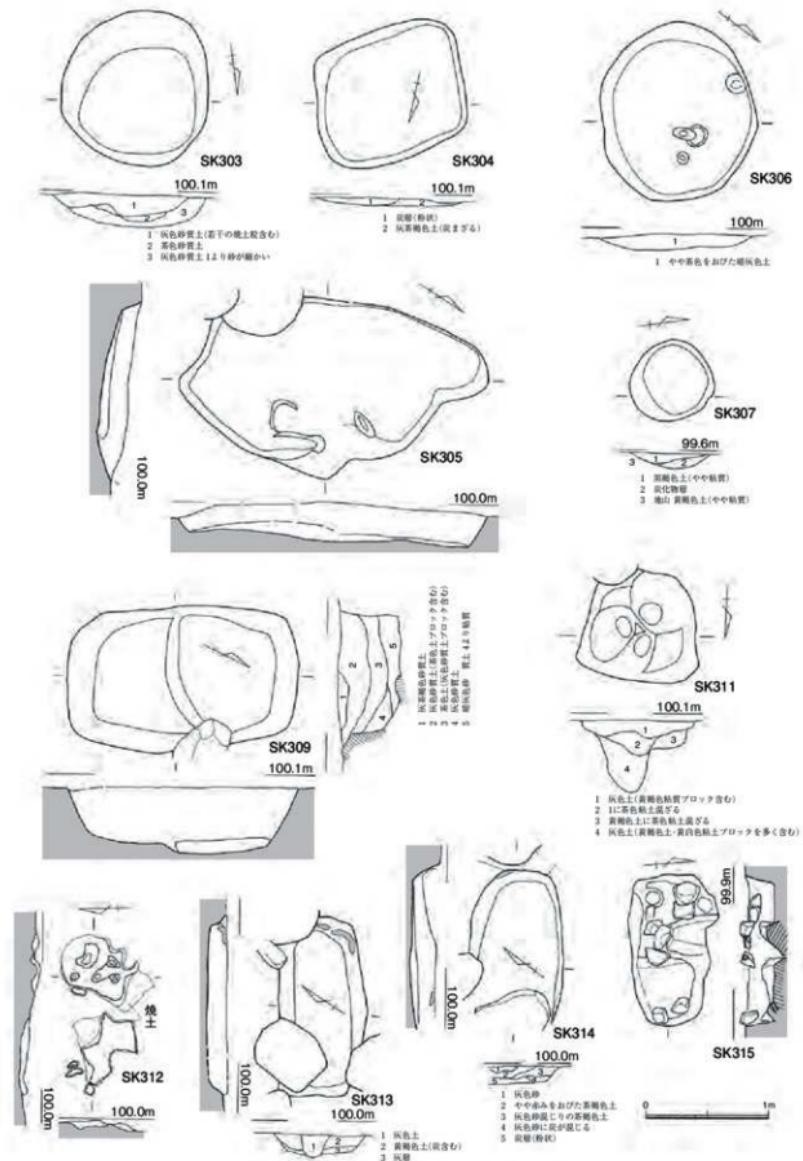


Fig.66 2地点焼土坑・土坑実測図 (1/40)

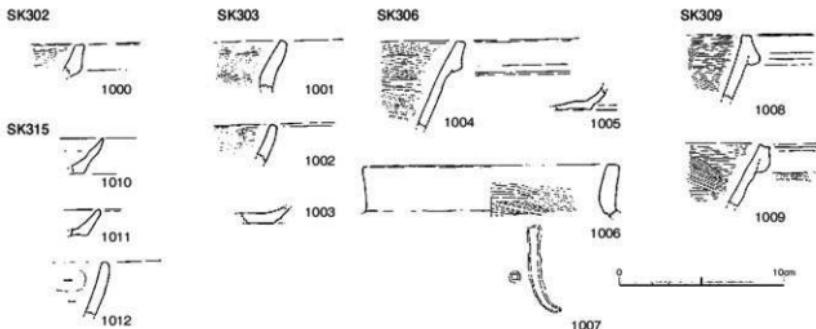


Fig.67 2地点土坑出土遺物実測図 (1/3)

SK304 (Fig.66) 調査区西側隅で検出した不整形の浅いくぼみ状の土坑で、 $125 \times 107\text{cm}$ 、深さ5cmを測る。粉状の炭が溜まつておき焼土坑の床と考えている。赤変部は見られない。遺物は確認できなかった。

SK305 (Fig.66) 段落ち部で検出した不整形の土層でピットに切られる。 $254 \times 147\text{cm}$ 、深さ33cmを測る。検出面よりやや暗くしまりがない茶褐色シルト質土を覆土とし縄文土器が1点出土している。人為的な造構ではないと考えている。

SK306 (Fig.66, 67) 略円形の土坑で $147 \times 127\text{cm}$ 、深さ13cmを測る。ピット群と同様やや粘質の暗茶褐色土を覆土とする。床に小ピットがあり、深さ10から20cmを測る。

出土遺物 1004は土鍋で外面に煤が付着する。1005は糸切り底の土師皿である。1006は土師質の釜で外面横なで、内面刷毛目で内外面黒色を呈す。1007は鉄釘で全長55cmである。他に土師質土器、土師皿片が出土している。

SK307 (Fig.66) SK302で検出した浅い円形の土坑で径70cmほど、深さ12cmを測る。底に薄く炭層があり、焼土坑に関連するものと考えている。遺物は確認できていない。

SK309 (Fig.65, 67) 隅丸長方形の土坑で $189 \times 118\text{cm}$ 、深さ53cmを測る。SD317に切られる。床は北半が10cmほど低い。覆土は暗灰色砂質土を主とし、炭層はない。壁に赤変は見られない。

出土遺物 1008、1009は土鍋で外面口縁部は横なで、体部は刷毛目の後なで、内面刷毛目である。外面に炭化物が付着する。他に土師質土器、土師皿小片が出土している。

SK311 (Fig.66) ピット群で $100 \times 90\text{cm}$ の方形プランを検出した。ピットの集合の可能性が高い。遺物は確認できていない。

SK312 (Fig.66) ピット群の北西側で $130 \times 70\text{cm}$ ほどの範囲に焼土の広がりがあった。厚さ5cmほどを測る。造構の性格、時期は不明である。

SK313 (Fig.66) 隅丸長方形の焼土坑で $147 \times 70\text{cm}$ 、深さ20cmを測る。ピット群に切られる。底に炭層が厚さ5cmほどたまり、壁は東側が一部焼ける。縄文土器片、黒曜石・安山岩が少量出土した。

SK314 (Fig.66) 隅丸長方形の焼土坑で西南西側は大きな礫にあたる。長さは135cmが想定され、幅75cm、深さ15cmを測る。底に粉状の炭が溜まる。壁は一部が焼けている。遺物は確認できていない。

SK315 (Fig.66, 67) 平面隅丸長方形の土坑で $126 \times 75\text{cm}$ 、深さ28cmを測る。覆土である茶褐色粘質土を除去すると床、壁に礫、巨礫が露出し、土の面が少ない。

出土遺物 1010、1011は土師皿、1012は外面に炭化物が付着する土鍋である。他に土師質の胴部片、条痕文土器小片が出土している。

(2) 溝

SD308 (Fig.68、69) 等高線に直交して北へ走る。最大幅87cm、深さ15cmを測る。淡茶色砂質土を覆土とする。近世か。

出土遺物 1013は白磁片で近世のものか。1014は内面に花文を描く明代の青花、1015は瓦質で浅鉢か。1016は土師質で焼きがよい。1017は土師質の土鍋である。1018は瑪瑙製の玉で径1.8cm、厚さ最大で1.14cmで孔の径0.58cmを測る。孔は両側から穿孔を行い、ずれによる段がある。他に陶器の擂鉢、黒曜石片などが出土している。

SD310 (Fig.68、69) ピット群に接し、等高線に平行する溝状遺構で幅70cm、深さ20cmを測る。灰色でしまりのない砂質土を覆土とし、底には荒砂が溜まる。

出土遺物 1019は龍泉窯系の青磁碗で厚い灰緑色の釉を施す。高台内は釉剥ぎである。内外面に草花文を描く。他に土師器片が出土している。

SD317 (Fig.68、69) 等高線に直交して北へ蛇行する。SK309を切りSD318に切られる。最大幅122cm、深さ20cmを測る。淡灰色の砂質土を覆土とする。土師皿片、縄文土器片が出土している。ピット群の東限を区切る位置であるが、覆土は異なる。

SD318 (Fig.68、69) 等高線に平行して東西方向に延び、水田区画に一致する。茶褐色粘質土を覆土とする。幅60cm、深さ18cmを測る。遺物は確認できていない。

SD350 (Fig.68、69) 調査区西側部からの段落ちに沿い、ピット群の西側に位置する。幅155cm、深さ36cmを測り、床は礫層に達する。ピット群のはば西限に位置し、遺物もほぼ同じ様相であり、関連があると思われる。

出土遺物 1020から1023は断面三角形の口縁部突帯を持つ土師質の土鍋で外面は煤ける。1024、1025は内湾気味の口縁部をもつ土師質の土鍋でやはり外面は煤ける。1026は瓦質でコネ鉢または擂鉢で口唇部の横なでが顕著である。1027は土師質の擂鉢で内外面刷毛目、口唇部と外面に強い横なでを施す。灰褐色を呈し焼きがよい。1029は土師質の土師皿である。口縁部はわずかのみ残り、復元口径12.8cmを測る。1030は土師質の釜で外面黒色を呈す。1031は釜の肩部付近で調整による細突線がめぐり外面は横なでと丁寧ななでで平滑で光沢がある。焼成後の穿孔を施す。1032は土師質の土釜で

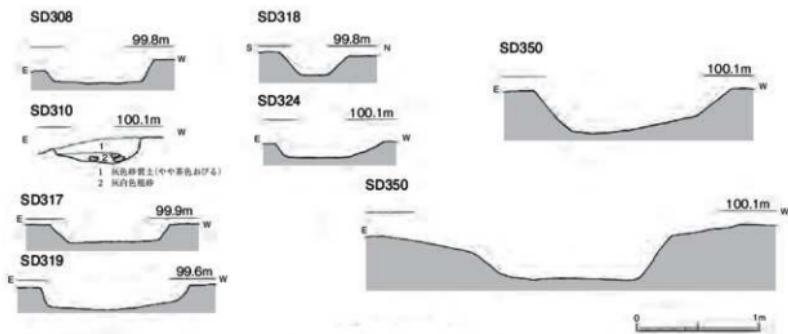


Fig.68 2地点溝断面図 (1/40)

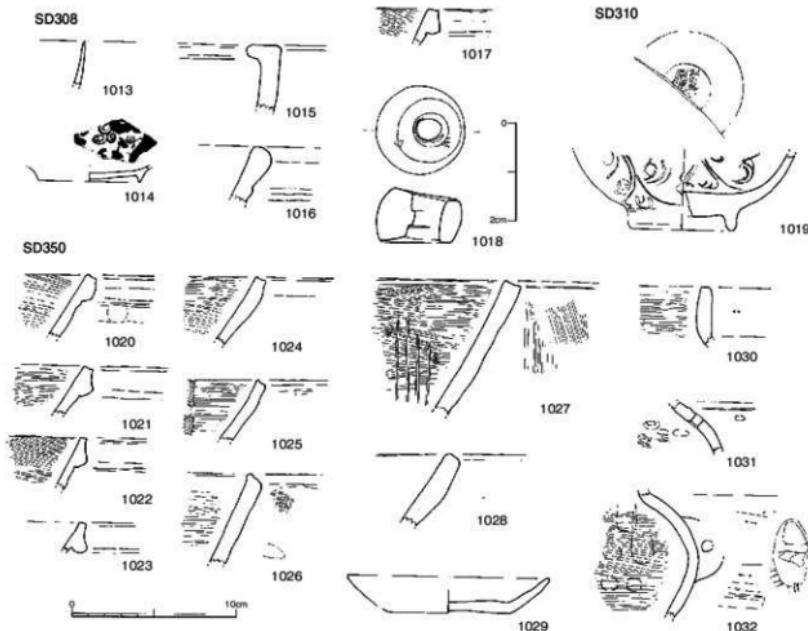


Fig.69 SD308、SD350出土遺物実測図 (1/3, 1/1)

内外面が暗灰～黒色で横方向の刷毛目が残る。縦方向の取手を貼付する。他に須恵器片1、青磁小片、土師質片、縄文土器が出土している。

SD324 (Fig.68) 調査区南端東よりで検出した。最大幅110cm、深さ12cmを測る。SK314を切る。底には巨礫が頭を出す。ピット群の北限に平行し、SD310の延長上に位置し同じ方向に走る。遺物は確認できていない。覆土については記録できていない。

(3) 掘立柱建物柱とピット

先述したように調査区の南端の一画にピットが集中し、その配置は方形の区画におさまるようである。想定される区画は幅約10mで南側の調査区外にさらに広がり、南北の延長約17mが確認できる。ピットは東西南北方向にならび、柱筋が通りそうなものが多い。

ピットの覆土はほほども暗茶褐色のやや粘質の土で礫を含み、壁、床に多くの礫が露出した。大きな堀方に複数の底があるものは切り合いがあると考えられるが確認できていない。また出土遺物は15世紀を主体とした土鍋、土師皿等で顕著な時期差を見出せなかった。区画、柱筋が想定できそうでもあり、掘立柱建物柱の立て替えが繰り返し行われたと考えられる。このため調査中および調査後は図面上で建物の復元を試みたが、幾通りにも建物を想定することができ、いわばどうにでもなるよう思えた。報告にあたっては現地で復元した掘立柱建物柱SB325のみを示し、Fig.72にピット集中部の平面図と、ピット出土の特徴的な遺物を遺構ごと示したい。

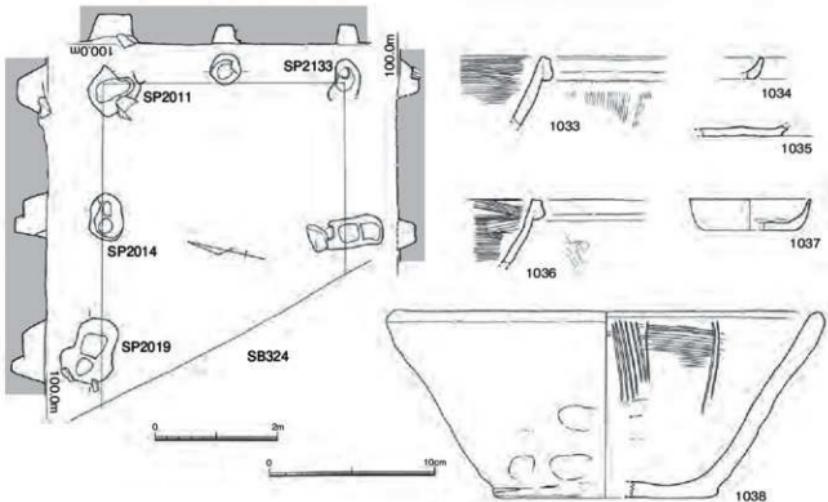


Fig.70 SB325実測図 (1/80)

Fig.71 SB325出土遺物実測図 (1/3)

SB325 (Fig.70, 71) 調査区南端部で2間×2間以上を復元し調査区外に延びると考えた。梁行きは2間で395cm、桁行きは530cm以上で、桁行きの柱間は230cmになる。柱穴の堀方は径40cmから90cmと幅がある。深さは30cmから60cmと一定していない。柱痕跡は確認できなかった。この部分は地山に礫を多く含み、底や壁に礫が露出する。SP2014以外のピットから遺物が出土している。

出土遺物 1033, 1034はSP2011から出土した。1033は断面三角突帯を口縁部に貼付する土鍋で外面を縦方向の後なで、内面は横方向の刷毛目を施す。1034は土師皿で器面は荒れる。1035も土師皿で糸切り底が明瞭に残る。1036はSP2014からの出土の土師質の土鍋で外面には炭化物が付着する。内面は横方向の刷毛目を施す。1037, 1038はSP2019からの出土。1037は土師皿で1/4からの復元口径7.4cmを測る。1038はm離れたSP2043の破片と接合した擂鉢で底からの復元で口径23.6cmを測る。白色で胎土は細かいが砂粒を含み瓦質ほど焼きはよくない。外面はなでて指頭痕が残り、内面上部は刷毛目と擂目が残るが、下部は横方向の擦痕で調整痕、擂目は消えている。末図化や他のピットに土師皿など同様の小片が出土している。時期は15世紀の範囲でおさまると考えられる。

ピット出土遺物 (Fig.73, 74) ピット出土遺物のうち、口縁部等の特徴的なものを遺構毎に示す。遺構の位置はFig.72に示した。1039はSP2001と2002出土の破片が接合した。土師器の土鍋外面に煤が付着する。1040はSP2003出土の土鍋でやはり外面に煤が付着する。1041はSP2007出土の土師皿で1/5からの復元口径9.2cmを測る。1042から1044はSP2009出土で1042は白磁の皿、1043は土鍋で外面などで、内面刷毛目を施す。1044は口縁部断面三角形の土鍋である。1045から1048はSP2012出土で1045は土師器の土鍋で外面に炭化物が付着する。1046は土師質、1047は瓦質のこね鉢または擂鉢、1048は糸切り底の土師皿である。1049から1052はSP2015出土で1049は土師器の土鍋、1050は土師質で土



Fig.72 2地点ピット集中部実測図 (1/100)

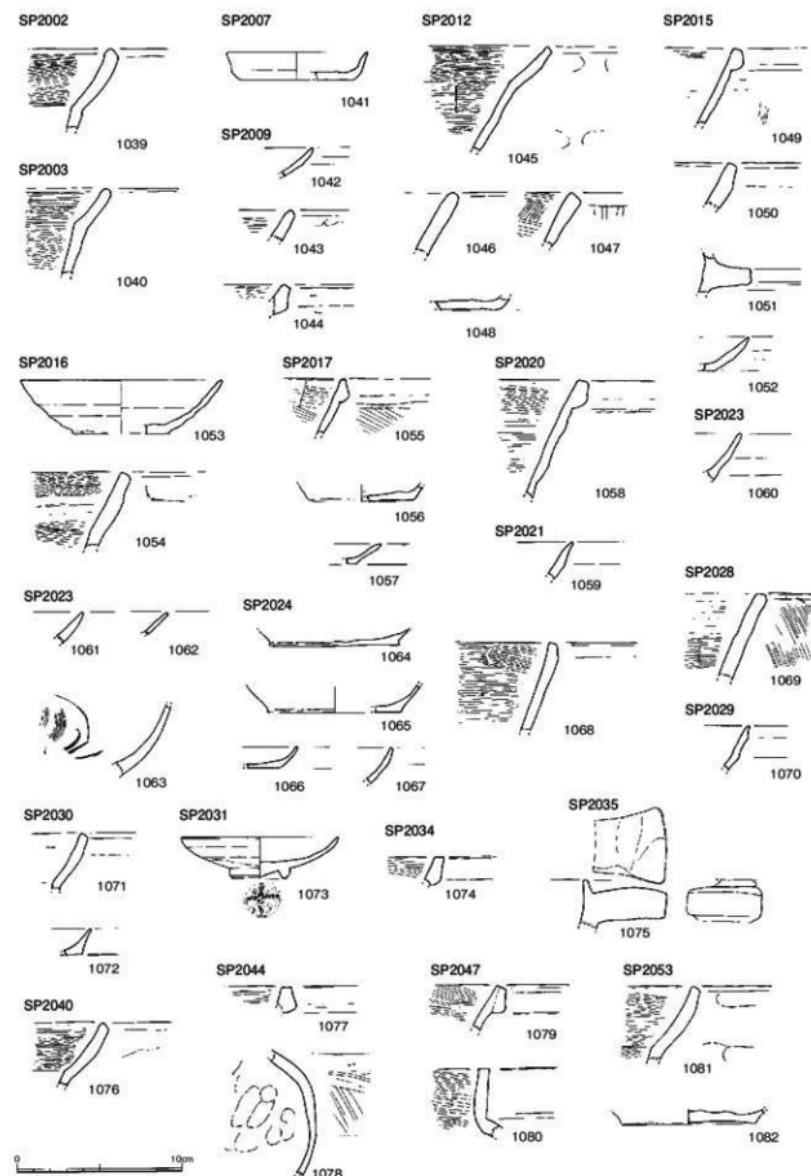


Fig.73 2地点ピット出土遺物実測図1 (1/3)

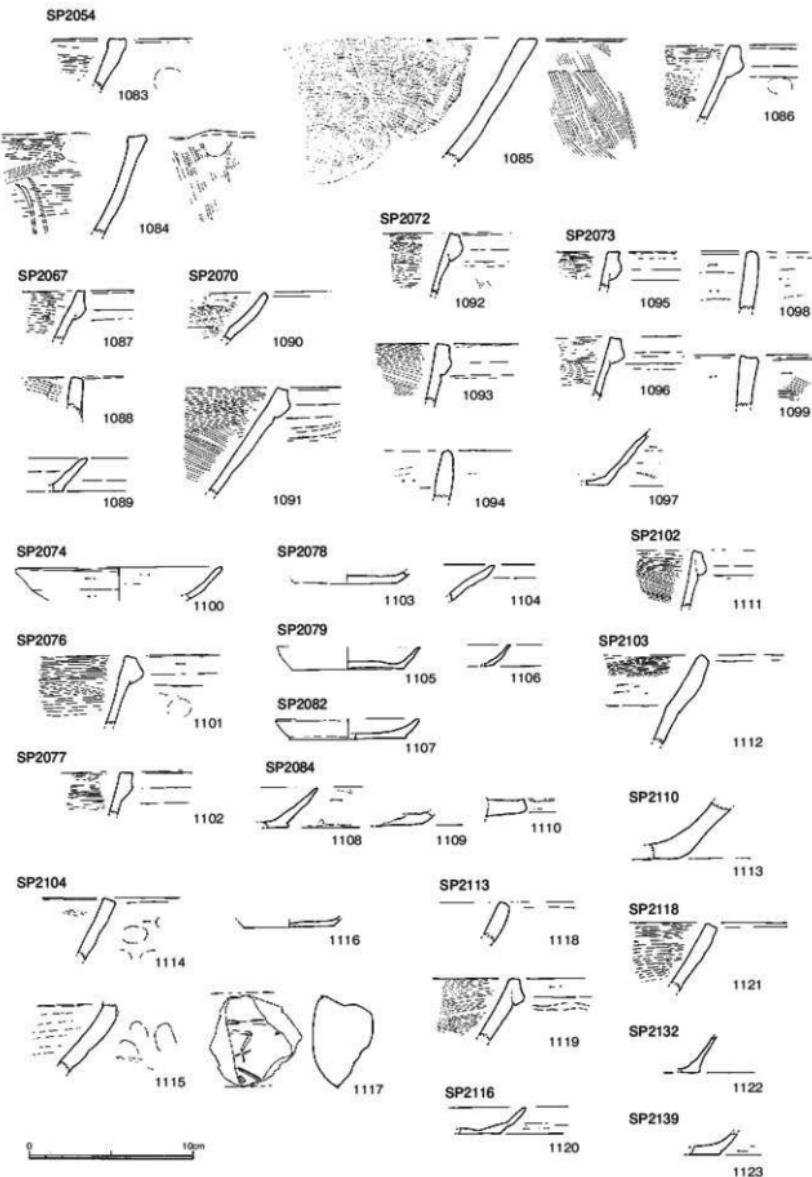


Fig.74 2地点ピット出土遺物実測図2 (1/3)

鍋か。1051は土師質の釜の鍔で外面は黒褐色、内面暗灰色を呈す。1052は糸切り底の土師皿である。1053、1054はSP2016出土で1053は糸切り底の土師皿で1/4からの復元口径12.3cm、1054は土師質の土鍋でSP2015出土片と接合した。1055から1057はSP2017出土で1055は土師質の土鍋で外面は煤け、1056、1057は糸切り底の土師皿である。1058はSP2020出土の土鍋で外面は荒れ淡橙色を呈す。1059はSP2021出土の土師皿片である。1060はSP2023出土の土師皿で胎土が細かい。1061から1063はSP2023出土で1061、1062は土師皿、1063は龍泉窯系青磁碗1類で12世紀後半のものである。1064から1068はSP2024出土で1066までは糸切りの土師皿で1064には板目が残る。1067は白磁皿である。1068は土師器の土鍋で外面に炭化物が付着している。1069はSP2028出土で土師質の土鍋で内外面とも黒褐色を呈し、外面は斜方向の刷毛目のちなで、内面は横刷毛目のち上部を強くなる。1070は土師器皿である。1071は土師器の土鍋、1072は土師皿でSP2030出土。1076はSP2040出土の土師器の土鍋で外面は炭化物が付着する。1073はSP2031出土の白磁皿類で豊付内に「米」の字状の墨書がある。1074はSP2034出土で土師質の土鍋と考えられる。1075はSP2035出土の石鍋の取手で下側が煤ける。1076は2040出土の土師器の土鍋で外面に炭化物が付着する。1077、1078はSP2044出土で1077は土師質の土鍋、1078は土師質の釜で外面は暗茶褐色を呈し擦過の後横なでで下部に炭化物が付着する。内面は刷毛目のあとなどで指頭圧痕が良く残る。1079、1080はSP2047出土で1074は土師質の土鍋、1080は土師質の釜で内外面黒褐色を呈す。1081は土師質の土鍋、1082は糸切り底の土師皿でSP2053出土である。1083から1086はSP2054出土で1085までは土師質の鉢で1084には擂目がある。1085は内外面に深い刷毛目が残る。外面には炭化物が付着し、内面には刷毛目の前に縱方向の短い沈線が4本見られる。1084は土師質の土鍋である。1087は土師質の土鍋、1088は土師器の釜、1089は土師皿で内面煤ける。1090、1091はSP2070出土の土師器の土鍋で外面に炭化物が付着する。1092から1094はSP2072出土で1092、1093は土師器の土鍋、1094は土師質で内外面は黒色を呈する。1095から1099はSP2073出土で1095と1096は土師器の土鍋、1097は土師皿で擦過を施す。1098は1094に近い。1099は土師質の鉢である。1100はSP2074出土の土師皿で1/6からの復元口径12.6cmを測る。1101はSP2076、1102はSP2077出土の土鍋である。1103、1104はSP2078出土の土師皿、1105、1106はSP2079出土の土師皿である。1105は1/2強の残存で口径8.8cmである。1107はSP2082出土の糸切り板目圧痕の土師皿で1/6からの復元口径8.7cmを測る。1108、1109は土師皿、1110は土師器の釜の鍔部でSP2084出土。1111はSP2102出土、1112はSP2103出土の土鍋である。1113はSP2110出土でこね鉢か。1114から1117はSP2104出土。1114は土師質で内外面なでで外面は煤ける。1115は土師質の鉢で外面なで、内面は滑らかなへらなでである。1116は糸切り底の土師皿、1117は非常に多くの粗砂を含む粘土塊で焼きがあまくぼろぼろの状態である。器面に葉状の圧痕があり米状の粒が見られる。1118、1119はSP2113出土の土鍋、1120はSP2116出土の糸切り底の土師皿、1121はSP2118出土の土鍋。1122はSP2132、1123はSP2139出土の糸切り底の土師皿である。

(4) そのほかの遺物

遺構検出時などに出土した遺構に伴わない遺物を示す。その多くが15世紀代を前後する中世のもので、次に縄文時代の遺物である。

磁器 (Fig.75) 1124から1126は青磁で灰緑色の釉を厚く施す。1125は口縁直下に太い沈線を施し、1126は外面に連弁文、内面に花文を施す。1127はやや淡い緑色釉の青磁で豊付内は露胎で外面下部に沈線が入り見込みに花文を施す。1129は白磁皿で高台に4つの切り込みを入れ、見込みに胎土目が残る。1128は白湯した淡緑色の釉を施す青磁で、外面底を輪状に釉剥ぎする。見込みには花文を施す。1130は湯飲み茶碗。

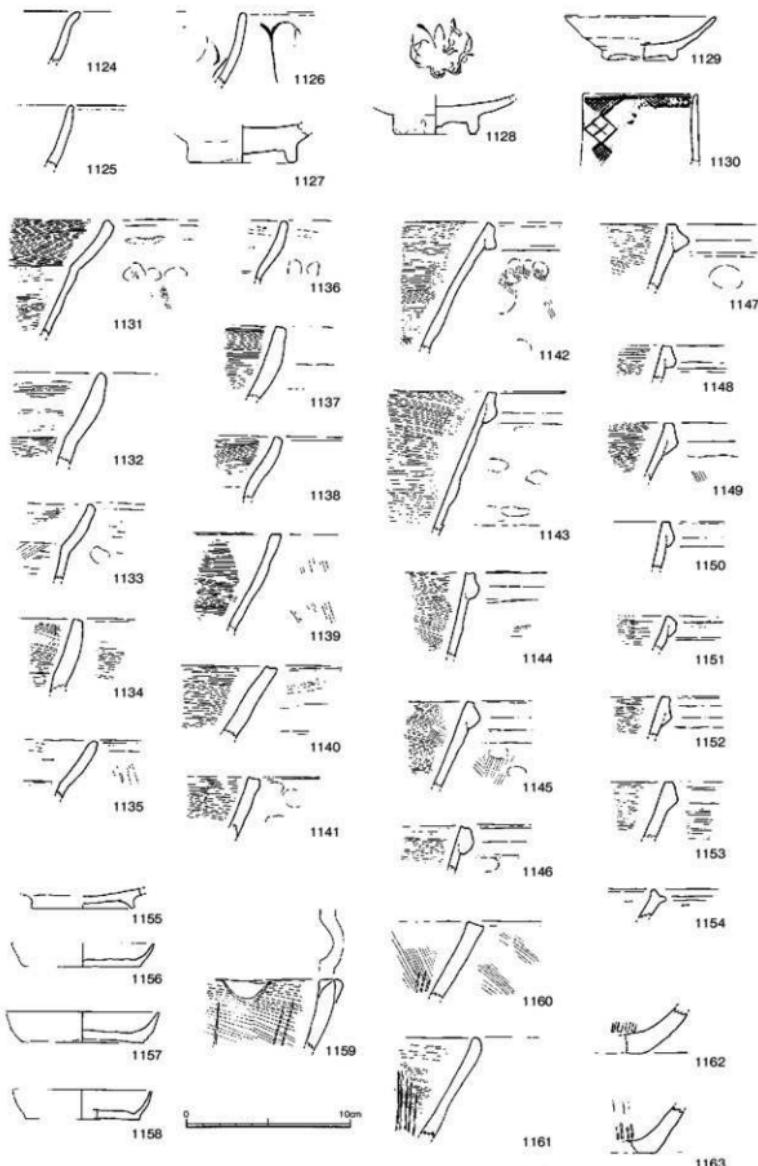


Fig.75 2地点出土その他の遺物実測図1 (1/3)

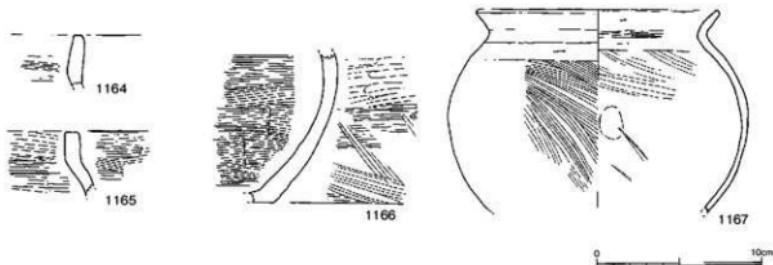


Fig.76 2地点出土その他の遺物実測図2 (1/3)

土師器・瓦質土器 (Fig.75, 76) 1131から1137は口縁部が内湾し「く」の字に屈曲する土師器の土鍋で外面なで炭化物がみられ、内面は刷毛目調整で、器壁の厚さや器面の仕上げなどばらつきがある。1139から1141は直口する土師器の口縁部で外面に煤がみられ土鍋とした。1142から1153は口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける土師器の土鍋でその形、大きさはばらつきが多い。1154は口唇端部を外につまみ出し、外面が煤ける。2地点で出土した遺物では土鍋が最も多い。1155は黒色土器Aの碗で器面は荒れる。1156から1158は糸切り底の土師皿で、復元口径は順に1/2から8.2cm、1/2から9.3cm、1/3から8.5cmを測る。1159から1163は擂鉢で1162が灰白色で瓦質に近いが、他は土師質で胎土は細かく淡橙色を呈す。1164、1165は瓦質の釜で1164は内外面黒色、1165は外面灰色、内面淡橙色を呈す。1166は瓦質の釜で画面研磨部は光沢を持つ。1167は土師器の壺で1/2からの復元口径15.6cmを測る。古墳時代のもの。

繩文土器 (Fig.77, 78, 79) 遺構検出時、遺構覆土内を中心に繩文時代の遺物が出土した。調査区中央でI-II区1層に近い黄茶褐色粘質土で包含層を確認したが出土した遺物はわずかである。ここでは一括して報告する。遺物は古閑式が主体をしめ、次に曾畠式など前期が目立つ。周辺の地区で包含層、遺構が期待される。1171と1172は外面に突帯を持つ轟B式で突帯は丸みを帯びる。1173は強く面取りした口唇部の外面に突帯を軽く貼付し、刻み目は荒々しく狭い条痕が見られる。内面はヘラなどで外面に粘土の動きが見られる。器壁は非常に固い。図にすると夜臼式だが霧開気は異なる。1174から1185は胎土に滑石を多く含み、太い沈線、列点文を施す曾畠式である。1177から1179は横線の後に斜め沈線を施す。1186から1190は外面に太い繩目による施文を施す。1186が特に深く施文する。卷末写真参照。内面はなでで擦痕が見られるものもある。明淡橙色を呈し砂粒が多くカクセン石を含む。焼きは固い。施文の深さは異なるが同一個体であろう。

1191から1217は器面が荒れたものもあるが、主として内外面を研磨する精製土器である。1191は丁寧な研磨で光沢がある。焼成後の穿孔が3箇所にあるが、1/4の破片であり全体の数は不明である。復元口径20.4cmを測る。1215は他より厚手の器壁の屈曲部より上に細い沈線5条が見られる。

1218は内外研磨状の調整だが荒く外面黒色を呈すため粗製に近い。1220は粘土帶接合痕がよく残る体部片である。

1221から1260は粗製の鉢、深鉢である。器面調整は条痕を残すものがI-II地点に比べやや少なめで、条痕や割りの後なでるものが多い。内面はなで、ヘラなどでも多いが研磨するものはみられない。1221は外面条痕、内面ヘラなどで口唇部を2枚貝状工具で刺突横引きで刻む。1222は口縁帶状の外面に沈

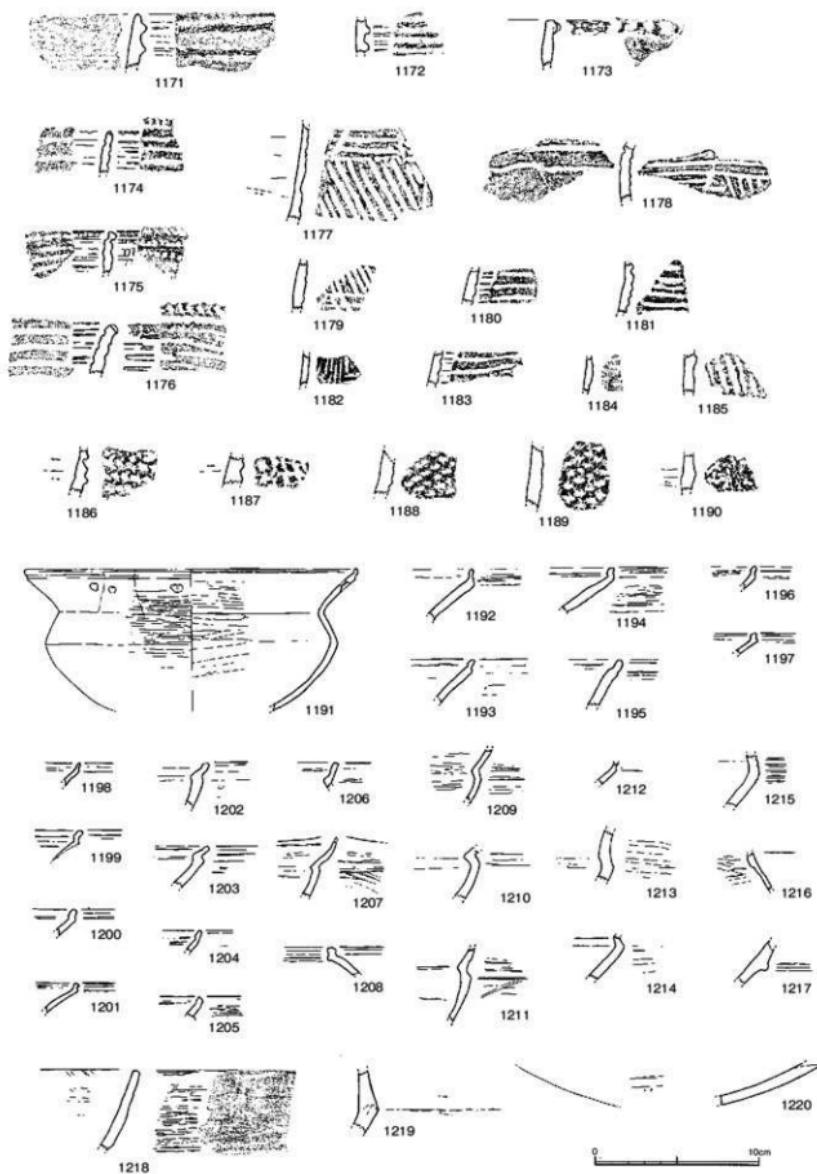


Fig.77-2 地点出土绳文土器実測図1 (1/3)

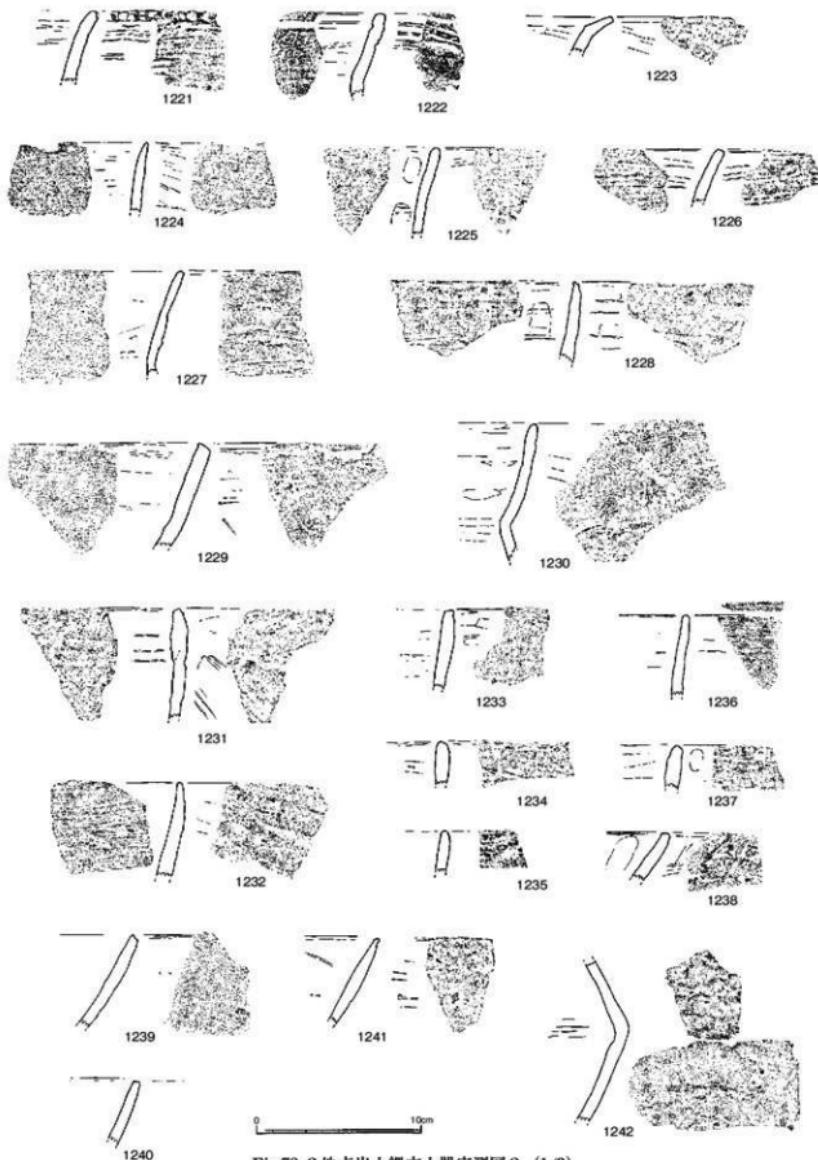


Fig.78-2 地点出土绳文土器実測図2 (1/3)

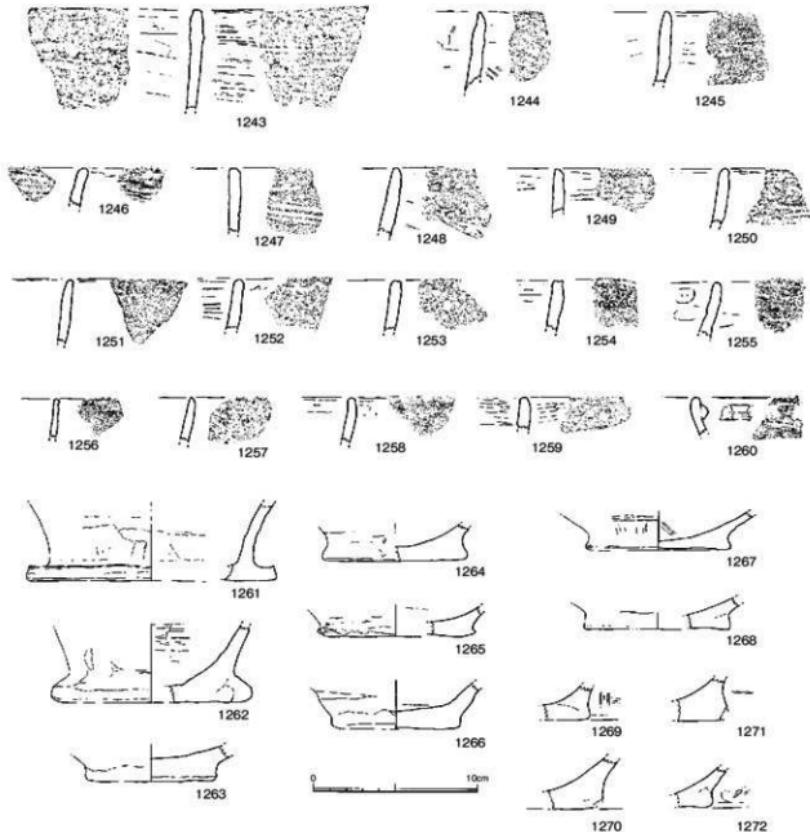


Fig.79 2地点出土縄文土器実測図3 (1/3)

線を施すが、成形、施文にシャープさがない。1224は口縁部を屈曲し内面を強くなれる。外面は削り状。1225は外面、1226は内外面に条痕を施す。1227外面は荒い条痕状の擦痕調整。1229は器壁が厚手で外面削りである。1231は口縁部を厚く肥厚する。1232の内面は板目状で深く調整が残る。外面には炭化物が付着する。1259は内面に段があり、沈線、調整痕かもしれない。1260は外反する口縁部に突起を弱く貼付する。割れて不明だが刻目突起土器と考えられる。

1261は滑石を多く含む阿高式の底部で1/4からの復元である。1262から1272は粗製土器の底部で1262が張り出しが大きい以外は小さな台形底を呈す。1267、1268は外面の作りがシャープで開く傾きが大きい。内面は研磨様のやや丁寧な調整で浅鉢と思われる。

石器 (Fig.80, 81) 黒曜石と安山岩製の剥片石器、石斧等の礫石器が出土した。石鎚、石錐、石匙、

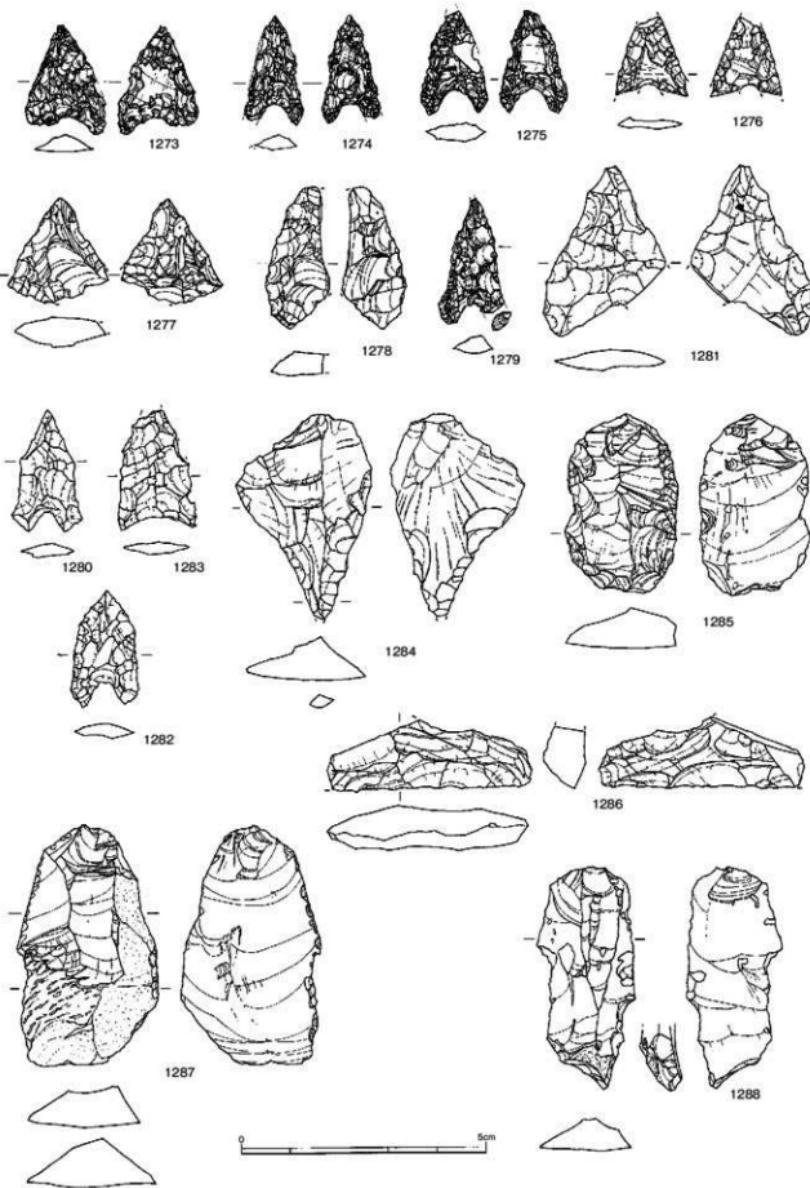


Fig. 80 2 地点出土石器实测图 1 (1/1)

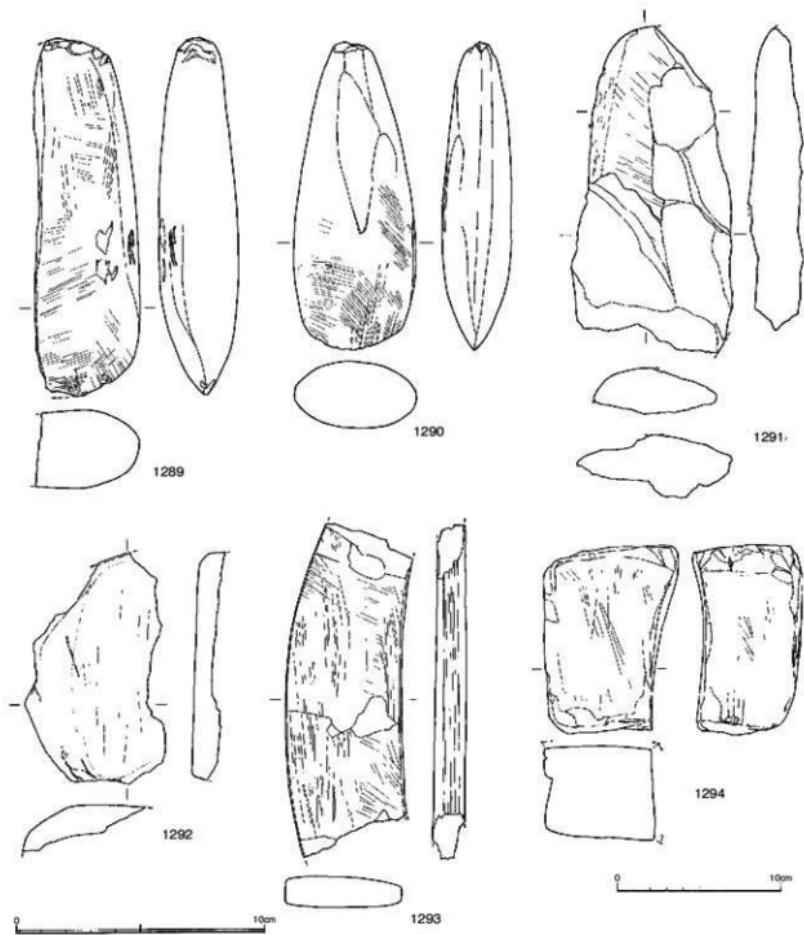


Fig.81 2 地点出土石器実測図 2 (1/3, 1/2)

石斧については確認できたものについては図示した。1273から1279は黒曜石製、1280から1283は安山岩製の石鎌である。小さく深めの抉りが入るものが多い。1278は半分が欠ける。先端部が尖らず抉り部が極端に薄く、石鎌とするにはやや不自然な感がある。スクレーバーの可能性もある。1284は安山岩製の石錐、1285は黒曜石製の削器で2辺の背面に細かな剥離を施し、1辺は急角度に仕上げる。先端に自然面を残す。1286は安山岩製の石匙が折れたものと考えられる。1287は黒曜石の縦長剥片で使用痕が見られる。1288は黒曜石で縦長剥片の先端を剥離し錐状に成形する。1289、1290は蛇紋岩製の磨製石斧で368.46g、257.91gを測る。1289は縦半分が欠け、刃部に小さな欠けがある。全体に縦方

向と横方向の擦痕がみられ、刃部付近は特に横方向が目立つ。長さ14.5cm、厚さ3.2cmを測る。1290はほぼ完形品で全長12.4cm、幅4.9cm、厚さ2.8cmを測る。特に刃部周辺に横から斜め方向の擦痕が顕著である。1291は青緑色の変成岩の磨製石斧で大部分が欠損する。1293は茶色を呈す頁岩様の石材で板状の片刃が弧を描き石刀状を呈す。各器面には縦および斜め方向の擦痕が顕著である。残存長13.6cm、幅は広い部分で4.6cm、狭い部分で4cm、厚さ1.26cmを測る。1292は砂岩製の砥石でSP2033からの出土である。1294はきめ細かな泥岩で2面を砥石として使用している。他の2面にはすり目が見られる。

8. 3地点の調査

事業地の北東側に位置し、集落際を走る県道から圃場内への道路建設地にあたる。1-II 地点とは小さな谷を挟んだ対岸に位置する。調査区は幅6.5m、長さ43mで西端は谷への落ちになる。遺構面は表土および旧表土を除去した茶褐色粘質土または明赤褐色土上面で、調査区西よりが最も高いが、比高差30cmと他の地点とくらべると平坦に近い。(Fig 82)

検出した遺構は焼土坑と土坑で、中世のものと考えられるが遺物がなく、調査区全体でも少ない。Fig.84に検出面で出土した白磁IV類片を示した。他に青磁皿、土師皿、古墳時代の土師器などの小片が出土している。遺構面は縄文土器包含層でもあり、遺構調査後に掘削した。縄文時代は晩期を主体とし前期を少量含む。

(1) 土坑 (Fig.83)

SK502 調査区東側で検出した土坑で調査区外に広がるため平面形は不明である。略円形とすれば径18.5cmほどで、深さ20cmを測る。灰色土ブロックを含む炭層が溜まる。床には径20cmほどのビットがあり炭化物を覆土とする。壁の赤変はみられない。焼土坑の可能性がある。遺物はない。

SK503 隅丸長方形で130×66cm、深さ18cmを測る。長さ25cmほどの木炭が残っているが底の覆土は炭を含む程度で炭層ではない。壁の赤変はみられない。焼土坑の可能性もある。遺物は縄文土器のみである。

SK504 調査区西側の調査区壁際で検出した焼土坑で調査区外に広がる。隅丸のコーナーがあり長方形になるのだろう。2段に掘り込み下段の壁が赤変する。覆土は上段下部のレベルに多量の炭化物を含む層が見られる。遺物は縄文土器のみである。

SK505 隅丸方形の土坑で80×76cm、深さ30cmを測る。茶褐色のやや粘質土を覆土とする。縄文土器が少量出土している。

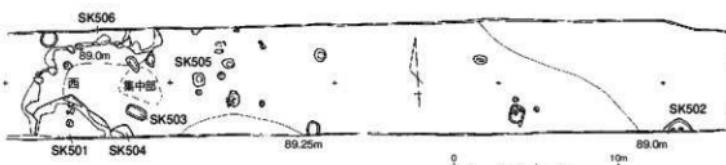


Fig.82 3地点遺構配置図 (1/300)

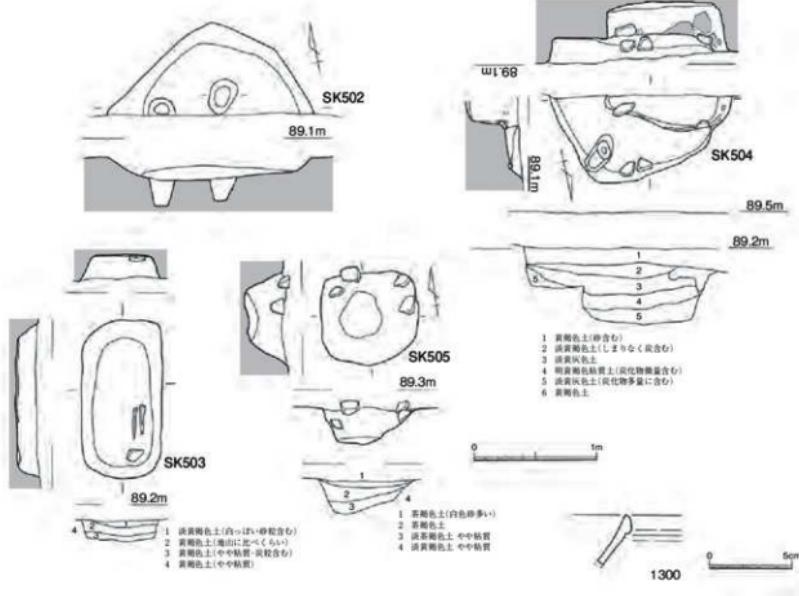


Fig.83 3地点遺構実測図 (1/40)

Fig.84 3地点出土遺物実測図 (1/3)

2) 遺物包含層

遺構検出時から縄文土器が出土し、遺構の調査終了後に遺物包含層の掘削を行った。遺物は調査区全域に見られるが濃淡があり、Fig.82、85に示したように調査区西側に2つの遺物集中部がある。この2箇所については位置を記録して取り上げた。そのうち西側の集中区は明黄褐色土のプランを確認し遺構SK501として掘削を行ったが、遺物はその上部のみであり堀込みと包含層は無関係と判断した。この部分についてFig.85の土層図で確認しておく。Ⅲ層までの表土・旧表土を重機で除去し、Ⅳ層茶褐色土とⅥ層明赤茶褐色土が遺構面として調査区に見られた。Ⅳ層は調査区の各地で見られるものの断続的であり、Ⅵ層がくぼんだところにたまつて耕地造成による削平を免れたと考えられる。またⅥ層に沈み込んだものも一部あるだろう。

出土した遺物は晩期を主体とし、前期などを少量含む。遺物集中部では大きな破片もあるが、他は小型の破片がほとんどである。遺物の取り上げに当たっては、中央の遺物集中部、SK501部分は出土位置を計測した。この他については、集中部より東側、西側、段落ち際のSK506に区切り、それぞれ一括して取り上げている。後者の遺物は集中部を介して接合するものもあるが、取り上げた区切りを生かして示す。以下晩期以外と特徴的な土器、各まとまり、石器の順で示す。

Fig.86 1301、1302は轟B式土器である。1301は丸みのある突窓を5条貼付する。内面は荒れ気味だがなで調整である。1302の外面は横方向に調整具より細く低い隆起線を描き、その上に縦に直交する細

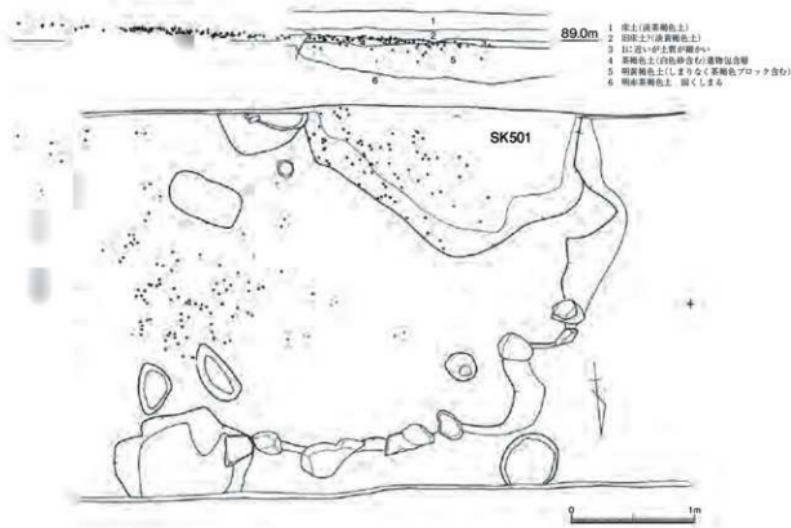


Fig. 85 3地点縄文時代遺物集中部実測図 (1/40)

隆起線を4条貼付する。内面は横方向の2枚貝条痕である。1303は内外面に2枚貝条痕文が明瞭に残る。1304は低くシャープな三角突帯下に波状の平行沈線を描く。1305は外面に平行する山形の波状文を描く曾煙式土器で胎土に滑石を含む。1306は内湾する口縁部の口唇部を棒状工具で刻み、外面に刺突を連続した沈線を描く。1307は口唇部を先が割れた工具で刺突状に刻む。1308は口唇部には2枚貝の腹縁の押圧によるものか深い刻みを密に施し、断面T字状を呈する。口縁直下にはヘラ状工具による短い刻目状沈線を密に施し、その下には斜め弧状の細隆起線を貼付し、低い貼付帯には列点を施す。細隆起線の右にはその弧に沿って先が割れた工具で連続する短い沈線を重ねる。その沈線は上から下に描くが下から順に重ねている。内面は条痕の後なので。中期末のものか。1309は細隆起線、短い連続沈線が1308と共通する。1320は内湾気味の口縁外間に横沈線の後に細いヘラ引き沈線による文様を描く。内面は条痕である。

中央集中部 (Fig. 87~89) 番号を付けて取り上げたのは121点である。1311から1328は粗製の深鉢、鉢である。全体に明るい茶色のものが多い。1-II、2地点と比べて大きめの砂粒を胎土に多く含むものが多い。接合は近い範囲でつき離れたもので1mである。1311は外面を荒い擦過調整で口縁部下は削り状擦過で口縁帶風に仕上げる。内面は削り状で口縁部は後になで、肩部には指押さえが残る。砂粒を非常に多く含む。1/6からの復元口径32cmを測る。1312は外面横方向なので仕上げで、内面は削り状の擦過の後なので。1/6からの復元口径40cmを測る。同一個体片が多い。1313は外面口縁部に横方向、胴部を斜め方向の2枚貝条痕調整を施し、内面は横方向に強い横なでを施す。1/6からの復元口径27.6cmを測る。1314は外面条痕、内面は口縁部を横なで、胴部は削りを施す。口縁内面直下に1条のヘラ引き沈線がめぐる。1/8からの復元口径26.8cmを測る。1315は外面は縱方向の荒い擦過の後な

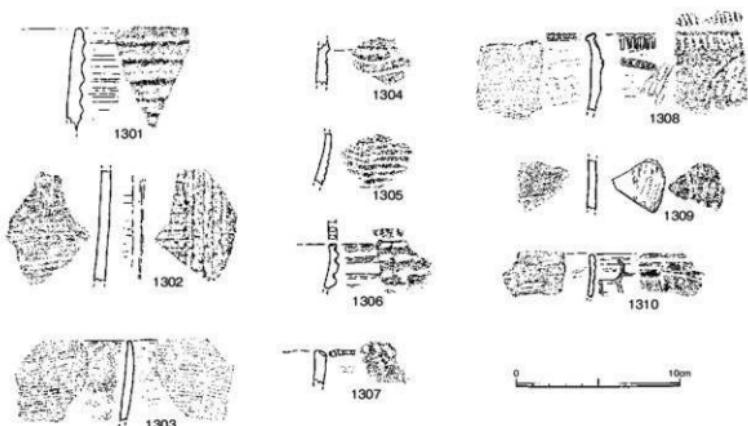


Fig.86 3地点出土縄文土器実測図1 (1/3)

で、内面は固い板状の工具での擦痕を横方向に施す。下部は接合しない同一個体で復元した。1/5からの復元口径15cmを測る。砂粒が少なめで胎土が細かい。1316は外面擦過の後などで、内面口縁部は横なで、中位から下はヘラ状工具によるなでを施す。1/8からの復元口径17.4cmを測る。1317は外面横方向の削りの後、上部は横なで、下部は縦方向のヘラなでで、内面は著しく荒れるが横方向のヘラなでがみられる。1318は外面横方向の荒い擦過、内面ヘラなでで仕上げる。以下外面は条痕、削り状、内面はヘラなで、なで調整である。1324、1325は1/4ほどからの復元だが傾きは不確かである。1329から1336は研磨調整の精製品である。器壁に砂粒が目立つ。1329は口縁部は断面球状で直下は内面を段、外面は沈線で画す。外面は粗めの研磨で体部に削り状の痕跡が残る。外面は黒色で光沢があり肩部には帯状に炭化物が付着する。内面は淡茶褐色を呈す。1/6からの復元口径38cmを測る。1330は屈曲して立ち上がる口縁部外面に細い沈線状の線を描くが、曲がり途切れ、時に幅広、複数になり、非常に雑である。外面の研磨はやや荒く、内面はやや丁寧。内面頭部に白色の付着物がある。1/6からの復元だが径は不確か。同一個体片が多い。1337、1338は粗製土器の底部で1/4、1/3からの復元である。
SK501 (Fig.85, 90) 先にふれたが、Fig.85、4層と5層上部で遺物が出土した。5層で深く入っている遺物は石器である。位置を記録して取り上げた点数は87点で小さな破片が多い。1339から1344は粗製土器である。外面に削りまたは削り状の調整を施す。内面は1339が研磨、1341、1342、1343は条痕、他はなでである。1345は口縁部を屈曲し口縁部を作り外面に沈線がめぐる。内外面の研磨が丁寧で器面に光沢がある。口縁下に2箇所焼成後の穿孔を施す。1346は口縁部が小振りで、焼成後の穿孔がある。1349は断面三角の突起がめぐる。なで調整で橙色を呈す。
SK506 (Fig.90) 中世の遺物もまじる段落ち際の出土で縄文時代の包含層ではない。1350から1353は粗製土器である。1350は口縁部が軽く波打つ。口縁部内側に研磨状に縁取りがあり意識的なものと思われる。外面削り、内面条痕で口縁部は横なでである。1357は一部の破片のみがSK506出土。灰茶褐色を呈し全体に薄手である。外面に炭化物が付着する。1355はなでで精製器種としては荒い調整で

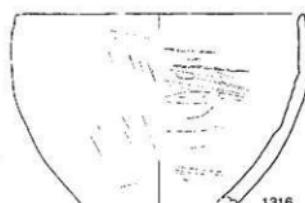
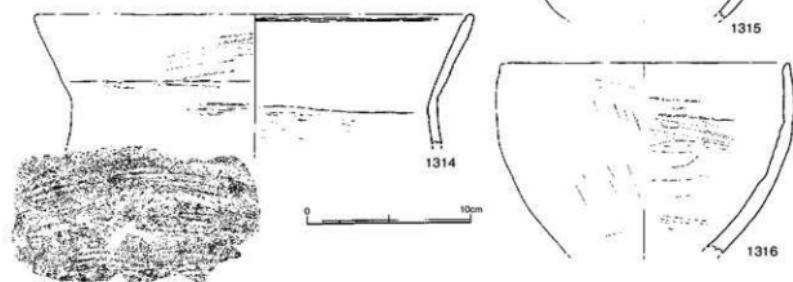
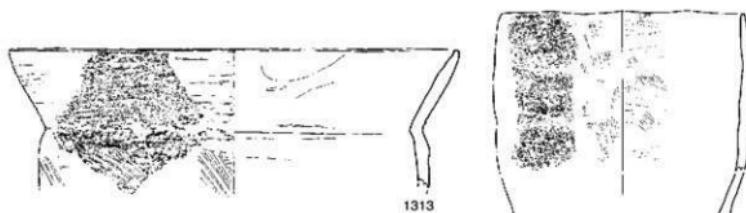
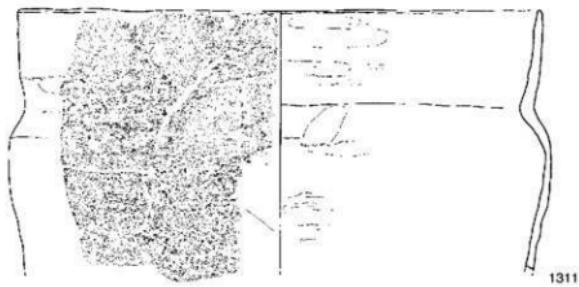


Fig87 3地点出土繩文土器実測図2 (1/3)

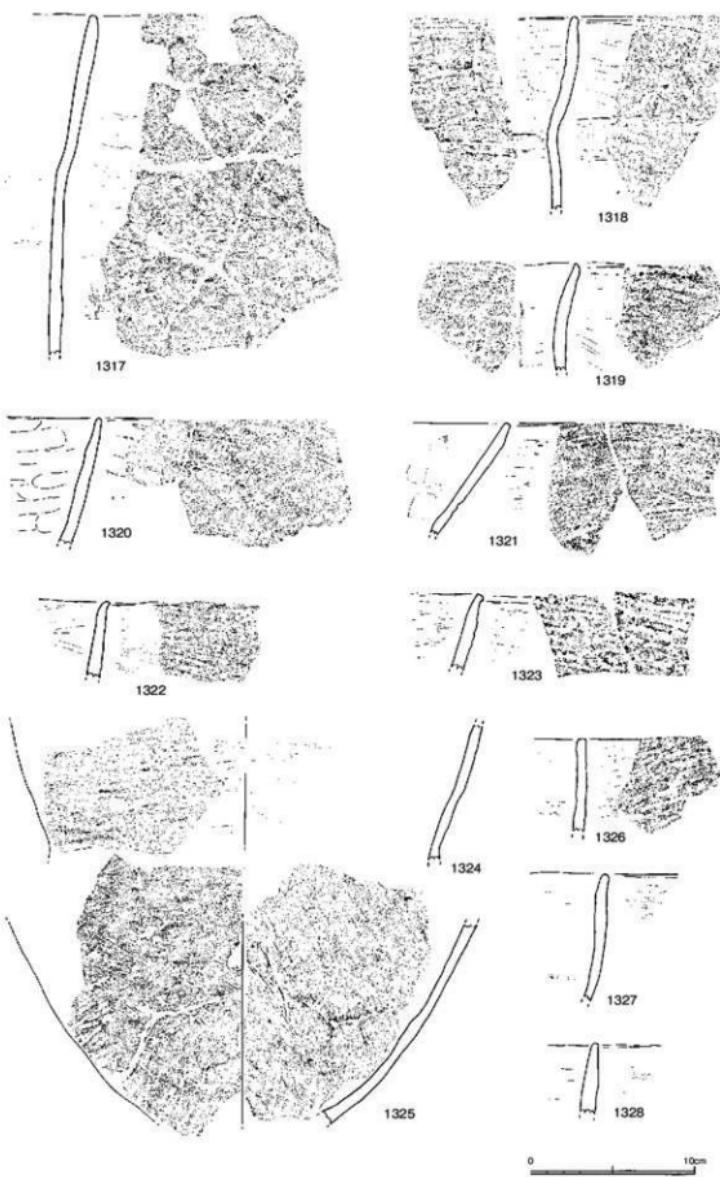


Fig.88 3地点出土繩文土器実測図3 (1/3)

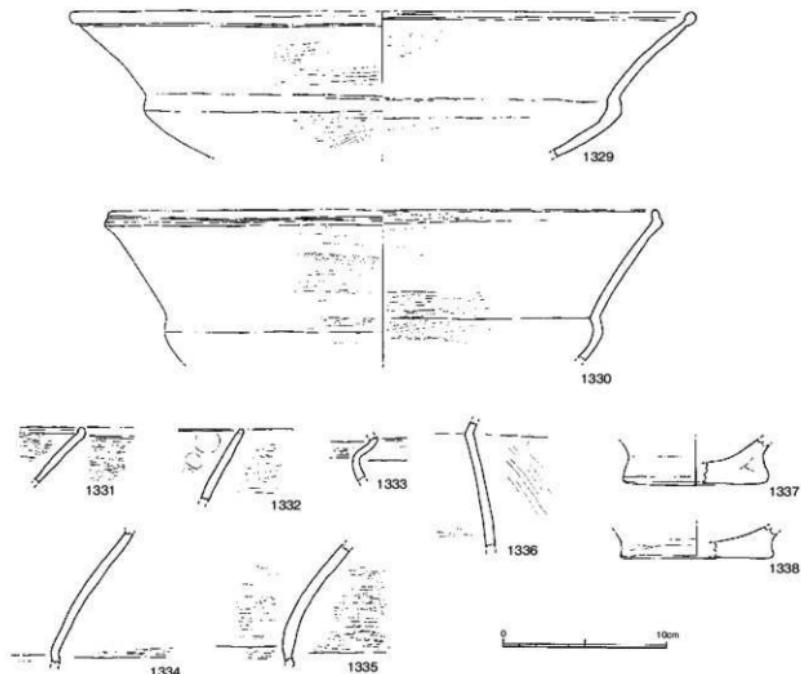


Fig.89 3地点出土縄文土器実測図4 (1/3)

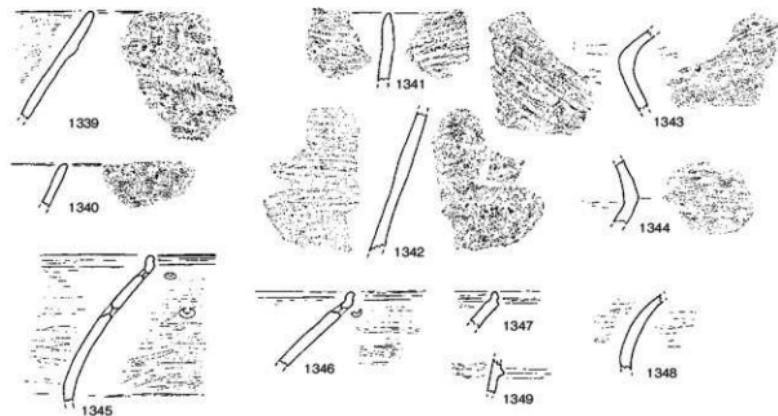
ある。1356はなで調整で内面にわずかに顔料状の橙色部が見える。

西側 (Fig.90) 集中部に近く接合するものもいくつかあった。1359から1365までが粗製土器である。1359、1361は外面条痕、1360、1362は削りである。1363は外面を荒くなめ、4条のヘラ描き沈線を描くが不揃いである。器面は橙色を呈す。1365から1375は研磨調整の精製土器である。1370は外面の沈線にあわせて圓化したが、うちにすばむ傾きになる可能性もある。1374は丁寧な研磨を施し明るい橙色を呈す。1375は焼成後の穿孔を施す。傾きは不確かである。

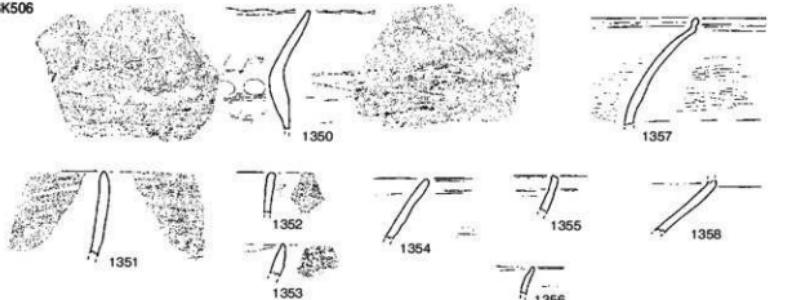
東側 (Fig.91、92) 広い範囲で出土した。集中部に比べて一括性が低い。1376から1389は粗製土器である。外面は条痕調整が多い。1377は器壁が厚い。疑似口縁の可能性がある。1382は口縁部を欠くが口縁帯状になると思われる。破面までは沈線はない。1383は外面貝殻条痕が明瞭に残り煤が付着する。内面はヘラ状工具によるなで明るい橙色を呈す。1389はなで調整で外面に斜方向の平行沈線があるが調整痕とも考えられる。1390から1405は研磨調整の精製土器である。1390は外面灰褐色、内面は黒褐色で光沢がある。1405は薄い器壁に丁寧な研磨調整で光沢があり、丸みを帯びた突帯を付す。

1406は外面に突帯を付す。傾きは不明。外面は斜め方向の条痕の後などで、内面に条痕が残る。轟B式か。1407から1415は粗製土器の底部で小振りの台形底になる。1407は底に繊維状の削りと種子状の圧痕が

SK501



SK506



西侧

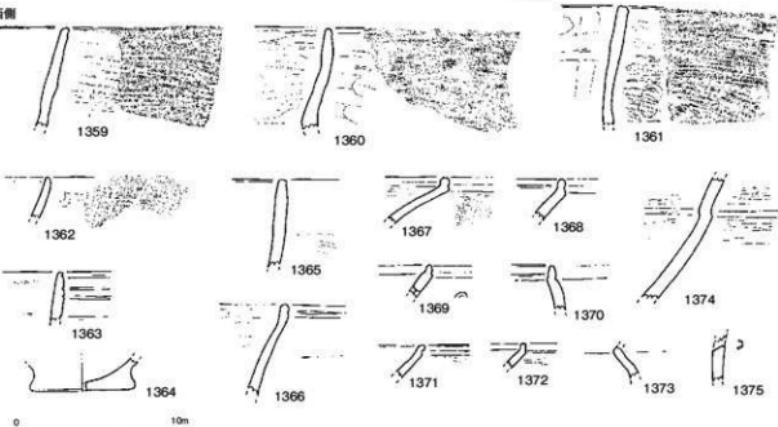


Fig.90 3地点出土绳文土器実測図 5 (1/3)

東側

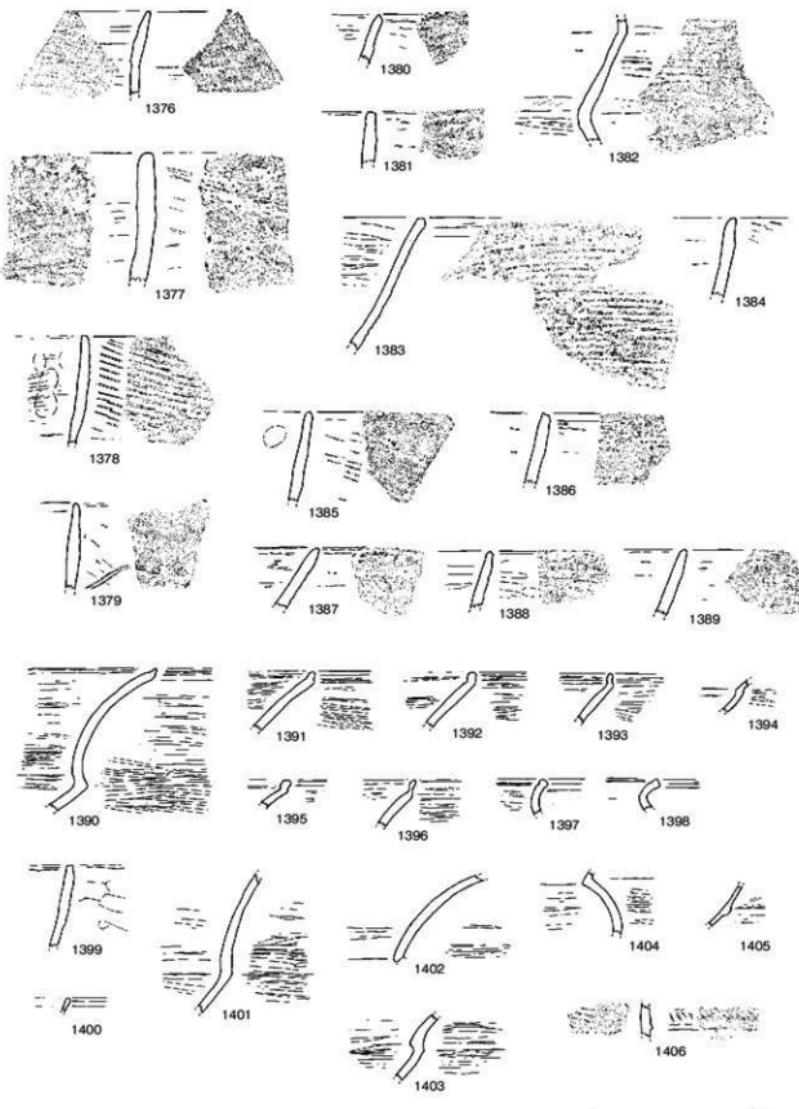


Fig.91 3地点出土繩文土器実測図 6 (1/3)

東側

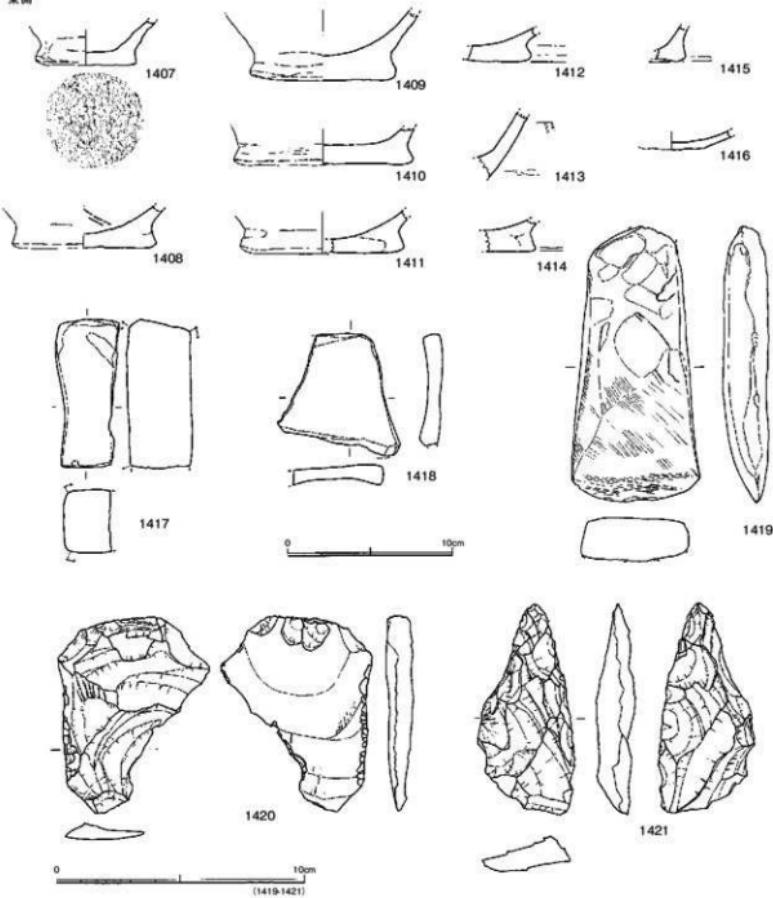


Fig 92-3 地点出土繩文土器・石器実測図 (1/3, 1/2)

見られる。1416は外面の底は粘土が剥げたように円形にくぼむ。内外面とも鉄分がおおう。外面はなで、内面は丁寧なで調整である。

石器 (Fig.92, 93) 出土地を問わず一括して示す。1417、1418は砾石である。1417はSK506出土で白色の器面で黒色の鉱物がみられる。風化した安山岩か。2面を使用する。1418は砂岩製で顯著な擦痕はみられない。表裏でカーブの方向が異なる。東側出土。1419は頁岩製の磨製石斧で刃部がバチ形に開く。側面は面取りし基部に斜めに面を作る。全体に斜方向の擦痕が見られ、刃部は横方向の擦痕が斜方向を切る。裏面は敲打、研磨ともみられず未調整である。長さ11.1cm、幅5.2cm、厚さ1.8cmを測る。

1420、1421は安山岩製の削器である。1420は縦長剥片の2側片に微細剥離が見られる。1421は鉛状

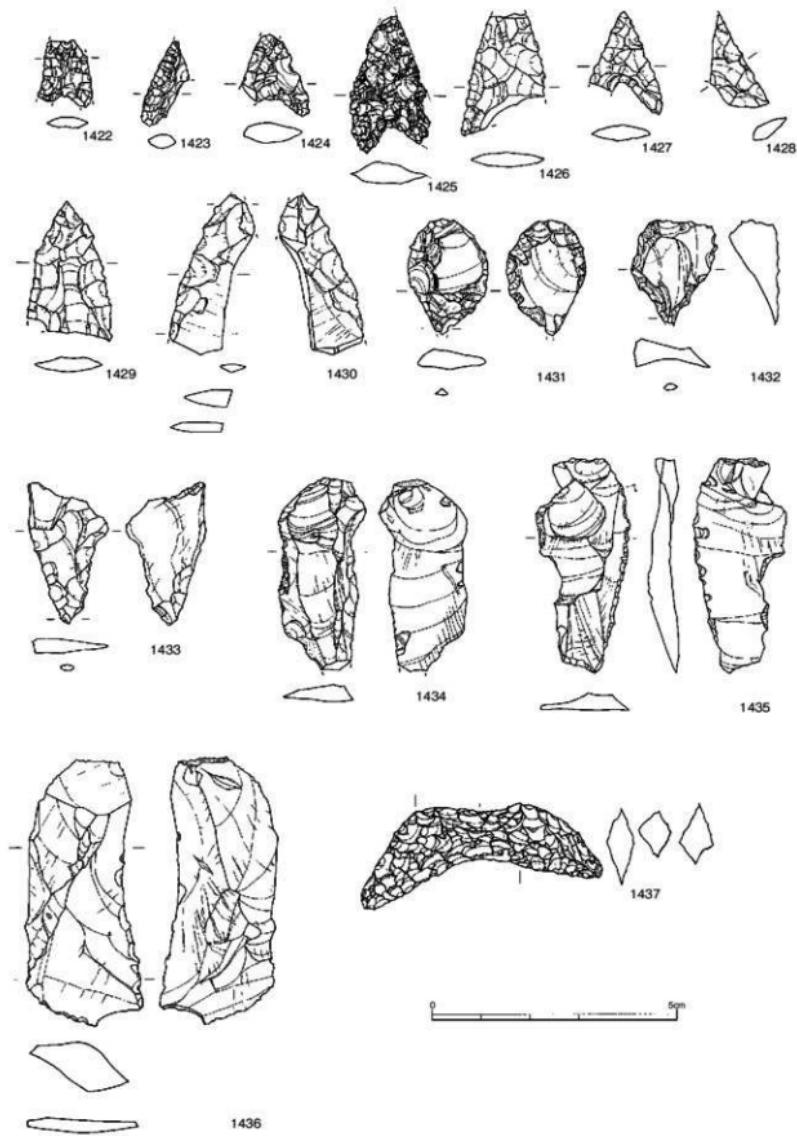


Fig93 3地点出土石器実測図 (1/1)

に両側面からの剥離を施す。西側出土。1422から1425は黒曜石製、1426から1430は安山岩製の石錐である。1425、1426がSK501出土、1428、1430が西側からでは特定できない。1430は錐の可能性もある。1431、1432は黒曜石、1433は安山岩で錐である。1431は基部まで剥離を施し成形する。1432は東側の出土。1434と1435は黒曜石、1436は安山岩の縦長剥片で使用によると考えられる微細剥離が側片に見られる。1436は東側の出土である。1437は安山岩製のいわゆる異形石器である。細かな剥離を表裏全面に施している。

9. 小結

今回の調査では旧石器時代から中世後半期の遺構・遺物を検出した。そのなかでも縄文時代前期・晩期と15世紀代に遺跡のまとまりがあった。以下時期毎の特徴にふれておきたい。

中世 これまでの脇山A遺跡などの調査と同様に12世紀から15世紀の遺構・遺物を確認した。1-II 地点では龍泉窯系青磁など12世紀の遺物が土坑から出土するが量は少なく遺構としてのまとまりがとらえ難い。集落としても小規模なものであろう。周辺では脇山A遺跡5次C地点（市報312集）で12～13世紀の建物が単独で出土しており類似した様相と言えよう。また時期ははっきりしないが、これまでと同様に耕地開発に伴うと考えられている焼土坑が調査区の各地点で出土している。これに対して第2地点では集中するピット群が出土し、東西約10m、南北18m以上の方形にまとまりを持つことが想定できる。建物は1棟のみを復元したが、南北方向に軸を持つ建物が繰り返し建てられた屋敷地と考えられる。遺物は特に土鍋が多く出土し目立つ。口縁部に三角突帯がめぐる佐賀・筑後方面に多い形態が半数以上を占め、博多湾岸の平野部とは異なる様相を示す。板屋根を越えて肥前からもたらされたと考えられる。時期はこれらの遺物から15世紀を中心とする時期が想定され、周辺では脇山A遺跡7次C地点（市報386集）の屋敷地の様相と近い。またこの地は、文献から長禄四（1460）年には窟名に比定され、隣接する椎原川沿いにはその屋敷地が比定されている（吉良1988、市報269ほか）。さらに15世紀代前後の小領主層の出現による在地構造の変化などが指摘されており、調査の時期と重なり興味深い。今後、慎重な検討を要する課題である。

古墳・弥生時代 古墳時代の遺物が少量であるが各地点で見られた。1-I で布留系壺片、1-II ではSK023で後期の甕、包含層で須恵器、1-III で器台状や甕、1-V の布留系甕、2地点の甕などで、これまでの印象よりも多彩である。弥生時代は板付II式と鉢先口縁の甕が1-II 地点、刻目突帯文土器（1260）が2地点でそれぞれ1点ずつ出土し活動の痕跡を知ることができる。

縄文時代 各地点で縄文土器は出土し、未掘部分でも試掘で事業地の北東側に遺物を確認している。
(土器) 1-II、2、3地点で縄文時代の遺物がまとまって出土した。3地点とも前期と晩期が出土し量的に黒川式を主体としているが、少しずつ時期差がある。1-II 地点は脇山地区で最も多くの縄文時代の遺物が出土した。晩期は古閑式の新しい段階から黒川式の新段階までと時期幅があるが黒川式を主体とする。前期では轟A式からやや古手の轟B土器が出土し、その間の時期に設定された西之瀬式（柴畠2002）の存在は注目される。Fig.94に1-II 地点でドットで取り上げた遺物の全体(左)と前期土器(右)の出土位置を示した。前期土器には器面調整で推定した小片も含んでいる。その分布は粗ではあるが調査グリッドの全域に広がっており、出土状況から遺物の時期を分ける事はできない。2地点では小片が多い。晩期は古閑式が目立ち、前期は曾畠式を少量と、丸みのある突帯を持つ轟B式の新段階のものが出土している。3地点では晩期は古閑式の新段階から黒川式で、前期は轟B式などが若干見られる。

(石器) 表2に出土石器の器種組成を示した。剥片石器は黒曜石と安山岩が大半を占め、1-II 地点では

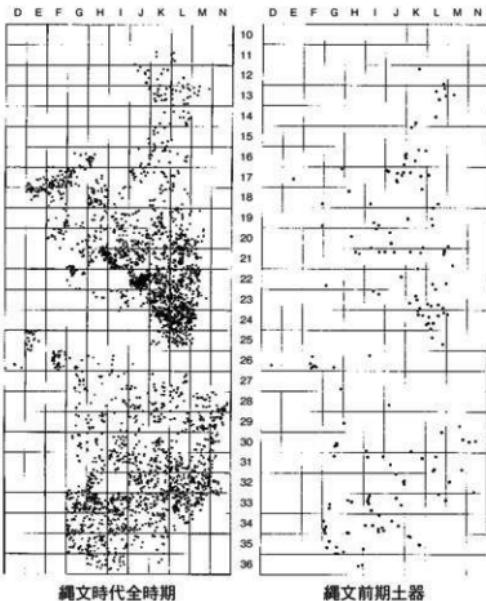


Fig.94 1-II 地点包含層遺物分布

小片まで含めると4000点が出土した。表には表れていないが、チャートと考えられる乳灰色の非黒曜石系石材4点を確認している。黒曜石では灰白色から白色を呈するものが少量あり、福岡市埋蔵文化財センターでの測定の結果、姫島産および椎葉川産に推定されるという分析結果を得ることができ附編に掲載している。姫島産は11点すべてと分析を行っていない石錐1点が1-II地点出土で、椎葉川産は16点中4点が1-II地点、11点が2地点、1点が3地点である。姫島産は1-II地点に、椎葉川産は2地点に多い。姫島産は1-II地点では黒曜石片の0.5%ほどの割合であるが、2地点での椎葉川産は6%を占める。黒曜石の多くは自然面等から腰岳産と考えられ、円碟の表皮を残す牟田産と考えられるものもあるが少ない。風化、不純物、色調などにも違いがみられる。安山岩にもバリエーションが見られる。

また、黒曜石と安山岩の割合は、1-II地点では、削器などの安山岩に多い器種を除いてほぼ同じ割合である。2、3地点では黒曜石が順に66%、83%を占める。早良平野部では黒曜石の割合が高く（吉留1993）、晩期前半の重留遺跡ではほとんどを黒曜石が占める状況からすると、野中遺跡では安山岩の割合が高い。1-II地点は、より晩期の石器組成を示すと考えられる遺構出土の石器でも黒曜石が6割とやや多めである。安山岩の割合が高い背振南麓の影響が要因の一つとしてあげられよう（山崎2012）。

器種構成では石錐が特に多い。形態の分類を行っていないが、三角形の大きな抉りが入る形態が目立つ。また平基のものに不純物が多い感がある。石匙は縦型、横型、三角形の各種がある。縦型は大型で剥片につまみ部を形成しただけの比較的簡単なものとその側辺に加工を施したものがある。安山岩製の削器は手に納まり易い大きさ、形状のものが典型的である。ただし数量的には小片が多く形状

表2. 石器組成

	石斧	石椎	石鋸・石鎌	石刀	石錐	石器	石器	石器	石器	石器	UF	コア	剥片・鉋片	合計	石器	#8-86
SK038	1												16	14	16	15
SK039	2												21	20	23	20
SK041		3											23	18	23	21
SK042	2												28	10	30	10
SK060	2	4									2	1	22	5	27	10
SK063							1						3	4	0	
SK064	1											1	3	1	5	1
SK065	1	1										2	6	7	9	8
SK066	4	2			2	1	4					1	37	41	43	49
SK069	4	2			1		2	3			1	2	1	65	38	74
SK070			1					1					11	11	2	
SK072	1						1					2	3	3	6	4
SK073							1				1		2	10	11	4
SK074													3	2	3	2
SK075													2	0	2	
遺構合計	17	13	0	1	0	0	0	1	2	1	3	10	0	0	0	269
KL23:24	3	8					1				6		3	5	129	113
グリッド	75	60	1	1	1	2	2	1	3	24	2	1	25	5	44	23
地遣場	11	7					1		1	5		1	2	5	4	166
櫛出面	31	54	1		5	1	1	3	34		6	4	2	17	14	31
I-II合計	137	142	0	3	1	1	7	2	6	3	10	79	2	0	8	10
												1	2	57	23	89
												16	4	18	4	1
剥片石器													2	3	3	3
I-II地點	1												2	1	3	0
I-IV地點													9	1	9	1
I-V地點																
28点	7	4				1	1	2				9	10	2	162	88
38点	4	4				2	2	1	2			1	7	2	19	315
												39	59	348	70	1

剥片石器は各種毎に左側が黒曜石、右側が安山岩、他にチャート製の石器2点、船石器などの石器がある。他遺構は縄文時代以外の遺構出土。

が不明なものが多い。そのなかで2辺に調整加工を施したものが一定量見られる。素材・未製品としたものは石鎌より一回り大きくわずかに加工が見られるものをまとめた。一部石鎌と認定したものもある。いずれにしても、各地点とも前期と晩期の土器が混在しており、石器の時期は特定し難い。

また、礫石器は確認できたものは少ない。石斧は8点出土しているが全て磨製石斧で打製石斧は出土していない。この状況は脇山A遺跡5次調査(『脇山IV』)などでも同様である。

旧石器時代 I-II 地点で細石核が1点出土した。脇山地区では脇山A遺跡に続く2例目である。

以上主に事実関係を報告した。これまで脇山地区では圃場整備に伴い広範囲の調査を実施し、あらかたの遺跡概要を知ることができる地域となった。今後は資料の評価を深め、この地域の歴史を組み立てていく必要がある。また圃場整備では、盛土により遺跡を保存した箇所が多い。今後の保存にも留意していく必要がある。

参考文献

- 吉良国光 1988 「背振山の所領支配と村落」『九州史学』第88・89・90号
- 吉良国光 1968 「中世における水利・耕地の開発・村落の形成」『九州史学』第120号
- 桑畠光博 2002 「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』第41巻第4号
- 山崎真治 2012 「背振南麓における縄文時代後晩期剥片石器群の研究」『古文化論叢』第68集
- 吉留秀敏 1993 「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価」『古文化論叢』30集(上)
- 「入部X II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第925集 2007
- 『脇山I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 1990
- 『脇山II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 1991
- 『脇山III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集 1992
- 『脇山IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 1992
- 『脇山V』福岡市埋蔵文化財調査報告書第344集 1993
- 『脇山VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第386集 1994
- 『小笠木』福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集 1995
- 福岡市埋蔵文化財年報VOL.19-2004年度版 2006

野中遺跡出土の灰色～乳白色黒曜石について

福岡市埋蔵文化財センター 田上 勇一郎

野中遺跡からは剥片石器の素材として利用された黒曜石や安山岩の剥片・碎片が多数出土している。その中に少数であるが、灰色～乳白色の黒曜石が認められた。灰色～乳白色の黒曜石は大分県姫島産の黒曜石が古くから知られており、肉眼観察から西北九州産の黒色黒曜石との分別がなされてきた。しかしながら、近年では佐賀県嬉野市の椎葉川にも灰色～乳白色の黒曜石が認められることがわかっている¹⁾、乳白色であれば姫島産であるとは言い切れなくなっている。そこで今回蛍光X線による化学組成の分析からその産地を推定することとした。

装置は福岡市埋蔵文化財センター設置のエダックス社製Eagle μ probeで、対陰極:モリブデン(Mo)、検出器:半導体検出器、印加電圧40kV、電流215～505μA、測定雰囲気真空、測定範囲0.3mm ϕ 、測定時間120秒である。分析元素は主成分元素であるNa、Mg、Al、Si、K、Ca、Ti、Feを対象とし、この8元素の酸化物の和を100とする重量濃度比を求めた。定量計算は標準試料なしのファンダメンタル・パラメータ法による。

まず、産地である姫島産の黒曜石(16点)と椎葉川産の黒曜石(20点)の化学組成を求めた。測定部分は原石を割った新鮮な面とした。結果を表1に示す。CaOの値が姫島産が0.54～0.69%であるのに対し、椎葉川産では1.07～1.30%と違いが見られるほか、Al₂O₃、K₂O、TiO₂などにも差異があり、化学組成の上から両者は分離できる。

次に、野中遺跡出土黒曜石の化学組成を求めた。資料を洗浄したのみの非破壊分析である。結果を表2に示す。29点分析したが、5と8は黒曜石ではなかったので除外した。CaOに着目すると0.60～0.72%と1.22～1.55%の2グループに分離できそうである。

さらに姫島産・椎葉川産・野中遺跡出土黒曜石の8元素の数値からクラスター分析をおこなった。データの数値は標準化し、平均ユークリッド距離係数でWard法によりクラスター化した。多変量解析ソフトは小椋将弘「Excelで簡単多変量解析」付録の『三毛猫』を用いた²⁾。得られたデンドログラムを1図に示す。1、2、4、11～15、17～19の11点が姫島産に、3、6、7、9、10、16、20～29の16点が椎葉川産に類似するという結果となった。ただし、遺跡出土黒曜石と原産地黒曜石の類似度はそれほど高くなく、遺跡出土黒曜石の表面に風化の影響があるものと思われる。

市内では数が少ないながらも乳白色の黒曜石が出土する。しかしながら化学的な産地推定をおこなったものは早良区西新町遺跡18次調査の石鎚1点³⁾と西区浦江遺跡5次調査(3区)で出土した剥片4点⁴⁾でいずれも姫島産であった。今回の分析で、背振山を越えて椎葉川産黒曜石が流通していたことが判明した。これまで姫島産とされていた黒曜石も見直す必要があるかもしれない。

1) 橋原慎二 1990 「佐賀県椎葉川の黒曜石原産地」『地域相研究』第19号

2) 小椋将弘 2006 「Excelで簡単多変量解析」講談社

3) 高橋豊氏の分析による。「西新町遺跡9」福岡市教育委員会2007

4) 角綱 進 2005 「浦江遺跡3区出土黒曜石の蛍光X線分析による産地同定」『金武2』福岡市教育委員会

表1 深度地質層岩石の分析値

	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO _(T) (wt%)
海底21	3.84	0.96	15.98	73.55	4.05	0.54	0.05	1.14
海底22	3.91	0.68	16.15	73.62	3.94	4.74	0.09	1.12
海底23	3.49	0.68	16.38	73.74	4.14	6.09	0.08	1.25
海底24	3.47	0.45	16.45	73.52	5.05	5.99	0.07	1.16
海底25	4.05	0.51	16.17	74.13	5.05	5.98	0.05	1.18
海底26	3.54	0.53	15.94	74.09	4.05	6.02	0.04	1.18
海底27	3.12	0.27	15.99	74.42	3.81	5.54	0.06	1.19
海底28	3.83	0.61	16.26	73.81	3.75	5.56	0.04	1.14
海底29	3.88	0.47	16.02	74.09	3.78	6.03	0.06	1.10
海底30	3.53	0.55	16.05	73.55	3.55	5.55	0.05	1.13
海底31	3.89	0.69	16.25	73.53	3.82	5.56	0.04	1.13
海底32	3.75	0.48	16.24	73.79	3.87	5.56	0.05	1.14
海底33	4.10	0.55	15.99	74.36	4.09	5.57	0.04	1.16
海底34	2.70	0.59	16.22	74.20	4.29	5.67	0.05	1.28
海底35	3.76	0.42	16.50	73.26	4.05	5.06	0.04	1.16
海底36	3.52	0.55	16.03	73.71	3.59	5.56	0.05	1.11

表2 野中島出土壤岩石の分析値

	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO _(T) (wt%)
野中島01	4.45	0.69	15.98	73.33	4.11	1.14	0.08	1.12
野中島02	4.19	0.24	17.02	71.94	4.32	1.24	0.10	1.07
野中島03	5.47	0.54	15.84	72.44	4.32	1.24	0.11	1.05
野中島04	3.20	1.02	15.13	72.66	4.27	1.07	0.10	1.15
野中島05	4.09	0.54	15.14	73.34	4.41	1.15	0.12	1.21
野中島06	3.28	0.81	15.73	74.36	4.13	1.20	0.10	1.16
野中島07	3.79	0.54	15.39	73.55	4.29	1.23	0.10	1.20
野中島08	3.12	0.65	15.50	73.65	4.18	1.20	0.09	1.14
野中島09	3.40	0.49	15.53	73.49	4.15	1.19	0.10	1.14
野中島10	3.95	0.78	15.54	73.49	4.15	1.19	0.10	1.14
野中島11	3.34	0.55	15.54	73.17	4.23	1.11	0.10	1.16
野中島12	3.34	0.59	15.47	73.27	4.25	1.20	0.10	1.16
野中島13	3.74	0.62	15.48	73.27	4.49	1.24	0.10	1.24
野中島14	3.34	0.55	15.54	73.78	4.12	1.15	0.07	1.16
野中島15	3.27	0.61	15.84	73.38	4.27	1.12	0.11	1.16
野中島16	3.74	0.46	15.64	74.18	4.21	1.12	0.11	1.16
野中島17	3.42	0.34	15.64	73.56	4.01	1.17	0.10	1.14
野中島18	3.52	0.39	15.56	74.09	4.19	1.19	0.10	1.14
野中島19	3.05	0.55	15.19	73.47	3.29	1.20	0.09	1.11
野中島20	3.55	0.65	15.19	73.60	4.05	1.15	0.11	1.11
野中島21	3.54	0.70	15.38	73.60	4.24	1.18	0.10	1.17

表3 土壤出土壤岩石の分析値

	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO _(T) (wt%)
野中島01	4.67	0.35	14.89	73.56	4.65	0.84	0.04	1.61
野中島02	3.37	1.42	16.03	70.66	4.73	1.39	0.12	1.68
野中島03	4.37	0.42	16.03	71.80	4.25	0.87	0.07	1.62
野中島04	1.60	18.49	73.77	72.73	4.60	0.05	1.67	16.60
野中島05	3.83	0.49	15.82	73.17	4.58	1.22	0.27	1.65
野中島06	3.00	0.77	15.49	73.78	4.49	1.45	0.14	1.65
野中島07	3.15	0.33	15.63	72.88	4.78	1.46	0.11	1.66
野中島08	4.08	0.00	14.91	73.61	4.87	1.41	0.13	1.66
野中島09	3.34	1.01	16.02	72.44	4.68	0.70	0.07	1.64
野中島10	3.04	1.23	16.02	71.18	4.35	0.69	0.12	1.77
野中島11	3.24	0.41	15.82	72.25	4.43	1.41	0.11	1.66
野中島12	3.15	0.20	15.83	74.50	4.56	0.72	0.09	1.62
野中島13	2.96	0.61	15.24	74.28	4.53	0.60	0.07	1.72
野中島14	3.49	0.33	15.40	72.84	4.70	1.20	0.12	1.77
野中島15	2.49	0.91	15.18	73.91	4.60	0.64	0.06	1.63
野中島16	3.29	0.29	15.45	72.55	4.52	0.65	0.07	1.63
野中島17	3.20	0.45	15.82	70.95	4.48	0.66	0.05	1.63
野中島18	4.70	1.09	14.44	71.80	4.65	0.66	0.05	1.73
野中島19	2.59	0.96	15.74	72.89	5.00	1.54	0.15	1.73
野中島20	3.24	0.87	15.42	72.65	5.02	1.41	0.11	1.72
野中島21	3.04	0.44	15.42	72.65	5.02	1.41	0.11	1.68
野中島22	3.24	0.64	15.44	72.59	5.02	1.41	0.11	1.68
野中島23	3.24	0.65	15.45	72.59	5.02	1.41	0.11	1.68
野中島24	3.24	0.65	15.45	72.59	5.02	1.41	0.11	1.68
野中島25	2.37	0.71	14.29	74.50	4.96	1.50	0.12	1.65
野中島26	4.27	0.43	14.47	72.88	4.77	1.43	0.12	1.64
野中島27	2.61	0.93	15.52	73.04	4.71	1.44	0.14	1.61
野中島28	4.40	0.69	14.42	72.46	4.89	1.41	0.13	1.61

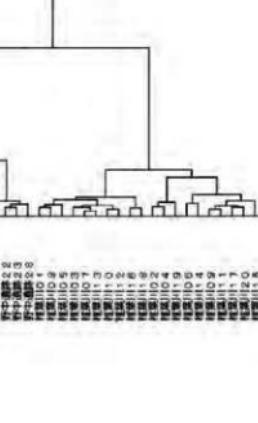


図1 地質層岩石の分析値

図2 野中島出土壤岩石の分析値



表3. I-II地點網上器出土位置 土位置は接合もしくは同一個体破片の出土グリッド。数字のみは横道番号。空欄、上中下は検出面で本文参照。

遺物番号	出土位置	遺物番号	出土位置	遺物番号	出土位置	遺物番号	出土位置	遺物番号	出土位置
381 D22	459 L14	551 I35		630 K33		708 L34			
382 D22	460 Q34	552 L30		631 K29		709 上			
383 D22	461 L19	553 025		632 N28		710 中			
384 E25	462 M24 上	554 L20		633 L17		711 II9			
385 H18	463 I34	555 L33		634 D26		712 G20			
386 T	464 K35, L13	556 H36		635 L31		713 上			
387 J34	465 G32, I33	557 M22		636 L24		714 I-E			
388	466 026, 中	558 J20		637 M28		715 K22			
389 L24	467 K12	559 L21		638 I28		716 J21			
390 K20	468 F30, G30, L31	560 K22		639 中		717 G35			
391 G35	469 J17	561 I25, I35		640 H18		718 K33, L33, 上			
392 J32	470 L19	562		641 K25		719 L28			
393 J36	471 L22	563 023		642 G17		720 L19, L20			
394 J17, 066, 中	472 G19	564 M31		643 M23		721 中			
395 J17, K18	473 I19	565 I23, L22, L24, M30, N29		644 M32		722 K21			
396	474 G33	566 J23		645 I35, 045		723 K19			
397 中	475 K16	567 040		646 N28		724 下			
398 F19	476 I34, J32, 上	568 E25		647 I21		725 M20			
399 026	477 033	569 J20, K22, K24		648 J35		726 023			
400 G34	478 H21	570 SP1002		649 上		727			
401 L33	479	572 N29		650 中		728 L22			
402	480	573 M20		651 H35		729 034			
403	481 中	574		652 T		730			
404 L24	482	575		653 L22		731 034			
405 T	483 J22	576 L24		654 M30		732 L21			
406 K19	484 K23, L24	577 034		655 H33		733 L31			
407 F18	485 L31	578 049		656 M32		734 N32			
408 H34	486 L30, L31	579 L32		657 下		735 034			
409 H36	501 L17, 上, M23	580 K31		658 L33		736 F18			
410 中	502 K34	581 G33		659 31tr		737 K22			
411 054	503 L25	582 N28		660 上		738 I28			
412 J20	504 H30	583 H34		661 H32		739 L33			
413 G34, H18, I34, K35	505 L34	584 I34, K24		662 F18		740 L33, L31, 上			
414	506 H30	585 K33		663 K33		741 G20			
415 J34	507 K28	586 023		664 K22		742 K23			
416 中	508 K22, 中	587		665 X31		743			
417 中	509 G32	588 M8		666 L20		744 L28			
418 G34	510 上	589 中		667 J35		745 K23			
419 066	511 M20	591 J32, K31, K32, L30, L31, L32, K35, N30上		668 F17		746 K22			
420 K21	512 中	592 K30		669 K34, M23		747 G28			
421 J20	513 K22	593 L29		670 L22		748 L22			
422 J33	514 上	593 I34, H33		671 N28		749 E25			
423 J17	515 中	594 K21		672 M29		750 上			
424 J16	516 N30	595 G33, G34		673 I35		751 G33			
425 I28	517 上	596 K30, M31, 上		674 まきなし		752 J23			
426 J12	518 J31, 033	597 G32, G33, L32, M24, 上		675 G33		753 034			
427 I18	519 K22Y	598 L25		676 X35		754 K34			
428 F26	520 G23	599 032		677 G19		755 K32			
429 F20	521 G17	600 047		678 L25		756 M20			
430 I23	522 L20	601 H19		679 L22		757 I34			
431 K17	523 M29, N29	602 K22		680 N28		758 上			
432 中	524 H18	603 20Y		681 L32		759 M31			
433 H34	525 K19	604 M20, 034, 下		682 034		760 N31			
434 J34	526 K33	605 066		683 I31, 上, 中		761			
435 I29	527 034	606 下		684 K30, K31		762 I20			
436 上	528 T	607 047		685 上		763			
437 026, 中	529 J26, K21, K23, M23	608 K27		686 048		764 K22			
438 K16	530 K33	609 M28		687 I33		765 X35			
439 L13	531 K31	610 M18		688 K22		766 K20			
440	532 M92	611 中		689 H32		767 上			
441 L30	533 L28	612 G33		690 X35		768 I34			
442 L23	534 048	613 047		691 上		769 L22			
443 34tr	535 L32	614 H34		692 045		770 050			
444	536 L31, N30, 上	615 K31		693 ト		771 中			
445 L21	537 033	616 J32, G33, G35, 上		694 G34, M28		772 K33			
446 F20	538 K33	617 K20		695 I34		773 M23			
447 I34	539 I34	618 I26, 026, 034		696 中		774 H33			
448 I30	540 I31	619 M31		697 H20		775 J29			
449 I33	541 G19	620 I21		698 J23		776 L32			
450 K31	542 G20	621 034		699 048		777 下			
451 I31	543 J20	622 K31		700 L32		778 G21			
452 I26	544 中	623 G33		701 034		779 F20			
453 上	545	624 G33, K33, L33, L34, 中		702 J21		780 M31			
454 H35	546 L20	625 上		703 L20		781 K24			
455 L25	547 N28	626 中		704 J21		782			
456 G33	548 L22	627 044		705 J23		783 N33			
457 K16	549 G33	628 M20		706 K30		784 J20			
458 042	550 H16	629 M31		707 J21					

表4. 出土石器計測表

遺物番号	出土位置	遺番-番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
1-1 地点									
10	SK011	石削	黒曜石	1.92	1.85	0.53	2.03		
11	SP1001	石削	黒曜石	2.85	2.01	0.32	1.45		
12		石削	黄玉	7.6	5	2.6	131.87		
1-2 地点									
42	K29	SK045	槌石	5.57	6.1	3.77	205.36		
331	G22	SK036	石削	安山岩	2.4	1.65	0.42	1.36	
332	F22	SK039	石削	黒曜石	2.15	1.23	0.32	1	
333	F22	SK039	石削	黒曜石	1.5	1.81	0.31	0.94	
334	E24	SK041	石削	安山岩	2	1.85	0.32	1.37	
335	E24	SK041	石削	安山岩	2.36	3.27	0.86	8.69	
336	E24	SK041	石削	安山岩	2.62	1.25	0.39	1.28	
337		SK042	石削	黒曜石	2.66	1.88	0.45	2.37	
338	G21	SK060	石削	黒曜石	3	1.82	0.42	1.93	
339	G21	SK060	石削	黒曜石	2.38	1.91	0.38	1.62	
340	G21	SK060	石削	安山岩	3.6	2.72	0.85	6.33	
341	G20	SK060	石削	安山岩	2.96	1.32	0.33	1	
342	G21	SK060	石削	安山岩	2.5	1.98	0.56	2.55	
343	G35	SK063	/	黒曜石	2.3	1.33	0.41	1.58	
344	334	SK064	石削	黒曜石	2.52	1.62	0.25	0.7	
345	336	SK065	石削	安山岩	3.1	2	0.47	1.35	
346	336	SK065	石削	黒曜石	2.3	1.23	0.47	1.32	
347	F17	SK066	石削	安山岩	3.52	2.88	0.57	3.47	
348	E16	SK066	石削	黒曜石	2.71	1.7	0.46	1.83	
349	E17	SK066	石削	黒曜石	1.72	1.71	0.45	1.25	
350	E17	SK066	石削	黒曜石	2.16	1.4	0.42	0.79	
351	F17	SK066	石削	安山岩	1.78	1.56	0.39	0.75	
352	F17	SK066	石削	安山岩	2.98	2.1	0.46	1.89	
353	F18	SK066	石削	黒曜石	2.2	2.17	0.46	2.02	
354		SK066	カレー	安山岩	3.9	3.33	1.2	12.87	
356	E18	SK066	石削	黒曜石	2.56	2.11	0.56	2.6	
356	E17	SK066	石削	安山岩	4.23	3.22	0.73	6.61	
357	E17-18	SK066	削器	安山岩	7.9	4.6	2.4	99.84	
358	E18	SK066	削器	安山岩	2.85	2.2	0.7	5.27	
359	E18	SK066	削器	安山岩	3.5	2.9	0.65	6.12	
360	J22	SK069	石削	黒曜石	2.31	1	0.45	1.5	
361	J22	SK069	石削	黒曜石	1.72	1.18	0.26	0.73	
362	J22	SK069	石削	黒曜石	1.6	1.33	0.31	0.69	
363	J22	SK069	石削	安山岩	1.62	1.48	0.28	0.94	
364	J22	SK069	石削	安山岩	2.01	2.26	0.43	2.84	
365	J22	SK069	削器	黒曜石	3.93	1.9	0.6	4.95	
366	J22	SK069	削器	黒曜石	4	1.78	0.56	3.41	
367	J22	SK069	削器	安山岩	9.7	6.3	1.26	104.52	
368	J22	SK069	石削	安山岩	8.7	2.6	0.62	21.08	
369	J21	SK070	削器	安山岩	6.6	3.15	0.92	35.24	
370	J22	SK069	削器	安山岩	8.4	5.9	1.9	74.76	
371	K32	SK072	石削	黒曜石	2.6	1.98	0.4	1.16	
372	M32	R25	石削	黒曜石	4.06	1.68	0.45	3.44	包含層
373	L23		石削	黒曜石	2.76	1.94	0.43	1.95	
374	L24	R136	石削	安山岩	3.1	1.96	0.35	1.46	
375	L24	R49	石削	安山岩	3.52	1.67	0.36	2.01	
376	L24	R13	石削	安山岩	3.37	2.03	0.46	2.2	
377	L24	R135	石削	安山岩	1.92	1.75	0.35	0.7	
378	L25	R71	石削	安山岩	0.96	1.76	0.31	0.76	
379	L25	R70	石削	安山岩	2.16	1.33	0.25	0.79	
380	L23	R73	石削	安山岩	5.65	7.45	1.05	38.19	
785	棒出面		石削	黒曜石	2.2	1.9	0.36	0.87	
786	中段		石削	黒曜石	1.4	1.64	0.25	0.48	
787	第3地点		石削	黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.31	
788	K34	R16	石削	黒曜石	1.75	1.75	0.35	2	
789		SP1004	石削	黒曜石	1.45	1.4	0.27	0.38	灰色
790	M26		石削	黒曜石	1.37	1.5	0.3	0.46	
791	棒出面		石削	黒曜石	1.35	1.35	0.36	0.48	
792	G3		石削	黒曜石	1.42	1.33	0.25	0.36	
793	K20		石削	黒曜石	1.6	1.53	0.34	0.64	
794	K30	R25	石削	黒曜石	2.18	1.21	0.27	0.44	
795	J32	R27	石削	黒曜石	2	1.35	0.26	0.5	
796	中段		石削	黒曜石	2.48	1.7	0.42	1.23	
797	上段		石削	黒曜石	1.78	1.59	0.29	0.64	
798	P29		石削	黒曜石	2.7	1.5	0.43	1.25	
799	北半		石削	黒曜石	2.7	1.28	0.34	1.03	
800	棒出面		石削	黒曜石	2.62	1.82	0.4	1.32	
801	I19	R21	石削	黒曜石	2.91	2.06	0.4	1.36	
802	K31	R28	石削	黒曜石	2.73	1.87	0.47	1.56	
803	K22		石削	黒曜石	2.05	1.09	0.29	1.01	
804	K20	R68	石削	黒曜石	2.56	1.85	0.36	1.26	
遺物番号									
出土位置									
遺番-番号									
器種									
石材									
長(cm)									
幅(cm)									
厚(cm)									
重量(g)									
備考									

遺物番号	出土位置	遺番・品番	器種	石材	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
681 上段		前部	安山岩	8.55	7.82	0.92	57		
682 梁出面		フリーレー	安山岩	14.2	9	3.2	435.29		
683 H35		前石右	黒曜石	2.79	1.76	1.15	5.09		
684 上段		前石右	黒曜石	2.24	0.85	0.22	0.42		
685 梁出面		石左	黒曜石	11.2	6.8	3.97	436.36		
689 H17		石左	前石左	8.6	4	2.09	144.67		
690 梁出面		石左	蛇文岩	6.14	4.44	1.04	47.87		
691 F21		SK040	廢石	9.5	5.13	2.29	156.19		
692 J21付近		SK070	廢石	5.71	4.72	3.63	137.37		
693 J21付近		SK070	廢石	8.76	8.65	4.31	518.78		
694 K23	R106	廢石	黒曜石	7.52	6.17	4.91	306.63		
695 H19	R15	廢石	黒曜石	4.76	4.5	3.41	106.3		
696 J34	R36	起石	花崗岩	4.06	4	2.6	50.6		
697 K20	R16	起石	黒曜石	9.91	8.28	4.36	472.92		
698 K35	R10	起石	花崗岩	9.42	9.09	4.5	603.45		
699 梁出面		廢石	花崗岩	13	12.1	6.4	1394.19		
1. Ⅱ地帯未認定(因縫)									
908 梁出面		石削	黒曜石	3	1.47	0.43	1.21		
2. 地点									
1018 S0306		玉	瑪瑙	1.6	1.8	1.12	5.76		
1273 青孫		石削	黒曜石	2.32	1.69	0.37	1.13		
1274 青孫		石削	黒曜石	2.36	1.22	0.27	0.56		
1275 青孫		石削	黒曜石	2.1	1.4	0.32	0.83		
1276 梁出面		石削	黒曜石	1.59	1.42	0.21	0.53		
1277 梁出面		石削	黒曜石	2.15	2.05	0.6	1.9		
1278 梁出面		石削	黒曜石	2.93	1.32	0.5	1.96		
1279 青孫		石削	黒曜石	2.6	1.36	0.37	1.05		
1280 梁出面		石削	安山岩	2.42	1.42	0.3	0.88		
1281 梁出面		石削	安山岩	3.25	2.6	0.44	2.85		
1282 SK319		石削	安山岩	2.36	1.4	0.32	0.94		
1283 梁出面		石削	安山岩	1.57	2.38	0.26	1.12		
1284 梁出面		石削	安山岩	4.11	2.25	0.68	3.39		
1285 SD350		前削	黒曜石	3.6	2.25	0.83	6.95		
1286 SD350		石削	安山岩	4.13	1.4	0.8	5.32		
1287 梁出面		UF	黒曜石	4.76	2.84	1.1	12.25		
1288 SD350		石削	黒曜石	2.52	2.05	0.77	6.13		
1289 梁出面		石削	鈍狀岩	14.5	4.25	3.22	368.46		
1290 梁出面		石削	鈍狀岩	12.4	4.95	2.85	257.91		
1291 梁出面		石削	鈍狀岩	13.5	6.6	2.7	270.53		
1292 梁出面		砂鉄	砂鉄	9.35	5.7	1.2	61.26		
1293 梁出面		石刀	眞珠	13.6	4.6	126.15	32		
1294 梁出面		鈍石	眞珠	11.7	6.2	6.2	923.46		
3. 地点									
1417 SK506		鈍石	安山岩	9	3.72	4.02	234.62	風化	
1418 東		砂鉄	砂鉄	7.5	7.4	2.02	82.78		
1419 梁出面		石削	眞珠	11.1	5.2	185.16	7.56		
1420 梁出面		石削	安山岩	8	6	1.05	43.74		
1421 西		フリーレー	安山岩	5.86	3.9	1.2	40.05		
1422 梁出面		石削	黒曜石	1.26	1.06	0.24	0.4		
1423 梁出面		石削	黒曜石	1.75	1	0.3	0.4		
1424 SK506		石削	黒曜石	1.67	1.39	0.42	0.64		
1425 SK501/R52		石削	黒曜石	2.83	1.62	0.4	1.69		
1426 SK501/R67		石削	安山岩	2.42	1.7	0.3	1.26		
1427 梁出面		石削	安山岩	2.05	1.5	0.33	0.59		
1428 西		石削	安山岩	2.9	1.2	0.3	0.54		
1429 梁出面		石削	安山岩	2.7	1.73	0.3	1.32		
1430 西		石削	安山岩	3.25	1.16	0.36	1.64		
1431 梁出面		石削	黒曜石	3.32	1.62	0.4	1.59		
1432 東		石削	黒曜石	2.22	1.8	1	1.99		
1433 梁出面		石削	安山岩	2.85	1.62	0.3	1.38		
1434 西		UF	黒曜石	3.92	1.77	0.36	3.1		
1435 梁出面		前削	黒曜石	4.34	1.9	0.4	3.2		
1436 東		UF	安山岩	5.43	2.36	1.05	10.54		
1437 SK501/P21		黄彩	安山岩	2.16	4.95	0.65	5.12		
1. Ⅱ地帯未認定(因縫)									
2001 F26		石削	黒曜石	2.7	2.49	0.65	3		
2002 G20		石削	黒曜石	1.46	1.66	0.31	0.8		
2003 F18/R24		石削	黒曜石	2.1	1.41	0.52	1.12		
2004 H19		石削	黒曜石	1.03	0.74	0.26	0.23		
2005 H20		石削	黒曜石	1.27	1.47	0.3	0.58		
2006 H20		石削	黒曜石	2.19	1.94	0.36	1.08		
2007 H33	R18	石削	黒曜石	2.5	1.68	0.46	1.39		
2008 I23		石削	黒曜石	1.44	1.71	0.36	0.75	風化	
2009 H27	R8	石削	黒曜石	0.97	1.95	0.36	0.81		
2010 I28		石削	黒曜石	2.14	1.7	0.68	2.36		
2011 J17	R8	石削	黒曜石	1.65	2.26	0.5	1.25		
2012 J28		石削	黒曜石	2.25	1.84	0.66	2.01		
2013 J32	R18	石削	黒曜石	2.7	1.77	0.55	2.46		
2014 J32	R33	石削	黒曜石	1.75	1.52	0.36	0.76		
2015 K20		石削	黒曜石	1.27	1.27	0.27	0.36		
2016 K25	R9	石削	黒曜石	1.32	1.3	0.67	0.42	風化	
2017 K28		石削	黒曜石	2.4	2.23	0.54	3.14		
2018 K30		石削	黒曜石	1.32	0.94	0.3	0.31		
2019 K32		石削	黒曜石	1.31	1.58	0.26	0.63		
2020 L16		石削	黒曜石	1.74	1.36	0.36	0.83		
2021 L19	R15	石削	黒曜石	1.93	1.44	0.31	0.89		
2022 L21		石削	黒曜石	1.62	1.43	0.3	0.86		
2023 L21		石削	黒曜石	2.38	1.72	0.36	1.29	風化	
2025 L22		石削	黒曜石	2.55	1.47	0.41	1.22		
2026 L22		石削	黒曜石	2.16	1.86	0.6	2.09		
2027 L26		石削	黒曜石	1.62	1.48	0.22	0.41		
2028 L31		石削	黒曜石	2.08	2.11	0.37	1.75		
2029 M20	R3	石削	黒曜石	3.15	2.1	0.36	1.9		
2030 M21		石削	黒曜石	2.12	1.15	0.4	0.83		
2031 M22	R25	石削	黒曜石	1.81	1.8	0.4	1.45		
2032 M28		石削	黒曜石	1.3	1.6	0.31	0.72		
2033 M30		石削	黒曜石	2.05	1.84	0.42	1.12		
2034 M31		石削	黒曜石	1.46	1.72	0.44	1.77		
2035 M31		石削	黒曜石	1.98	1.34	0.56	1.39		
2036 M32-33		石削	黒曜石	2.01	1.56	0.39	1.29		
2037 M32-33		石削	黒曜石	1.71	1.82	0.32	0.74		
2038 A-3	SK034	石削	黒曜石	1.04	2.03	0.36	0.66		
2039 K29	SK045	削器	黒曜石	1.89	2.1	0.56	2.37		
2040 K29	SK045	石削	黒曜石	1.46	1.81	0.35	0.93		
2041 J32	SK047	石削	黒曜石	3.6	2.28	1.16	6.63	製刀	
2042 H31	SK048	石削	黒曜石	2.19	1.98	0.53	2.49		
2043 H32		石削	黒曜石	1.96	1.41	0.5	0.99		
2044 H32		石削	黒曜石	3.02	1.92	0.86	3.88		
2045 H34		石削	黒曜石	2.72	1.88	0.62	2.66		
2046 H34		石削	黒曜石	2.32	2.31	0.34	1.01		
2047 H34		石削	黒曜石	2.3	1.51	0.37	0.85		
2048 H34		石削	黒曜石	2	1.72	0.46	1.45		
2049 H34		石削	黒曜石	1.71	1.09	0.3	0.44	風化	
2050 H34		石削	黒曜石	2.75	1.91	0.72	3.19		
2051 H34		石削	黒曜石	1.64	1.68	0.41	1.36		
2052 H34		石削	黒曜石	2.71	2.25	0.71	3.66		
2053 H34		石削	黒曜石	2.07	1.92	0.25	0.92	削片	
2054 H34		石削	黒曜石	1.44	1.67	0.37	0.59		
2055 NNA1		石削	黒曜石	1.09	1.45	0.33	0.52		
2056 NNA1		石削	黒曜石	1.37	1.79	0.33	1.53		
2057 NNA1		石削	黒曜石	1.94	1.62	0.36	0.9		
2058 梁出面		石削	黒曜石	1.03	2.07	0.32	0.73		
2059 L30	SK044	石削	黒曜石	1.47	2.21	0.27	0.92		
2060 F17	R12	石削	黒曜石	1.5	0.92	0.28	0.25		
2061 I21	R36	石削	黒曜石	2.18	2.17	0.43	0.94		
2062 J22	R183	石削	黒曜石	1.31	1.23	0.4	0.49		
2063 H21		石削	黒曜石	2.17	1.66	0.49	1.35		
2064 J15	SK028	石削	黒曜石	1.87	1.51	0.54	2.17		
2065 H26		石削	黒曜石	2.83	0.98	0.67	1.62		
2066 H26		石削	黒曜石	2.67	2.3	0.36	3.03		
2067 H26		石削	黒曜石	4.18	2.48	1.12	11.56		
2068 E9		石削	安山岩	2.63	1.45	0.35	1.07		
2069 E9		石削	安山岩	2.4	1.79	0.34	0.98		
2070 G22	R9	石削	安山岩	2.7	1.63	0.36	1.61		
2071 G35		石削	安山岩	2.48	2.86	0.29	1.43		
2074 H19		石削	安山岩	2.3	2.56	0.35	1.42		
2075 H19		石削	安山岩	2.01	1.54	0.44	1.28		
2076 R9		石削	黒曜石	2.04	1.49	0.38	0.95	灰色	
2077 R33		石削	黒曜石	3.84	2.95	0.68	4.26		
2078 R34	R33	石削	黒曜石	2.07	2.29	0.41	2		
2079 R34		石削	黒曜石	1.91	1.85	0.48	1.21		
2080 H30		石削	安山岩	2.93	1.53	0.43	1.68		
2081 H30		石削	安山岩	1.36	2.02	0.38	1.2		
2082 H34	R15	石削	安山岩	1.42	1.5	0.35	0.6		
2083 H34		石削	安山岩	2.07	1.54	0.44	1.28		
2084 H34		石削	黒曜石	2.04	1.49	0.38	0.95	灰色	
2085 H20	R23	石削	黒曜石	2.07	2.29	0.41	2		

遺物番号	出土位置	遺番・品番	器種	石材	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	遺物番号	出土位置	遺番・品番	器種	石材	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
2097 J01 R11	石棚	安山岩	3.4	2.47	0.4	2.16				2173 案出面	石棚	安山岩	1.91	1.69	0.35	0.8			
2098 J02 R26	石棚	安山岩	1.92	1.46	0.27	0.78				2174 案出面	石棚	安山岩	2.49	1.6	0.32	1.03			
2099 J02 R29	石棚	安山岩	2.2	1.99	0.4	1.6				2175 案出面	石棚	安山岩	2.28	1.45	0.24	0.52			
2100 K15 R1	石棚	安山岩	1.85	1.45	0.36	0.74				2176 案出面	石棚	安山岩	2.66	1.57	0.4	1.27			
2101 K18 R1	石棚	安山岩	2.07	1.96	0.25	0.92				2177 案出面	石棚	安山岩	2.79	1.68	0.4	1.62			
2102 K18 R4	石棚	安山岩	2.59	1.46	0.39	1.24				2178 案出面	石棚	安山岩	2.42	2.17	0.42	1.66			
2103 K21	石棚	安山岩	2.9	2.1	0.57	2.26				2179 案出面	石棚	安山岩	2.21	1.48	0.32	0.73			
2104 K22	石棚	安山岩	2.75	1.7	0.57	2.01				2180 案出面	石棚	安山岩	2.25	1.65	0.41	0.8			
2105 K25 R16	石棚	安山岩	2.09	1.75	0.42	1.16				2181 案出面	石棚	安山岩	3	1.8	0.31	1.18			
2106 K26	石棚	安山岩	3.32	2.2	0.35	2.01				2182 案出面	石棚	安山岩	2.6	1.69	0.5	1.56			
2107 K29 R9	石棚	安山岩	2.59	1.87	0.49	2.72				2183 案出面	石棚	安山岩	2.79	2.51	0.55	3.61			
2108 K33	石棚	安山岩	2.86	2.42	0.84	5.93				2184 案出面	石棚	安山岩	1.95	1.39	0.33	0.64			
2109 L14	石棚	安山岩	2.52	1.98	0.61	3.12				2185 案出面	石棚	安山岩	1.75	1.52	0.34	1.04			
2110 L14	石棚	安山岩	2.22	1.11	0.37	0.92				2186 案出面	石棚	安山岩	1.7	1.32	0.32	0.53			
2111 L14	石棚	安山岩	2.24	2.02	0.46	1.79				2187 案出面	石棚	安山岩	2.05	2.56	0.34	0.89			
2112 L20 R52	石棚	安山岩	4	1.78	0.48	2.98				2188 案出面	石棚	安山岩	1.8	1.24	0.33	0.72			
2113 L20	石棚	安山岩	2.55	2.08	0.32	1.12				2189 案出面	石棚	安山岩	1.65	1.5	0.36	1.11			
2114 L21 R2	石棚	安山岩	1.61	1.88	0.37	0.95				2190 中段	袖	安山岩	3.02	2.66	0.77	5.67			
2115 L22	石棚	安山岩	2.9	2.22	0.9	5.61				2191 中段	ノックタ	安山岩	2.55	2.52	0.59	4.25			
2116 L24 R69	石棚	安山岩	2.24	1.87	0.65	1.74				2192 案出面	削痕	安山岩	2.73	1.16	0.5	1.9			
2117 L25	石棚	安山岩	2.1	1.59	0.36	0.77				2193 中段	石棚	安山岩	2.57	2.23	0.51	2.97			
2118 L31 R8	石棚	安山岩	1.61	1.47	0.3	0.52				2194 上段	削痕	安山岩	2.85	2.63	0.6	4.3			
2119 L31 R34	石棚	安山岩	1.76	1.75	0.51	1.61				2196 石	石棚	安山岩	2.6	2.41	0.71	6.68			
2120 L31	石棚	安山岩	2.7	2.18	0.42	2.28				2210 H21	削痕	安山岩	3.12	2.03	0.75	4.83			
2121 L20 R39	石棚	安山岩	3.12	2.43	0.58	3.57				2211 I21 R25	削痕	安山岩	2.65	3.15	0.8	6.77			
2122 L33 R19	石棚	安山岩	1.95	1.28	0.22	0.5				2212 I30	削痕	安山岩	2.22	2.7	0.58	4.4			
2123 M22 R24	石棚	安山岩	2.3	2	0.44	1.4				2213 J13 R13	削痕	安山岩	3.9	1.28	0.63	4.14			
2124 M22 R26	石棚	安山岩	2.29	1.3	0.45	1.23				2214 J19 R4	削痕	安山岩	2.8	2.51	0.53	3.68			
2125 M23	石棚	安山岩	2.48	1.5	0.35	1.51				2215 J31 R18	削痕	安山岩	4.25	3.57	0.67	13.22			
2126 M23	石棚	安山岩	1.5	1.38	0.3	0.61				2216 K22	削痕	安山岩	2.96	2.05	0.98	5.77			
2127 M24 R6	石棚	安山岩	1.7	1.7	0.29	0.66				2217 L21	削痕	安山岩	3.31	2.6	0.71	5.94			
2128 M30	石棚	安山岩	1.72	1.68	0.36	0.63				2218 L22 R2	削痕	安山岩	2.99	2.65	0.65	6.35			
2129 M31	石棚	安山岩	3.62	2.26	0.75	6.89				2219 L22	削痕	安山岩	6.26	3.79	1.24	27.71			
2130 M31	石棚	安山岩	2.21	2.05	0.41	1.8				2220 L33	削痕	安山岩	4.41	3.15	0.75	10.76			
2131 M31	石棚	安山岩	2.9	3.18	0.5	3.75				2221 L34	削痕	安山岩	3.56	2.68	0.75	6.27			
2132 M31	石棚	安山岩	2.59	1.85	0.36	1.74				2222 M23 R10	削痕	安山岩	3.6	2.13	0.19	6.64			
2133 M31	石棚	安山岩	2.23	1.7	0.4	1.47				2223 M24 R7	削痕	安山岩	3.02	2.4	0.59	3.77			
2134 M32-33	石棚	安山岩	1.83	1.6	0.3	0.75				2224 M29	削痕	安山岩	3.45	1.81	0.55	4.01			
2135 N30 R4	石棚	安山岩	2.5	2.02	0.34	1.13				2225 M30 R10	削痕	安山岩	2.86	2.63	0.73	8.19			
2136 N11 SK026	石棚	安山岩	1.48	2.05	0.56	1.66				2226 M31 R18	削痕	安山岩	2.48	3.6	0.71	8.56			
2137 J18 SK029	石棚	安山岩	2.15	2.36	0.46	2.3				2227 M32 R33	削痕	安山岩	2.59	1.55	0.65	2.76			
2138 A3~ SK034	石棚	安山岩	2.13	2	0.5	1.25				2228 J18 SK029	削痕	安山岩	3	2.7	0.65	6.27			
2139 J18 SK029	石棚	安山岩	3.33	2.05	0.36	1.74				2229 L17 SK031	削痕	安山岩	2.25	2.68	1.08	8.21			
2140 F25 竹节 SK054	石棚	安山岩	1.72	1.46	0.35	0.61				2230 A3~ SK034	削痕	安山岩	3.75	7.42	1.07	37.34			
2141 F25 竹节 SK054	石棚	安山岩	2.43	1.87	0.34	1.77				2231 F21 SK040	削痕	安山岩	3.62	5.33	1.2	20.8			
2142 SP1005	石棚	安山岩	2.8	2.21	0.46	1.56				2232 H27 SK046	削痕	安山岩	3.1	2.7	0.92	6.71			
2143 上段	石棚	安山岩	2.66	1.97	0.48	2.29				2233 L30-32 SK073	削痕	安山岩	3.15	2.08	0.55	3.05			
2144 上段	石棚	安山岩	3.07	2.08	0.41	1.78				2234 上段	削痕	安山岩	2.86	2.65	0.92	6.56			
2145 上段	石棚	安山岩	2.67	1.75	0.47	1.5				2235 上段	削痕	安山岩	3.63	3.47	1.15	19.62			
2146 上段	石棚	安山岩	2.55	1.81	0.38	1.89				2236 上段	削痕	安山岩	2.76	3.05	1.02	9.14			
2147 上段	石棚	安山岩	3.06	2.25	0.44	2.08				2237 上段	削痕	安山岩	2.04	1.74	0.3	1.18			
2148 上段	石棚	安山岩	1.86	1.46	0.57	1.76				2238 上段	削痕	安山岩	2.2	1.73	0.5	1.7			
2149 上段	石棚	安山岩	2.76	2.4	0.82	5.25				2239 上段	削痕	安山岩	4.69	2.32	0.87	10.79			
2150 中段	石棚	安山岩	3.1	2.45	0.46	2.72				2240 上段	削痕	安山岩	3.2	1.66	0.94	6.33			
2151 中段	石棚	安山岩	2.56	1.62	0.41	1.13				2241 上段	削痕	安山岩	7.02	3.33	1.58	23.47			
2152 中段	石棚	安山岩	2.26	1.4	0.36	0.84				2242 上段	削痕	安山岩	3.27	3.05	0.92	8.84			
2153 中段	石棚	安山岩	3.22	1.87	0.38	1.58				2243 上段	削痕	安山岩	4.92	2.3	0.98	6.4			
2154 中段	石棚	安山岩	2.87	2.3	0.48	2.41				2244 上段	削痕	安山岩	4.3	3.2	1.27	20.36			
2155 中段	石棚	安山岩	2.15	1.52	0.4	0.88				2245 上段	削痕	安山岩	6.93	6.2	1.2	42.99			
2156 中段	石棚	安山岩	2.73	2.26	0.41	1.69				2246 上段	削痕	安山岩	3.75	2.65	1.33	12.22			
2157 中段	石棚	安山岩	1.85	1.75	0.5	1.42				2247 上段	削痕	安山岩	2.31	2.79	0.6	3.71			
2158 中段	石棚	安山岩	2.2	2.52	0.43	2.31				2248 上段	削痕	安山岩	3.23	2.66	0.75	6.36			
2159 中段	石棚	安山岩	2.62	2.05	0.42	2.23				2249 中段	削痕	安山岩	3.6	5.1	0.77	14.97			
2160 中段	石棚	安山岩	2.8	1.81	0.35	1.27				2250 中段	削痕	安山岩	2.85	2.92	0.83	6.15			
2161 中段	石棚	安山岩	3.3	2.31	0.62	3.36				2251 中段	削痕	安山岩	6.77	5.4	1.55	54.66			
2162 中段	石棚	安山岩	2.05	1.6	0.4	0.94				2252 中段	削痕	安山岩	2.89	3.7	1.35	11.29			
2163 中段	石棚	安山岩	1.99	1.63	0.31	0.74				2253 中段	削痕	安山岩	3.15	2.29	1	8.46			
2164 中段	石棚	安山岩	3.1	2.15	0.49	2.37				2254 中段	削痕	安山岩	3.12	1.81	0.62	3.55			
2165 中段	石棚	安山岩	2.15	1.76	0.38	1.63				2255 案出面	削痕	安山岩	9.08	6.98	1.75	108.2			
2166 中段	石棚	安山岩	2.08	2.1	0.37	1.83				2256 案出面	削痕	安山岩	5.45	4.42	0.62	18.02			
2167 中段	石棚	安山岩	3	1.87	0.38	1.83				2257 案出面	削痕	安山岩	2.37	2.61	0.54	2.74			
2168 案出面	石棚	安山岩	1.7	1.51	0.57	2.23				2258 案出面	削痕	安山岩	2.95	2.18	0.78	5.11			
2169 案出面	石棚	安山岩	1.6	1.43	0.5	1.4				2259 案出面	UF	安山岩	3.3	2.91	0.68	77.06			
2170 案出面	石棚	安山岩	2.1	1.62	0.4	1.36				2260 案出面	削痕	安山岩	3.63	4.58	1.51	4.96			
2171 案出面	石棚	安山岩	2.91	2.13	0.3	1.28				2261 案出面	削痕	安山岩	6.36	6.21	1.77	25.77			
2172 案出面	石棚	安山岩	2.05	2.92	0.49	2.48													



Ph.I I-II 地点上層遺構（南から）



Ph.2 2 地点全景（北西から）



Ph.3 I-I・II 地点(北から)



Ph.4 I-I・II 地点(南から)



Ph.5 I-I 地点(西から)



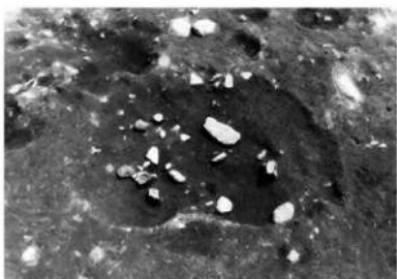
Ph.6 SK001(西から)



Ph.7 I-II 地点全景(南西から)



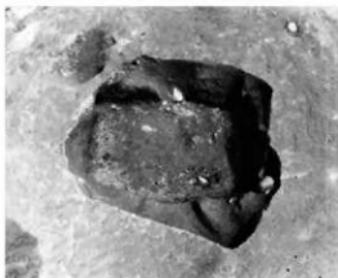
Ph.8 I-II 地点(南から)



Ph.9 SK046(北東から)



Ph.10 SK026(南から)



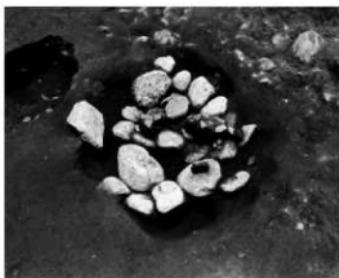
Ph.11 SK032(北西から)



Ph.12 SK033(南東から)



Ph.13 SK039(南東から)



Ph.14 SK039(東から)



Ph.15 SK039土層(東から)



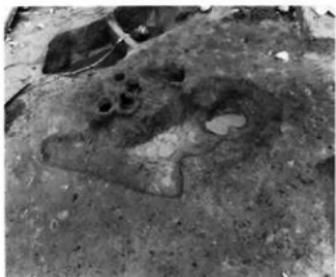
Ph.16 SK040(東から)



Ph.17 SK040土層(北から)



Ph.18 SK041(北から)



Ph.19 SK064(北西から)



Ph.20 SK065(北東から)



Ph.21 SK066(南東から)



Ph.22 I-II 地点南半 下層遺構(北東から)



Ph.23 SK069(東から)



Ph.24 SK072(東から)



Ph.25 含層掘削(西から)



Ph.26 繩文時代包含層調査(南西から)



Ph.27 I-III 地点(北東から)



Ph.28 SK110(南西から)



Ph.29 I-IV 地点(南東から)



Ph.30 SK201(南から)



Ph.31 I-V 地点(南東から)



Ph.32 SK253(北西から)



Ph.33 2地点(北西から)



Ph.34 2地点ビット集中部(北から)



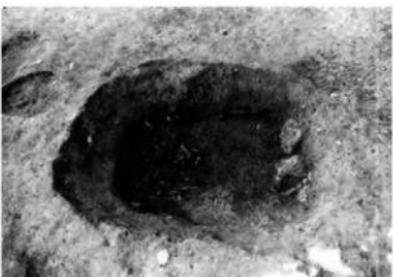
Ph.35 2地点(東から)



Ph.36 2地点(南東から)



Ph.37 SK301(南東から)



Ph.38 SK302(南から)



Ph.39 SB325(南から)



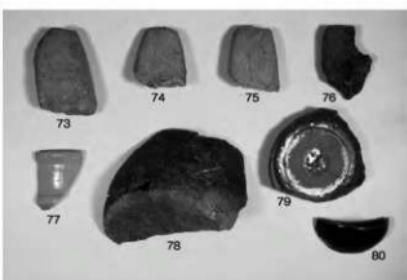
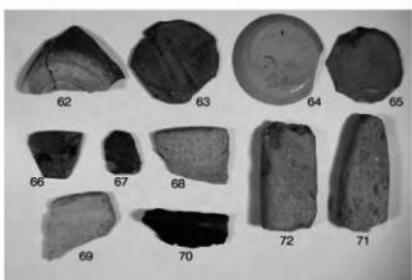
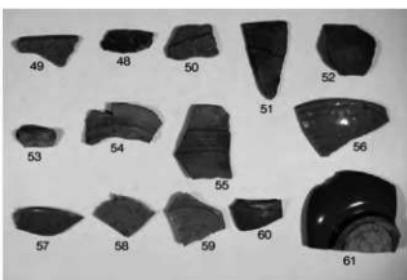
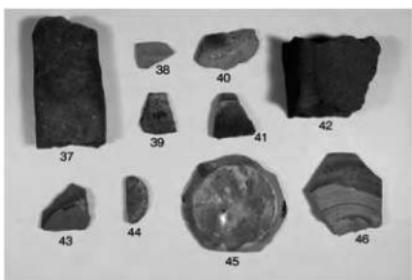
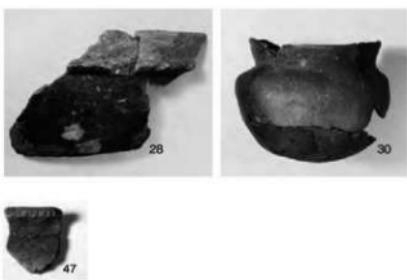
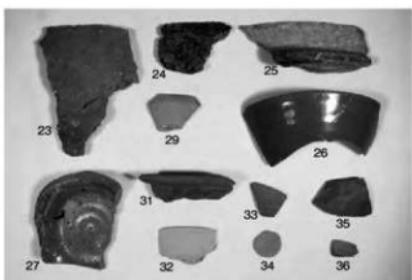
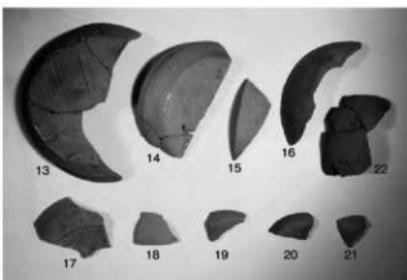
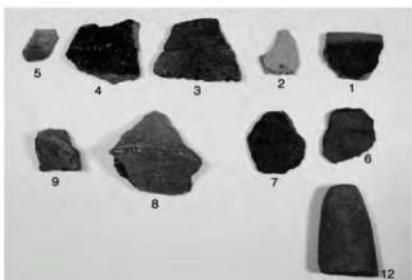
Ph.40 3地点(東から)

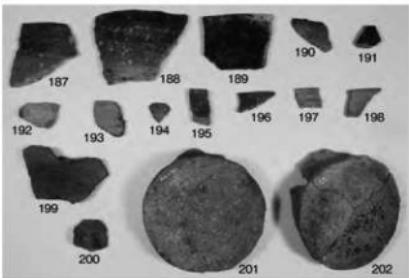
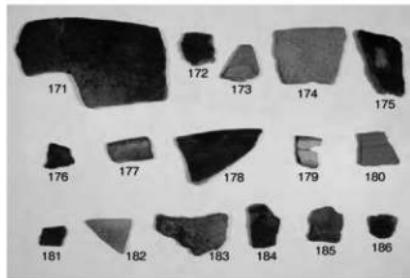
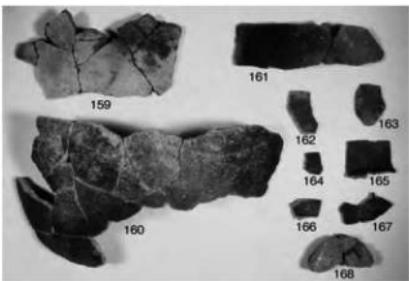
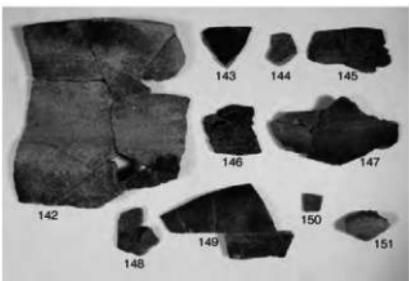
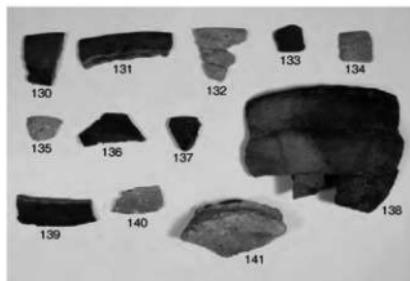
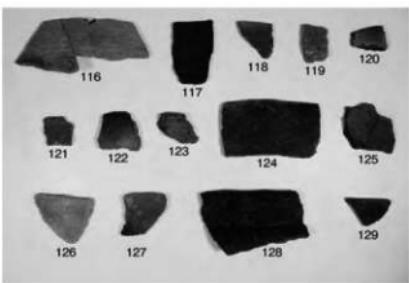
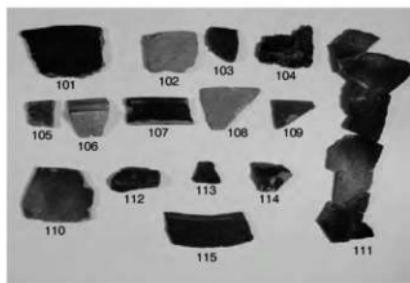


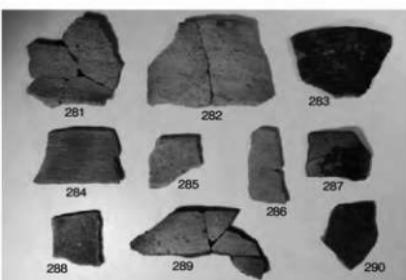
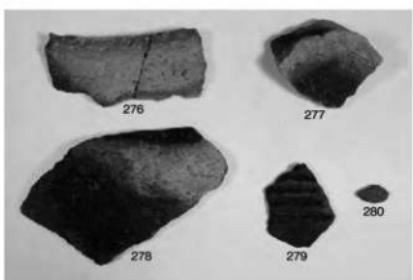
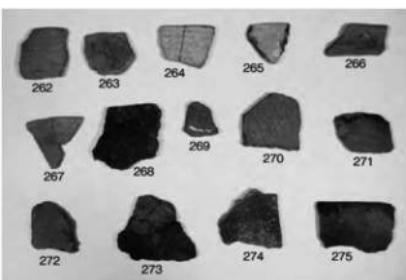
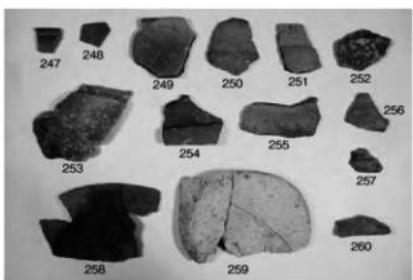
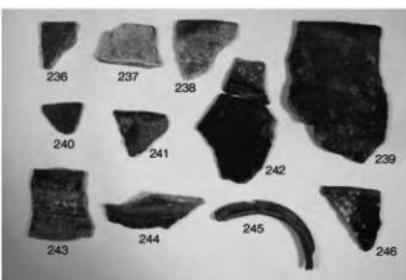
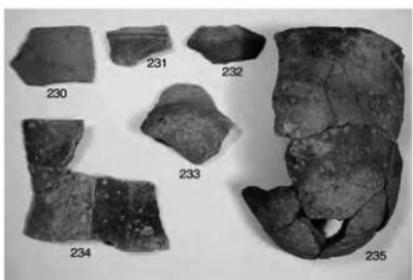
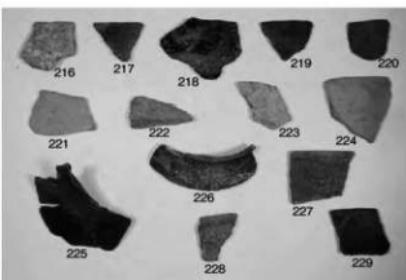
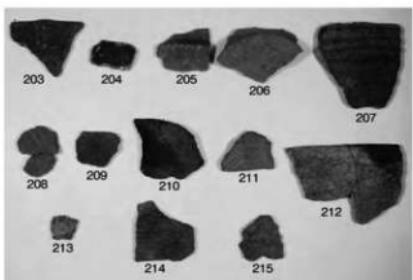
Ph.41 3地点遺物集中部(東から)

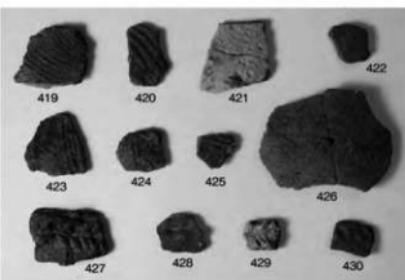
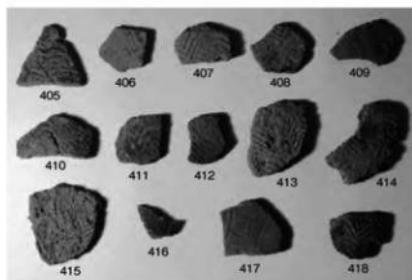
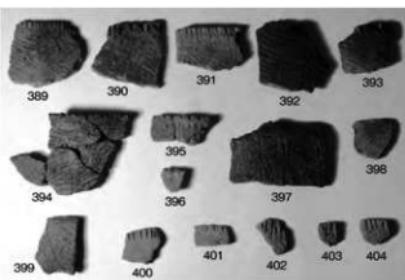
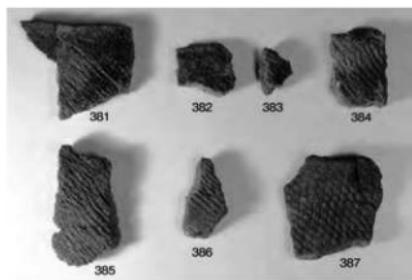
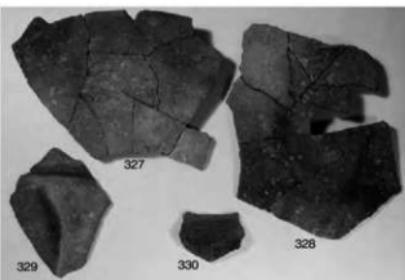
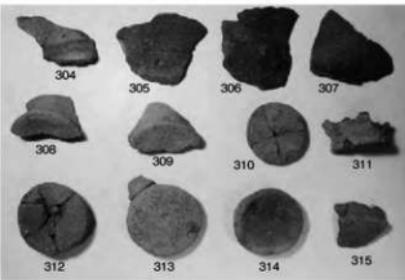
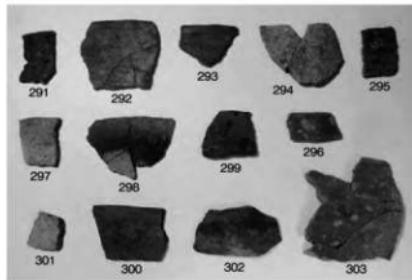


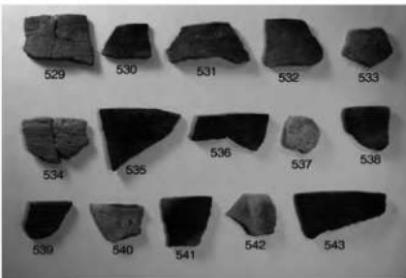
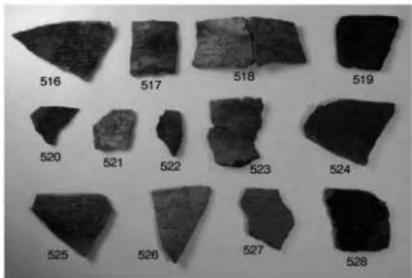
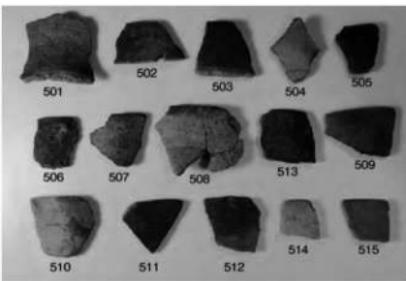
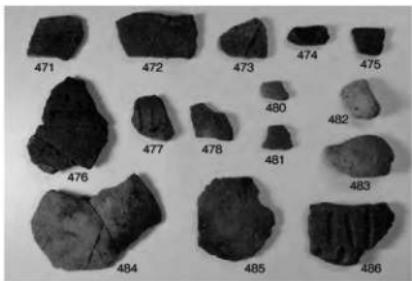
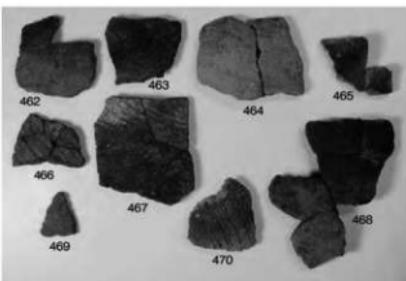
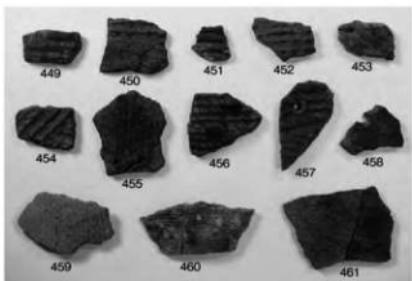
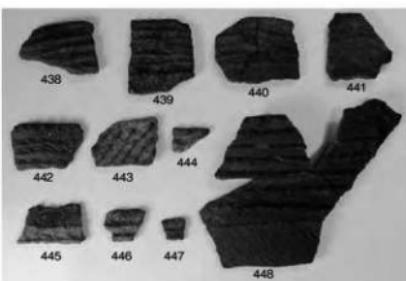
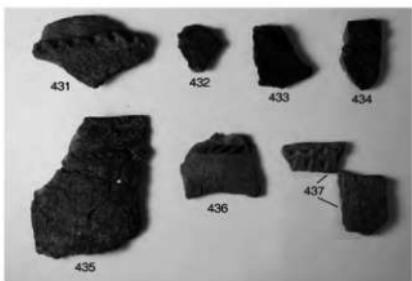
Ph.42 SK501遺物出土状況(南から)

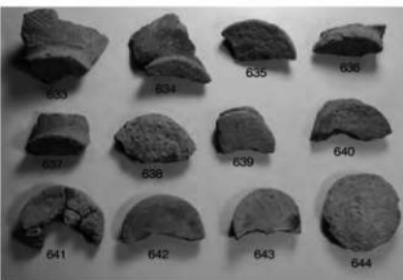
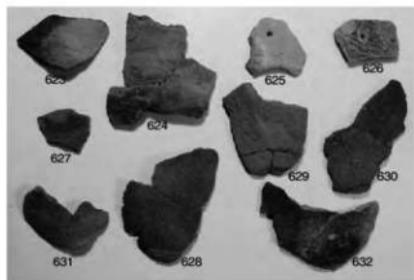
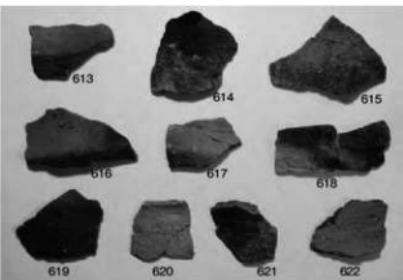
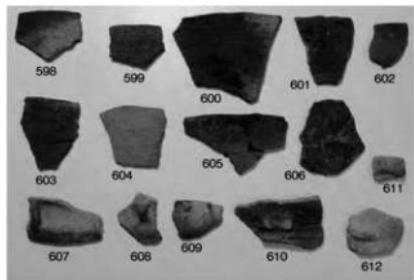
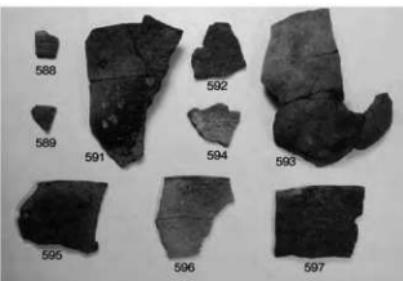
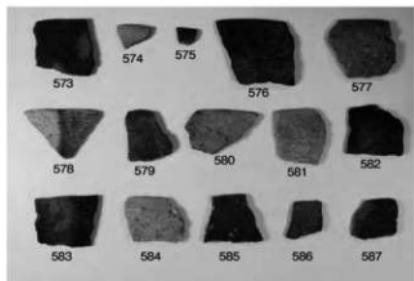
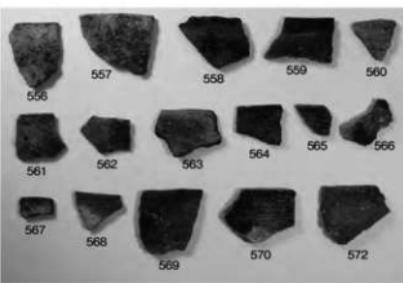
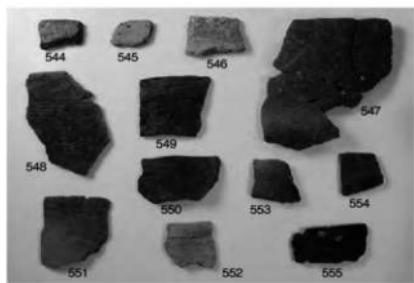


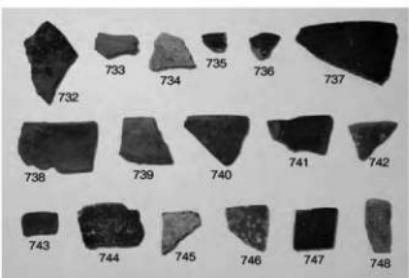
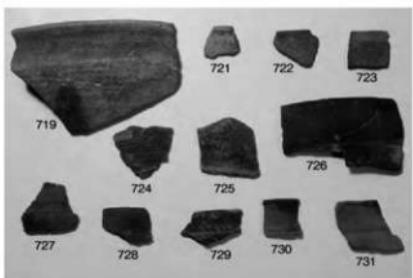
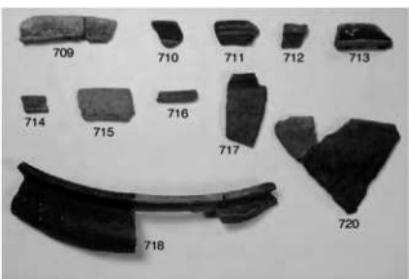
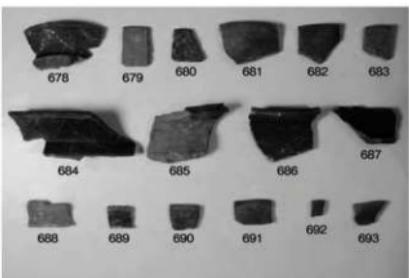
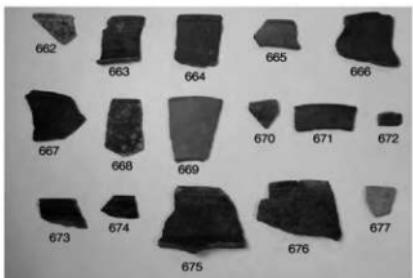
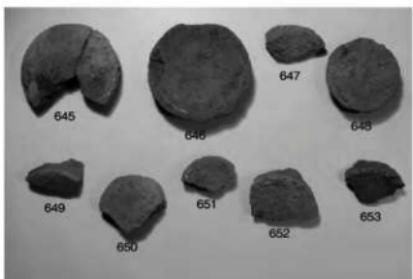


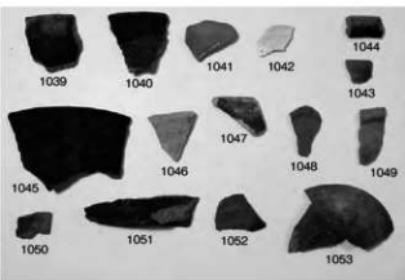
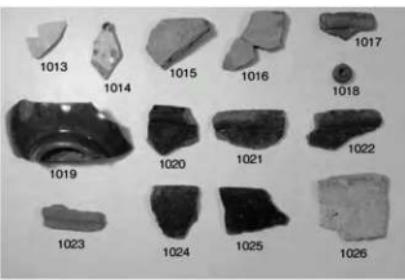
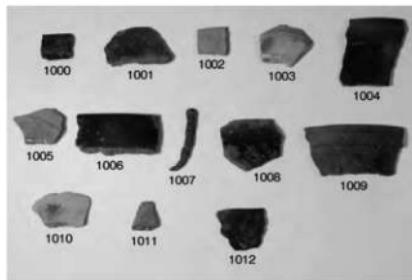
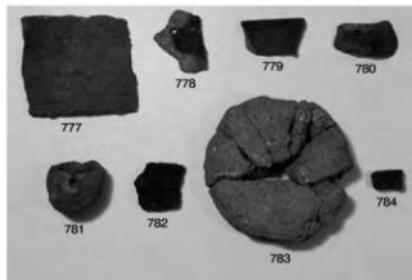
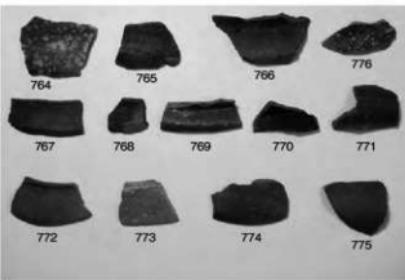
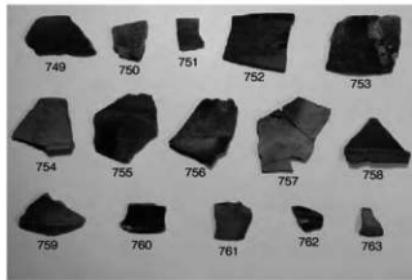


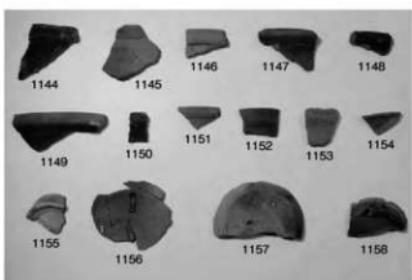
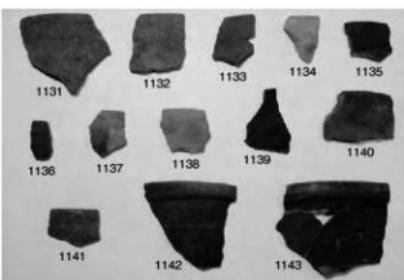
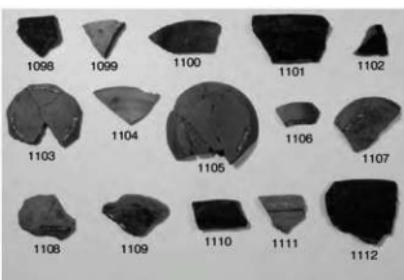
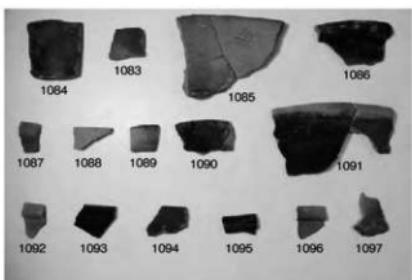
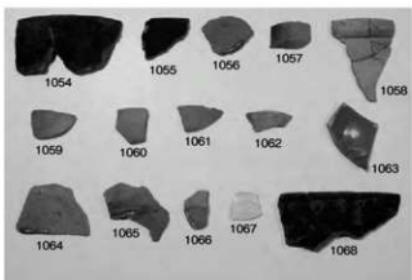


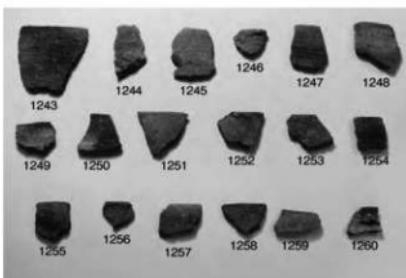
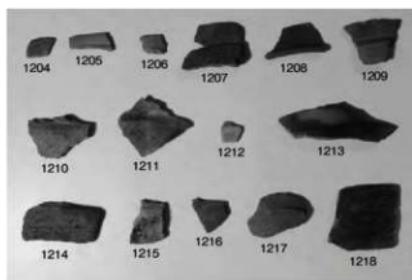
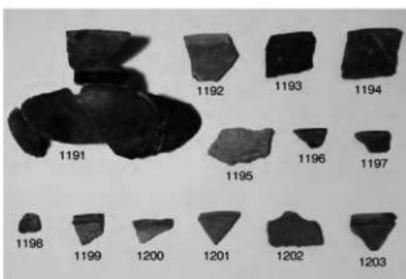
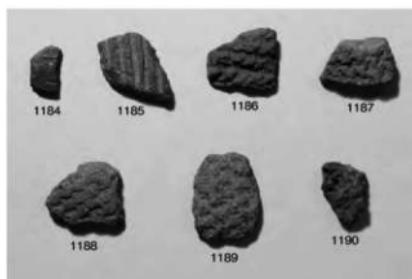
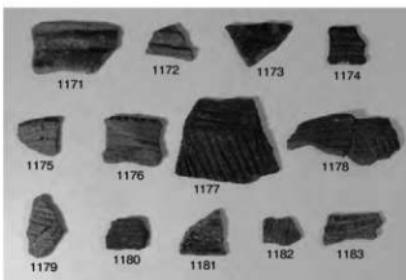


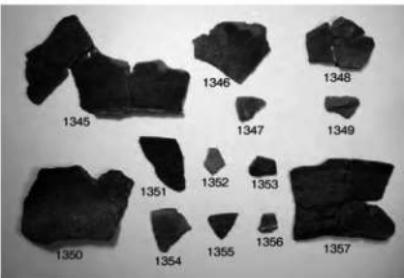
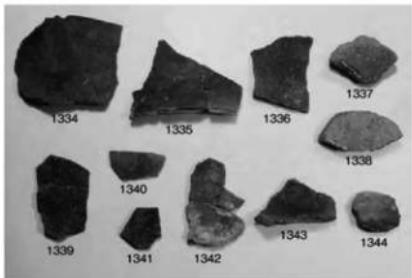
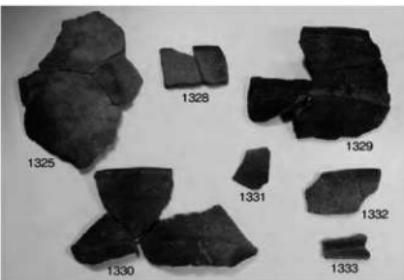
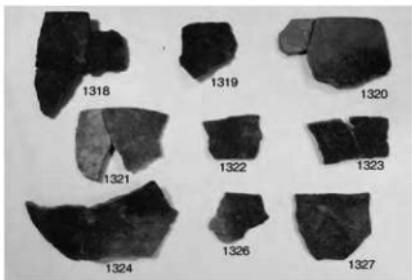
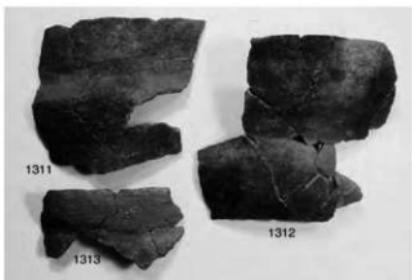
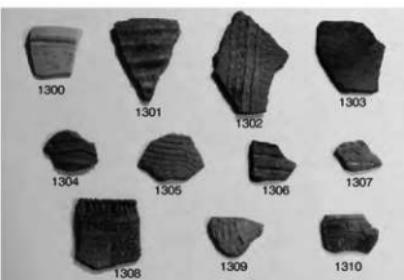
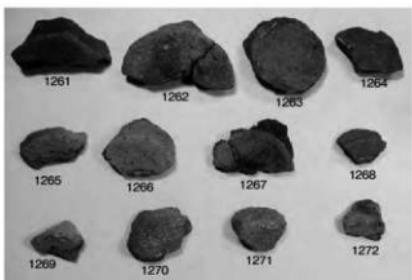


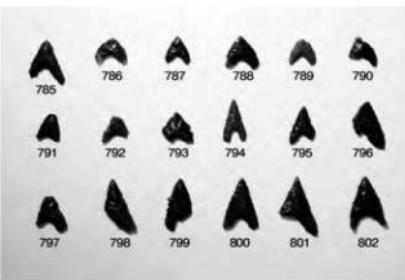
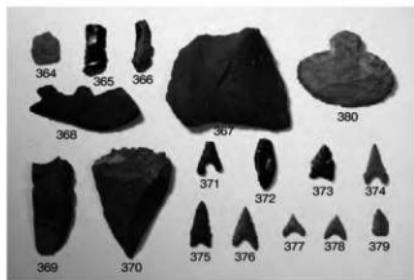
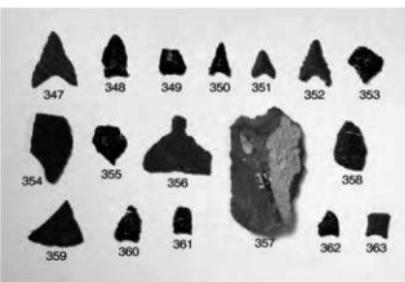
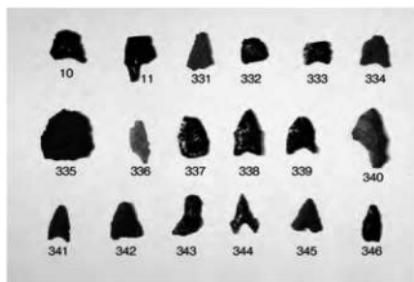
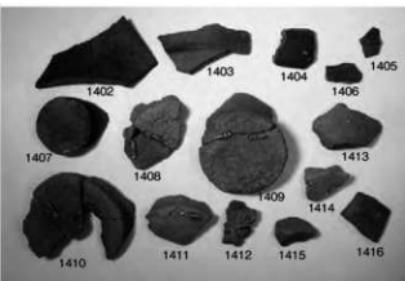
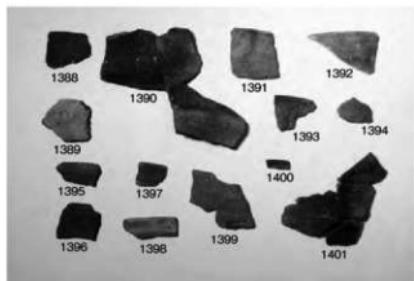
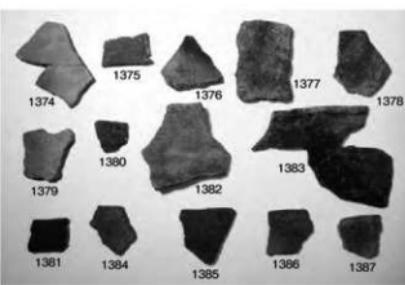
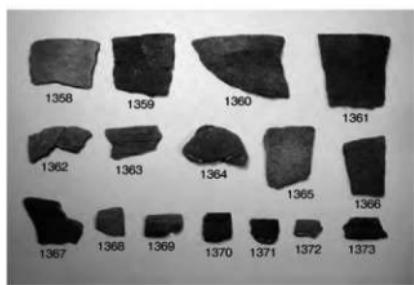


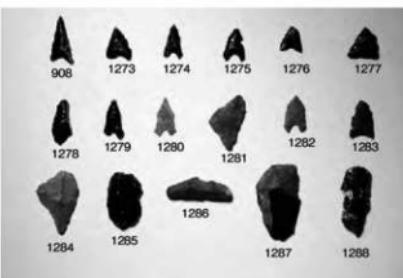
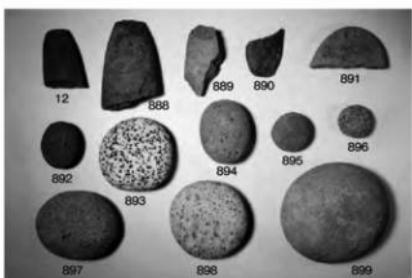
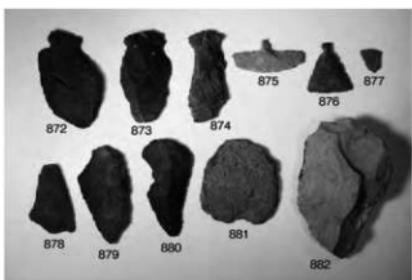
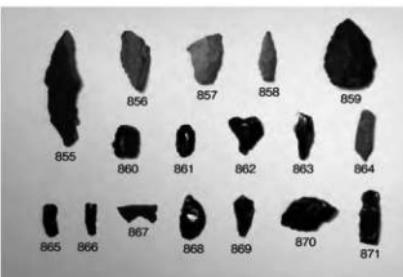
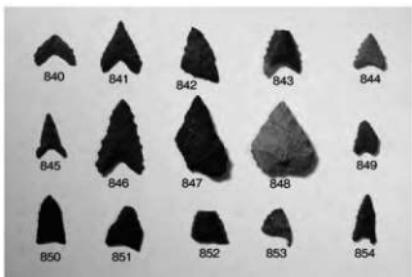
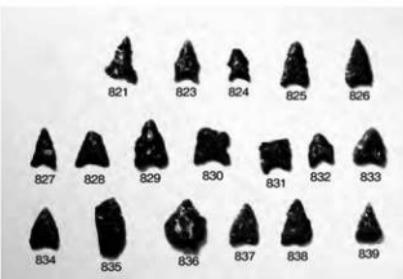
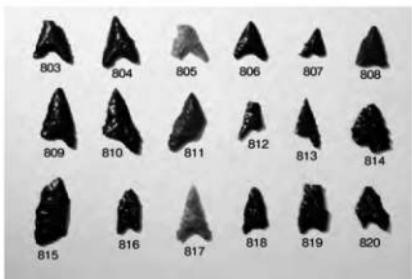


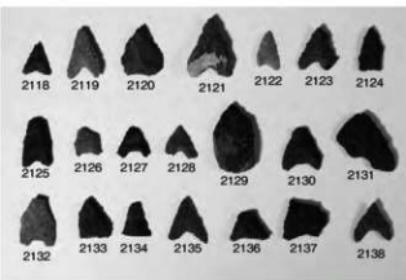
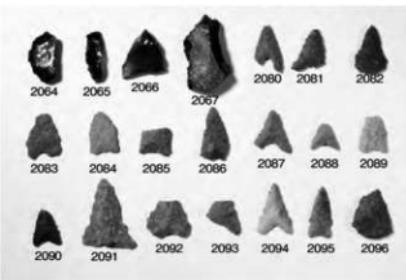
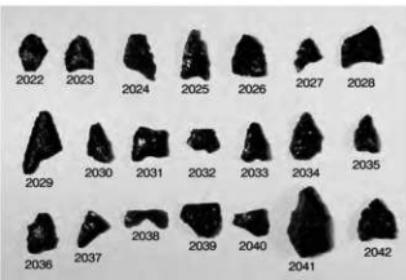
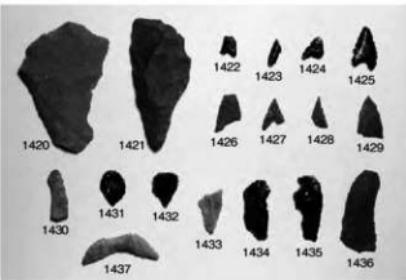


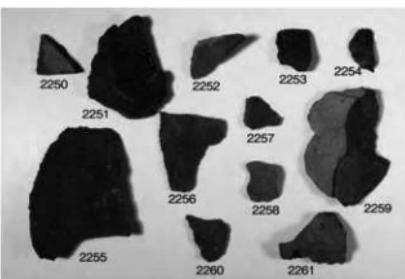
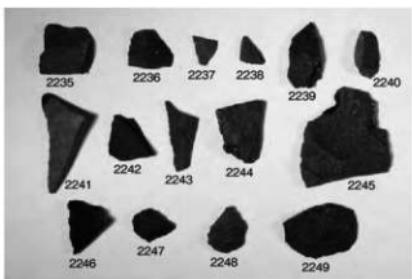
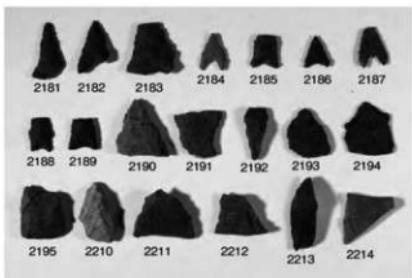












報告書抄録

ふりがな 書名	わきやまⅦ							
副書名	脇山Ⅶ 野中遺跡第1次調査の報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1196							
編著者名	池田祐司							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行年月日	2013年2月22日							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話:(092)711-4667							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
のなかいせき 野中遺跡	ふくおかし さから じ あかねだいせき 福岡市早良区大字脇山	40137	0813	33° 29' 129"	130° 21' 53"	910418 ～ 911014	6849m ²	圃場整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
野中遺跡	集落	旧石器、縄文時代早、前・晚期、中世後期	縄文時代晚期:土坑、包含層 中世:土坑、焼土坑、掘立柱建物	細石核 撲糸文・押型文・轟A式・轟B式・古墳式・黒川式 土器、石器、削器、石鏃、 石斧土師器、陶磁器、 滑石製品、土鍋	3地点で縄文時代の晚期を主体とした遺物が出土した。 中世の柱穴集中箇所があり 掘立柱建物が建つ。			
要約	検出した主な遺構・遺物は縄文時代早、前・晚期と15世紀前後で脇山A遺跡の様相と一致する。縄文時代の遺物は各所でみられ、1・2、2・3地点でまとめて出土した。特に1・2地点では黒川式を中心とする晚期の遺物が多数出土し遺構も見られた。早期、前期の遺物も出土し轟AからB式が継続的に見られ注目される。他の地点でも前期と晚期を中心とした遺物が出土した。中世では全城に焼土坑が確認できる。2地点では15世紀前後のピットを集中して検出しし屋敷地と想定できる。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1196集

脇山 VII

2013(平成25)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 松影堂印刷株式会社

福岡市博多区吉塚5丁目13番40号